先賢展本

せんけんてんぼん

大垣市制90周年記念　大垣ルネサンス先賢展記録誌

ごあいさつ

「大垣ルネサンス先賢展」は、市制九十周年記念事業「大垣ルネサンス先賢フェスティバル」の中核事業として開催してまいりました。

季節ごとに、「まちの個性」にちなんだ郷土の先賢を紹介する本事業は、多くの市民の皆様のご参加・ご参画による「まちづくり事業」となり、展示資料総数 千点、ご協力いただいた方 延べ五千人、来場者数 延べ二十六万人を数え、市制九十周年の節目を祝う一大事業となりました。

私たちは、温故知新の精神に立ち返り、郷土の先賢が切磋琢磨して生きた時代から多くの事を学ぶとともに、先賢の功績をとおして大垣の魅力を再発見することができました。

ここに、本事業を記録誌として残し伝えるとともに、この成果をもって、市制百周年に向けた、新しいまちづくりを皆様とともに、実現してまいりたいと存じます。

おわりに、「大垣ルネサンス先賢展」の開催にあたり、ご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げ、ごあいさつといたします。

平成二十一年三月

大垣市長　小川　敏

本誌掲載内容について

■本誌は、大垣市制90周年記念事業「大垣ルネサンス先賢フェスティバル」の中核事業として、季節ごとに「まちの個性」をテーマに郷土の先賢を顕彰した「大垣ルネサンス先賢展」についての記録誌です。

テーマ	開催期間
春に観る「花と音楽のまち」大垣	平成20年4月26日(土)～平成20年5月25日(日)
夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣	平成20年6月28日(土)～平成20年7月27日(日)
秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣	平成20年10月4日(土)～平成20年11月3日(月・祝)
冬に輝く「産業と防災のまち」大垣	平成21年2月7日(土)～平成21年3月8日(日)

■「大垣ルネサンス先賢展」でご紹介した31人の郷土の先賢について、展示資料などを解説とともに掲載しています。人物の敬称は略しました。

■紙面の都合上、すべての展示資料の画像を掲載していません。展示資料の詳細については、P.152の「展示(掲載)資料一覧」をご覧ください。

■年譜の各事項の末尾の数字(「年齢」)は、生まれた年を「1」としてカウントした数字を掲載しており、その時点の年齢を正確に示すものではありません。年齢の目安としてご覧ください。

■本誌は、大垣市公式ホームページで「PDF形式」及び「e-Book形式」によりご覧いただくことができます。 http://www.city.ogaki.lg.jp/

解説者のプロフィール

大垣市の生涯学習推進キャラクター
ハリヨ博士

清流で遊び、環境のシンボルとしての地道な活動が認められ、市制90周年を記念して「市の魚」に認定された。注目度急上昇中！

大垣市のかがやきライフ活動推進キャラクター
スイトくんスイスイちゃん

市民の皆さんの「かがやきライフ」活動を応援するため、「水都(スイト)大垣」にちなみ誕生した。

大垣市制90周年記念　大垣ルネサンス先賢展記録誌

先賢(せん)展(けん)本(てん)(ぽん)

CONTENTS

春に観る『花と音楽のまち』大垣		
近代植物学の開拓者	飯沼　慾斎	4
日本音楽を西洋に紹介した琴の名手	戸田　極子	8
大垣から世界へ羽ばたいた天才ピアニスト	小倉　末子	10
上石津町出身の偉大なる作曲家	江口　夜詩	12
墨俣町が生んだ眩惑のピアニスト	戸田　義明	16
夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣		
わが国最初の工学博士で日本鉄道界のリーダー	松本　荘一郎	18
鉄道界の元老で南満州鉄道社長の工学博士	野村　龍太郎	26
電気鉄道業界の先駆者で養老鉄道の創立者	立川　勇次郎	28
鉄道敷設の大家で橋梁学の工学博士	那波　光雄	32
船町湊の発展に尽くした船問屋	谷　九太夫(木因)	40
秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣		
芭蕉と交友のあった大垣俳壇の指導者	谷　木因	42
西洋医学の先駆者	江馬　蘭斎	44
墨竹画を得意とした女流漢詩人	江馬　細香	48
幕末の漢詩人で勤皇の志士	梁川　星巌	50
星巌とともに詩画の才能を発揮した才女	張　紅蘭	52
大垣藩の藩政改革の推進者	小原　鉄心	54
梵語学の道を究めた文学博士	南条　文雄	56
東大総長をつとめた大学教育の先駆者	松井　直吉	60
近代外科医学の最高峰に立った医学博士	佐藤　三吉	64
近代図書館学を確立した文学博士	和田　万吉	66
地質学を大衆化した理学博士	脇水　鉄五郎	74
社会教育育ての親	関屋　龍吉	76
冬に輝く「産業と防災のまち」大垣		
鵜森伏越樋の建設に命をかけた大垣藩士	伊藤　伝右衛門	78
世界初の地震学教授となった理学博士	関谷　清景	80
治山・治水に尽くした大垣輪中の恩人	金森　吉次郎	82
世界的なスポーツ用品メーカーを創業した実業家	水野　利八	88
産業の振興と学校教育の充実に尽くした実業人(名誉市民)	土屋　義雄	94
青少年教育に尽力し、国産バルブコアを開発した企業人(名誉市民)	小川　宗一	100
市体連生みの親となった決断と人情の経営者(名誉市民)	須崎　潔	106
スポーツ・文化の振興にも貢献した日本のトラック王(名誉市民)	田口　利八	108
経済界の活性化にリーダーシップを発揮した文化人(名誉市民)	土屋　斉	114
事業概要		
春に観る「花と音楽のまち」大垣		120
夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣		126
秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣		136
冬に輝く「産業と防災のまち」大垣		142
関連事業		150
関連データ		
展示(掲載)資料一覧		152
協力者等一覧・主な参考文献		158

春に観る『花と音楽のまち』大垣

近代植物学の開拓者

飯沼慾斎

天明3年～慶応元年
（1783～1865）

新町の町年寄であった西村信左衛門の二男として伊勢亀山で生まれる。幼い頃から向学心に燃え、母方の実家　竹島町の飯沼定九郎を頼り、その弟で俵町の町医　飯沼長顕（初代龍夫）のもとで儒学・医学の勉強に励んだ。のちに長顕の娘と結婚し、二代龍夫として飯沼家を継ぐと、江戸で蘭方医学を学び、大いに名声を博した。医業を義弟に譲り、現在の長松町に平林荘を築いて隠退した後、三十余年にわたって自然科学の研究に没頭。日本で最初の体系的な植物図鑑「草木図説」を著し、わが国における近代植物学の礎を築いた。また、人体解剖、種痘、写真術の研究などにも取り組んだ。

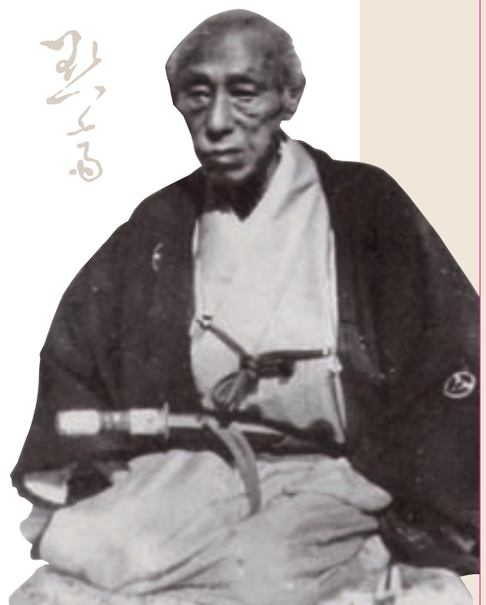
美濃路大垣宿軒別絵図面（部分）［大垣市立図書館蔵］
天保年間に作成された絵地図。俵町西南角に慾斎のいた医師飯沼龍夫宅があった。現在は道路上になっており、昭和59年（1984）、「飯沼慾斎生誕二百年記念事業会」によって「飯沼慾斎邸跡」の碑が建立されている。

「飯沼慾斎邸跡」碑
［大垣市俵町地内］

■伊勢亀山（東海道の宿場町）で生まれた慾斎は、近くに住む叔父が営む店「鮫屋」の帳場で遊ぶうちに文字や計算を覚えた。また、店で見聞きする、めずらしい品物や、各地の話の中で、特に慾斎が関心を示したのは、漢方医や学問の事だった。そして、寛政六年（一七九四）、本格的に学問を習おうと決意し、学問に理解のある母の実家である大垣へひとり旅立った。

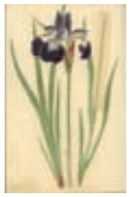
明治時代の平林荘
［大垣市立荒崎小学校蔵］

■慾斎が植物学に本格的に取り組んだのは、天保三年（一八三二）、五十歳の時であった。蘭学医として活躍し、高い見識と地道な努力が藩主から認められ、御目見えと帯刀が許されるなど名実ともに高名な医者であったが、医者の仕事を妻の弟長栄に譲り、長松に平林荘を築いて、植物学の研究に熱中した。

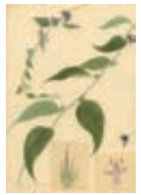


飯沼慾斎『稿本 草木図説』［個人蔵］
慾斎による「草木図説」の自筆稿本は、全27巻からなり、計1618点の草類を収録している。すべてに色彩が施され、解説が記されている。各巻の表紙には、掲載植物名の一覧があり、目次の役割をはたしている。

レンゲ



アヤメ



スズカケソウ

クロユリ

■慾斎の調査・研究活動は徹底しており、自ら伊吹山、白山、御岳をはじめ、富山、愛知、三重、和歌山の山地奥深くに入って植物を採集した。野山から帰ると、山のように採集した植物を一本一本手に取り、大きさや形や色合いはもちろんのこと、顕微鏡を入手して、雄しべや雌しべの子房など、肉眼の届かないところまで確かめた。

■『草木図説』は、スウェーデンの植物学者リンネによる植物分類法で、日本の植物（草類一二一五種、木類六百余種）を分類した植物図鑑にあたるものである。慾斎は、幕末期の弘化元年（一八四四）から慶応元年（一八六五）にかけて、リンネによる植物分類法を紹介した「泰西本草名疏」や「植学啓原」などの著作を参考にして、『草木図説』三十巻（草部二十巻・木部十巻）を著した。出版にあたっては、慾斎自身木版づくりにも参加し、墨書きの版下（写し）をつくった。葉の表面は黒、裏は白としたり、茎や葉脈に陰影をつけるなど、工夫をこらすとともに、余白には、観察した花や果実などの解剖図を正確に拡大して記録した。また、その次頁には、説明を事細かに記した。

伊藤圭介『泰西本草名疏』［東山動植物園蔵］

■文政十二年（一八二九）刊。ツュンベリー著『日本植物誌』をもとに、日本産植物の学名をＡＢＣ順に並べ、対応する和名と漢名を記したもの。これによりリンネによる植物分類法が初めて日本に紹介された。日本で初めて「雄しべ」、「雌しべ」、「花粉」などの言葉を用いている。
伊藤圭介［享和三年～明治三十四年（一八〇三～一九〇一）］は、名古屋出身の植物学者。シーボルトから教えを受け、維新後は東京大学に迎えられ、明治二十一年（一八八八）、日本初の理学博士となった。

宇田川榕菴『植学啓原』［大垣市立図書館蔵］

■天保四年（一八三三）刊。リンネの著作などを参考に編纂した日本最初の体系的な西洋植物学の紹介書。伊藤圭介の『泰西本草名疏』は、リンネによる植物分類法の紹介にとどまったが、榕菴は、文政五年（一八二二）に西洋植物学の概略的入門書「菩多尼訶経」を刊行し、のちに本書によって全体像を示した。本書は明治初期まで、植物学の入門書となった。
宇田川榕菴［寛政十年～弘化三年（一七九八～一八四六）］は、大垣藩医江沢養樹の長男として生まれ、文化八年（一八一一）、蘭学の中心的存在であった宇田川玄真の養子となった。わが国における近代植物学の礎を築いた慾斎と榕菴は、いずれも大垣ゆかりの人物であった。

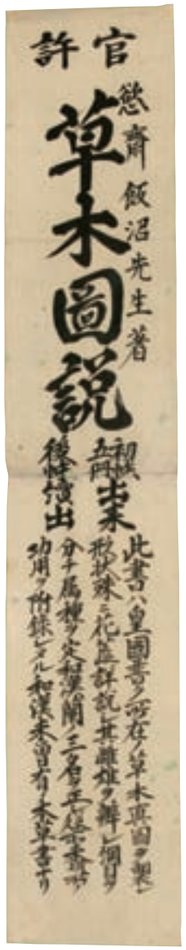
■『草木図説』の科学的な分類法と正確な図は高く評価され、慾斎の没後においても、田中芳男「新訂　草木図説」（明治七年刊）、牧野富太郎「増訂　草木図説　草部」（明治四十年刊）、北村四郎「草木図説　木部」（昭和五十二年刊）というように新訂・増訂版が刊行され広く活用された。また、国内のみならず、自然科学の先進国の研究者からも高く評価され、フランセー・サバチェ（フランス）、ブレッドシュナイダー（イギリス）、マクシモビッチ（ロシア）等の著書にも紹介されている。

田中芳男
『新訂 草木図説』
［個人蔵・大垣市立図書館蔵］
明治7年（1874）刊。
全20巻。

ハリヨ博士のコラム

『新訂　草木図説』の附言の著者は、慾斎の長男長恪（ちょうかく）の養子となった飯沼（五作）長蔵である。田中芳男は伊藤圭介に師事した博物学者で関屋龍吉（P.76）の義父にあたる。

■慾斎は、文政十一年（一八二八）岐阜県内で初めての人体解剖をおこなった。十二月、弟子で高須（現・海津市高須町）藩医の浅野恒進と今村墓地（本今町）で刑死体を解剖している。平林荘に隠退しても慾斎は、新しい学問の知識を積極的に吸収していた。嘉永二年（一八四九）には、岐阜県初と思われる種痘を三十人程に実施した。また、慾斎の研究は医学・植物学のみならず動物学の分野にもおよんだ。晩年には、大垣藩の要請により大垣藩舎密（せいみ）局において銃砲火薬製造の研究に従事したり、写真術を研究したりと多才な科学者であった。



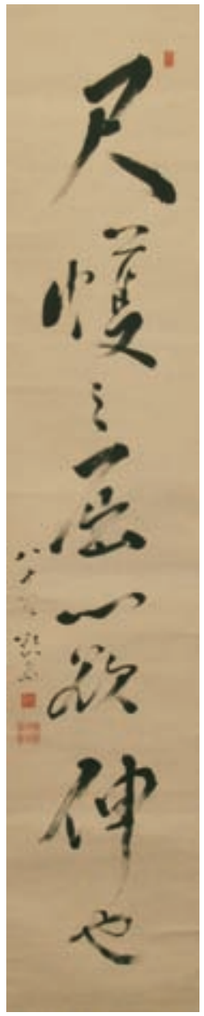
「草木図説」の広告貼紙［東山動植物園蔵］

「此書ハ皇国普ク所在ノ草木真図ヲ製シ形状殊ニ花蕋詳説シ其雌雄ヲ弁シ綱目ヲ分チ属種ヲ定メ和漢蘭ノ三名ヲ正シ従前未明所ノ功用ヲ附録シタル和漢未曽有ノ本草書ナリ」

解剖図［東山動植物園蔵］

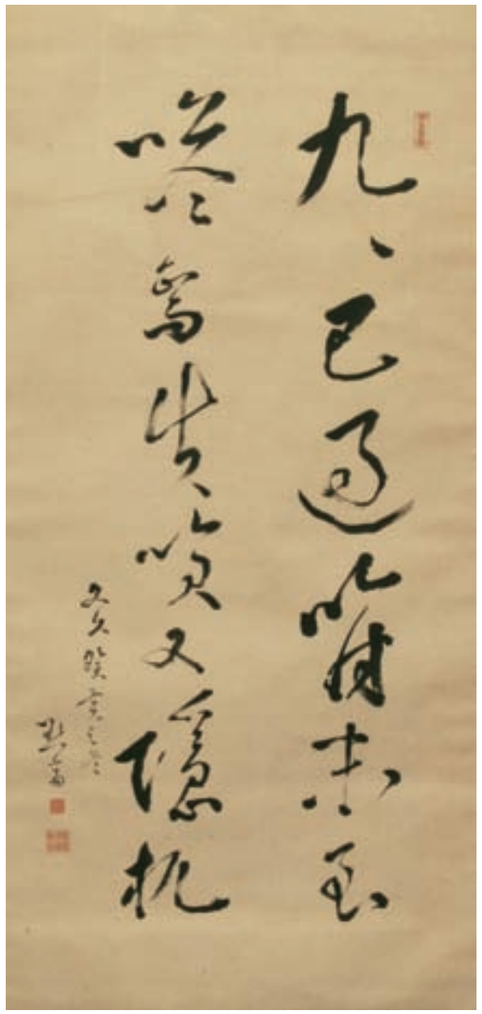
頭部解剖図［東山動植物園蔵］

魚禽譜（ぎょきんふ）［東山動植物園蔵］



詩幅［個人蔵］

「尺蠖之屈以欲伸也」
尺取り虫は全身でかがむ。それは、あとで大きく伸びようとするためである。



詩幅［大垣城蔵］

「九九已過符（ふ）未至　塔焉（とうえん）失笑又隠机」
八十一歳はすでに過ぎたけれど、仕事はまだできあがっていない。しかし、そんなにあせってもしかたがないとひとり笑いしながら、また我を忘れて机に向かっている。

飯沼慾斎関係年譜

		年齢
天明3年	1783	伊勢亀山で生まれる	1
寛政6年	1794	学問を志し大垣へ出て飯沼長顕に学ぶ	12
寛政12年	1800	この頃、京都で福井榕亭に漢方医学を学ぶ	18
文化元年	1804	飯沼長顕の長女と結婚し飯沼家を継ぐ 本草学の大家　小野蘭山に入門する	22
文化6年	1809	江馬蘭斎の門人　吉川広備に蘭学を学び蘭方医を志す	27
文化7年	1810	江戸で宇田川榛斎・藤井方亭から蘭方医学を学ぶ	28
文化11年	1814	大垣に帰り、蘭方医として俵町で開業する	29
文化12年	1815	養父　長顕の家督を継ぐ	33
文政5年	1822	江馬活堂、吉川三英らと西洋の書物を会読し精通する	40
文政10年	1827	大垣藩主の御目見え・帯刀を許される	45
文政11年	1828	岐阜県初の人体解剖を行う	46
天保3年	1832	家督を譲り、長松村に別荘「平林荘」を築き隠退する	50
弘化元年	1844	この頃、「草木図説」を起筆する	62
嘉永2年	1849	種痘にとりくむ	67
嘉永4年	1851	伊藤圭介から高倍率の顕微鏡を入手する	69
嘉永5年	1852	「草木図説前篇引」を著す 写真術の研究をはじめる	70
安政元年	1854	「草木図説」の出版届を天文台に提出する	72
安政3年	1856	「草木図説」草部第一帙を出版する	74
安政6年	1859	この頃大垣藩舎密局で鉄砲火薬製造を研究する	77
文久元年	1861	「草木図説」草部第二帙・第三帙を出版する 幕府蕃書調所物産学出役に推されるが辞退する	79
文久2年	1862	「草木図説」草部第四帙を出版する	80
慶応元年	1865	永眠	83

春に観る『花と音楽のまち』大垣

日本音楽を西洋に紹介した琴の名手

戸田極子（とだきわこ）

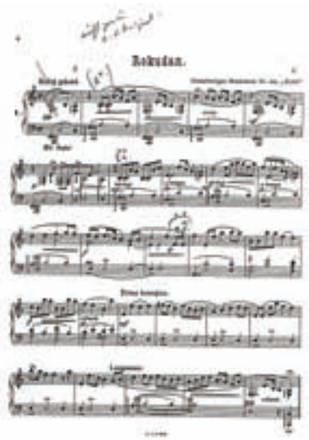
安政4年～昭和11年
（1857～1936）

明治の元勲岩倉具視（げんくん ともみ）の長女として生まれ、最後の大垣藩主（十一代）戸田氏共（うじたか）夫人となった。生まれながらに身についた品位や社交性、その容貌は「鹿鳴館の名花」と称された。後に、オーストリア・ハンガリー兼スイス特命全権公使に任命された夫氏共と四人の子女らとともにウィーンへ赴任。英語やダンスを得意とした上に、山田流琴の名人でもあり、公使館の正月行事やレセプションの席上で琴を演奏したとされる。戸田家令嬢のピアノ教師をつとめたボクレットを通じて、日本の箏曲（そうきょく）のすばらしさを知った大作曲家ブラームスが、極子の奏でる「六段」の調べを聴きながらピアノ用に採譜（さいふ）したという。

鹿鳴館スタイルの極子［個人蔵］

■明治十六年（一八八三）、外国からの賓客（ひんきゃく）を接待する施設として鹿鳴館が建設された。二階には大舞踏場があり、ここで繰り広げられる西洋風ダンスが鹿鳴館の名声を一層高からしめることとなった。毎週一回開催された会合では、常時戸田夫妻が出席し、極子の美貌とダンスは、外国の大使、公使の称賛の的となった。また、岩倉具視の令嬢であることからたちまち明治社交界の花形的存在となった。

ウィーン時代の戸田公使一家［「戸田氏共公」から転載］
後列左から2人目が極子、3人目が夫氏共（うじたか）。後方に岐阜提灯が見られる



ブラームスの書き込みのある楽譜『日本の民族音楽（日本民謡集）』（複製）
［大垣市教育委員会蔵］

■明治二十一年（一八八八）刊。ウィーン楽友協会に保管されている「ブラームスの遺産」とされた資料から発見された。ブラームスの鉛筆による書き込みが随所にみられる。表紙には、最上段に「ウィーン駐在日本帝国公使戸田伯爵閣下（はくしゃくかっか）に謹（つつし）んで献呈（けんてい）」と印刷されている。中央には「日本の民族音楽（日本民謡集）」というタイトルがついており、その下に「手書きの原譜にもとづく歌曲および器楽曲集」、そして「ハインリッヒ・フォン・ボクレット教授により、和声づけおよびピアノ曲に編曲」と記されている。この楽譜の発見をきっかけに、昭和六十二年（一九八七）五月二日、大垣市文化会館にて、「ウィーンと大垣をつなぐ音楽のかけ橋交歓会」が開催された。

守屋多々志画『ウィーンに六段の調（ろくだん しらべ）（ブラームスと戸田伯爵極子夫人）』
［大垣市守屋多々志美術館蔵］

■大垣市出身の文化勲章受章者　故守屋多々志（もりやただし）画伯の作品。平成四年（一九九二）第七十七回院展に出品された同作品は、夫氏共とともに外交官夫人としてウィーンに滞在していた極子が、ブラームスに六段という箏曲を演奏している場面が描かれている。逆三角形の大胆な構図を華やかな色調でまとめた守屋画伯円熟期の代表作である。

戸田極子関係年譜

	年齢
安政4年　1857　岩倉具視の長女として生まれる	1
明治4年　1871　大垣藩知事　戸田氏共と結婚する	15
明治10年　1877　長女　孝子誕生	21
明治11年　1878　長男　氏徳誕生	22
明治12年　1879　二女　米子誕生	23
明治14年　1881　三女　幸子誕生	25
明治16年　1883　東京日比谷に鹿鳴館が完成	27
明治17年　1884　「第1回婦人慈善市」に参加する	28
明治20年　1887　ウィーンへ赴く	31
明治21年　1888　ボクレット編「日本民謡集」が出版される	32
明治23年　1890　ウィーンから帰る	34
昭和11年　1936　夫　氏共永眠（83歳）	80
永眠	

ハリヨ博士のコラム

日本初のバザーは、明治17年（1884）6月、鹿鳴館において開催された「第1回婦人慈善市」とされている。極子もこのバザーに積極的に参加し、社会福祉に尽くした。
また、極子の二女米子の娘元子（伯爵徳川達成夫人）は、大正7年（1918）頃、小倉末子（P.10）からピアノの手ほどきを受けたという。

春に観る『花と音楽のまち』大垣

大垣から世界へ羽ばたいた天才ピアニスト

小倉末子

明治24年～昭和19年
（1891～1944）

西田町（現・寺内町）の士族の家に生まれた。戸籍上は「末」。幼くして父母を失い、神戸で貿易業を営む兄庄太郎に引き取られた。ドイツ人の義姉マリヤからピアノを習い、神戸女学院ピアノ科を卒業後、東京音楽学校を経てベルリン王立音楽学校（ドイツ）に留学し、天性の才能を飛躍的に発展させた。第一次世界大戦開戦により、ドイツを去りアメリカへ渡ると、シカゴ音楽学校教授として教鞭をとりながら、演奏活動を続け賞賛された。帰国後は、天才女流ピアニストとして明治黎明期の洋楽界をリードするとともに、東京音楽学校（現・東京藝術大学）教授として多くの優秀な音楽家を育成した。

神戸女学院時代の末子［神戸女学院大学図書館蔵］
明治43年（1910）2月頃撮影（推定）
神戸山本通にあった神戸女学院音楽館前にて撮影。後列右から2人目が末子。

ハリヨ博士のコラム

日本人最初の女性ゴルファーは末子である。兄の庄太郎は神戸の六甲に日本人として最初に別荘を所有し、日本初のゴルフ場「神戸ゴルフ倶楽部」のメンバーとなった。その関係で、末子もゴルフをおぼえ、日本人で最初にゴルフをした女性となった。

東京音楽学校卒業記念写真［東京藝術大学音楽学部蔵］
大正7年（1918）3月、東京音楽学校奏楽堂内にて撮影。前列左から久野ひさ、小倉末（教授）、頼母木こま、神戸絢、橘糸重、安藤幸、嶋崎赤太郎、茨木清次郎（校長）、グスターフ・クローン、ハインリッヒ・ヴェルクマイスター、パウル・ショルツ、乙骨三郎、大須賀績、田村寛貞。奏楽堂は、現在「旧東京音楽学校奏楽堂」として上野公園に移築復元されている。

楽壇の新星帰る（大正5年（1916）4月24日 東京朝日新聞）
［東京藝術大学音楽学部提供］

音楽演奏曲目梗概第二十八
［東京藝術大学音楽学部蔵］

大正9年（1920）12月4、5日に開催された東京音楽学校第39回定期演奏会のプログラム。末子はベートーヴェン誕生第百五十年記念曲目の中でグスターフ・クローン指揮のもと、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番作品37ハ短調を演奏した。

●楽壇の新星帰る

▽小倉末子女史　▽マリア夫人の気焔

四年前の春三月独逸伯林に遊び後紐育　市俄高に於て天才閨秀ピアニストの名を恣まにしたる小倉末子女史は（大正五年四月）二十三日未明横浜着の鎌倉丸で帰朝した。小柄な身体に纏ふた質素な洋装も黒瑪瑙の如に涼しい瞳と真珠のやうに美しい歯を持つた女史は歯ぎれのよい調子で語つた。

▲桜花の咲く頃、サイベリア線（シベリア鉄道）を通つて伯林へ入つたのは足掛恰度五年前です。そこの王立音楽学校を目的として参りましたので入学試験の準備は一通りしてあつたのですが何せピアノ科丈でも志願者が五十人其内十人許りしか採らないのですから却々骨なのです。私の弾りましたのはブラオンス（ブラームス）のバリエーション外一曲で僥倖にも及第（合格）が出来其後はブラオンスのお弟子で洋琴科教頭のバルド氏から特別に可愛がられ色々と励まされて苦しい然し楽しい勉強を続けましたが一昨年八月国交断絶と共に引揚ました。

▲翌年三月卒業といふ惜しい処を同校に別れて倫敦から紐育に渡り茲で一二回演奏会に出るうち市俄高に居られたロイテルさんから此方へ来てはとのお勧めを受け同地でも音楽界へ出入して居りました際メトロポリタンコンサバトリーの招聘に依り終に同学館の教授として今まで滞まる事となりました。（中略）史史の滞外期間中始終行を共にし今度も打連れて帰つて来た令兄夫人マリヤ（独逸婦人）は此娘は誰でも私の娘だらうと申すのですよ。さうでせう私はこの娘よりも長く日本に居るのです。五歳でこれが父母を亡くしてからはズツと私が育てたのですものという丈に如何にも母親らしい態度で（中略）因に末子女史は近く音楽学校に教鞭を執る筈で華族会館の初演奏は市俄高滞在中に予約が出来たのださうだ。

小倉末子関係年譜

		年齢
明治24年	1891	西田町（現・寺内町）で生まれる	1
明治29年	1896	父母を亡くし、神戸の兄に引き取られる	6
明治38年	1905	神戸女学院ピアノ科に入学する	15
明治43年	1910	神戸女学院ピアノ科を卒業する	20
明治44年	1911	東京音楽学校に入学する	21
明治45年 大正元年	1912	ベルリン王立音楽学校（ドイツ）に入学する	22
大正3年	1914	第一次世界大戦のためドイツを去り、アメリカに渡る	24
大正4年	1915	メトロポリタン・コンサーヴァトリ（アメリカ・シカゴ）のピアノ講師となる	25
大正5年	1916	帰国し、東京音楽学校講師となる	26
		皇后陛下の御前演奏で賞替される	
大正6年	1917	東京音楽学校教授となる	27
大正15年	1926	帝国劇場で日本人初の独奏会を開く	36
昭和19年	1944	永眠	54

教え子に囲まれて［個人蔵］

春に観る『花と音楽のまち』大垣

上石津町出身の偉大なる作曲家

江口夜詩（えぐちよし）

明治36年～昭和53年
（1903～1978）

上石津町（旧・時村）生まれ。本名は源吾。海軍省委託生として、東京音楽学校（現・東京芸術大学）に学び、昭和天皇即位大典演奏会では吹奏楽大序曲「挙国の歓喜」を発表した。海軍退役後、亡妻を偲（しの）んで作曲した「忘られぬ花」が大ヒット。その後「急げ幌（ほろ）馬車」「心のふるさと」「月月火水木金金」「長崎のザボン売り」「憧れのハワイ航路」「赤いランプの終列車」「瓢箪（ひょうたん）ブギ」など数々のヒット曲を作曲した。また、歌謡学校を設立し、多くの歌手や作詩家を世に送り出した。校歌や社歌、町民歌、地域の音頭なども数多く作曲。生涯にわたる作曲数は四千曲を超え、大衆音楽の父として讃えられている。

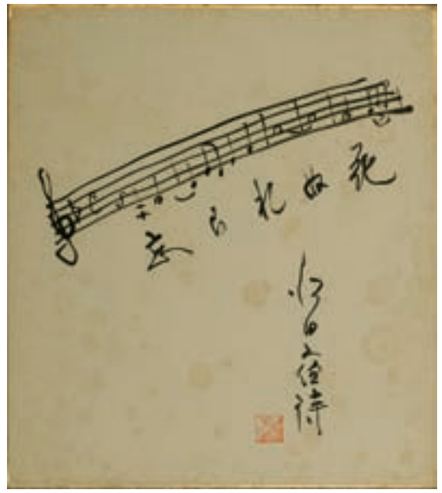
緑陰幽草勝花時
大正七年　七月　江口源吾　養老郡時村
印　印

江口源吾筆　七言一句
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
夜詩が時尋常高等小学校を卒業した大正7年（1918）の作

■時尋常高等小学校を卒業した夜詩は、海軍軍楽隊に応募し、横須賀海兵団に入団した。大正十年（一九二一）、当時皇太子であった昭和天皇のヨーロッパ親善旅行随行軍楽隊員のひとりとして抜てきされ、六か月間にわたりイギリス・フランス・イタリア等ヨーロッパ各国を歴訪し、本場のシンフォニーやオペラに接した。

楽譜ピース「夜の愁」［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

■作詞 玉置光三、歌 河司晴枝。昭和四年（一九二九）十二月発売のレコードデビュー作。



直筆色紙「忘られぬ花」［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

■作詞 西岡水朗、歌 池上利夫。昭和七年（一九三二）、亡き妻を偲んで作曲した作品。レコードB面の「時雨ひととき」とともに大ヒットとなり、夜詩は一躍、流行歌の作曲家となった。この歌のヒットを受けて、翌年春には、映画化もされた。

楽譜ピース「時雨ひととき」
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

■作詞 飛鳥井帆二、歌 渡瀬春枝。昭和七年（一九三二）の作品。流行歌でははじめてバンジョーを伴奏に使い、作編曲に新機軸を打ち立てた。この歌のヒットを受けて、翌年春、新興キネマにより映画化された。

ハリヨ博士のコラム

「忘られぬ花」「時雨ひととき」はAB面カップリングで11月発売にもかかわらず、年末までに50万枚を売る大ヒットとなった。どちらをA面にするかを決めるとき、カフェで働く人たちに試聴してもらったところ、「忘られぬ花」を聴いて泣き出す人もいた。その涙をみた江口夜詩は「人の魂を揺り動かすものこそ、本当の芸術だ」と、流行歌の作曲に生涯を打ち込んでいこうと決心した。

楽譜ピース「心のふるさと」
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

■作詞 大木惇夫、歌 関種子。昭和十一年（一九三六）の作品。NHKの「国民歌謡」として放送され、昭和十四年にレコード化された。国民精神の高揚に使われがちだった流行歌のなかで、この歌は純情な抒情歌（じょじょうか）としてヒットしたことから、夜詩の最も気に入っていた作品のひとつであった。

楽譜ピース「憧れのハワイ航路」
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

■作詞 石本美由起、歌 岡晴夫。昭和二十三年（一九四八）の作品。夜詩が得意とする明るく軽快なメロディーは、戦後の生活建て直しに追われ、ハワイ旅行など夢の時代に、人々に希望を与えた。戦後歌謡の代表作となった本作は、作詞家 石本美由起、歌手 岡晴夫を世に送り出すこととなった。

■作詞大倉芳郎、歌春日八郎。昭和二十七年（一九五二）の作品。リズミカルな中に、独自の哀愁を漂わせるフレッシュさが大衆に受け大ヒットした。アフタービートの前間奏も、夜詩ならではの力作で、春日八郎にとっては歌手生活をかけた晴れの始発列車となった。

楽譜ピース「赤いランプの終列車」
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

東京音楽学校時代の夜詩
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
大正14年（1925）撮影。右が夜詩。この年、結婚し、デビュー作「千代田城を仰ぎて」を発表した。

ハリヨ博士のコラム

昭和25年（1950）1月からスタートしたNHKラジオ「今週の明星」で「憧れのハワイ航路」と古賀政男作曲の「湯の町エレジー」が約1年間にわたり毎週ヒットチャートの1位争いをくりひろげ、全国のファンは熱狂した。二人は「メロディーの古賀」、「リズムの江口」歌謡界の双璧（そうへき）といわれ、その後の日本流行歌の大きな流れを作った。

西條八十（さいじょうやそ）と夜詩［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
昭和11年（1936）、東京駅にて。右が夜詩。

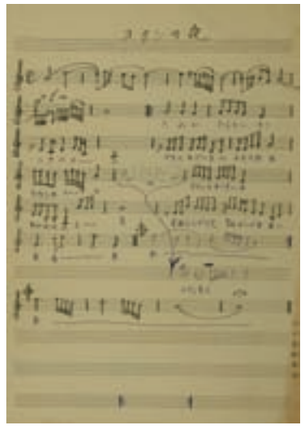
パスポート［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
昭和11年（1936）、夜詩は詩人西條八十（さいじょうやそ）とともに、「詩と音楽の世界一周旅行」として、3か月間の欧州旅行にでた。

古賀政男と夜詩［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
昭和35年（1960）撮影。左が夜詩。

養老の滝の夜詩
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
右から2人目が夜詩。「瓢箪ブギ」を発表した翌年の昭和30年（1955）、「江口夜詩作曲生活30周年郷土訪問大演奏会」を大垣市スポーツセンター（現・大垣城ホール）で開催し市内をパレードした際に養老の滝に立ち寄った。

愛用のメトロノーム
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］

愛用の印鑑・スタンプ・スタンプ台［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］


直筆の楽譜「コタンの夜」
［日本昭和音楽村江口夜詩記念館蔵］
昭和33年（1958）発表

ハリヨ博士のコラム

日本昭和音楽村

日本昭和音楽村は、昭和を駆け抜けた、偉大なる作曲家　江口夜詩を顕彰し、夜詩が愛した音楽、芸術によって人々の集う場をつくろうと、平成6年（1994）上石津町（現・大垣市）にオープン。250席の音楽専用ホールをもつ江口夜詩記念館、野外ステージ、フォークニューミュージック音楽館、イタリアンレストラン、コテージ、ダム湖を利用したカナディアンカヌー施設など、森と湖に囲まれた大自然の中で、地域や世代、団体などの枠にとらわれない特色のある文化芸術活動の場となっています。

音楽村全景

ホール

江口夜詩記念館全景

江口夜詩関係年譜

		年齢
明治36年	1903	養老郡時村（現・大垣市上石津町）で生まれる	1
大正7年	1918	時尋常高等小学校を卒業する	16
大正8年	1919	横須賀海兵団に入団する	17
大正9年	1920	第一期軍楽補習生を首席で卒業する	18
大正10年	1921	皇太子のヨーロッパ親善旅行随行軍楽隊員として選抜される	19
		帰国後、海軍省委託生として東京音楽学校（現・東京芸術大学）に入学する	
大正14年	1925	デビュー作「千代田城を仰ぎて」発表	23
昭和3年	1928	吹奏楽大序曲「挙国の歓喜」発表	26
昭和4年	1929	「夜の愁」でレコードデビュー	27
昭和6年	1931	海軍を退役する	29
昭和7年	1932	「忘られぬ花」、「時雨ひととき」発表	30
昭和8年	1933	「十九の春」、「秋の銀座」発表	31
昭和9年	1934	「急げ幌馬車」発表	32
昭和11年	1936	詩人西條八十と欧州に旅行する	34
		「心のふるさと」発表	
昭和15年	1940	「月月火水木金金」発表	38
昭和21年	1946	「緑の牧場」発表	44
昭和23年	1948	「長崎のザボン売り」、「憧れのハワイ航路」発表	46
昭和24年	1949	「東京の青い空」発表	47
昭和27年	1952	「赤いランプの終列車」発表	50
昭和29年	1954	「瓢箪ブギ」発表	52
昭和30年	1955	「裏町ピエロ」発表	53
		「江口夜詩作曲生活30周年郷土訪問大演奏会」を開催	
昭和31年	1956	日本歌謡学校を設立する	54
		「浮草の宿」、「トチチリ流し」発表	
昭和47年	1972	上石津町立時小学校校歌「仰ぐ烏帽子の」作曲	70
昭和49年	1974	上石津町名誉町民となる	72
昭和53年	1978	永眠	76

春に観る『花と音楽のまち』大垣

墨俣町が生んだ眩惑のピアニスト

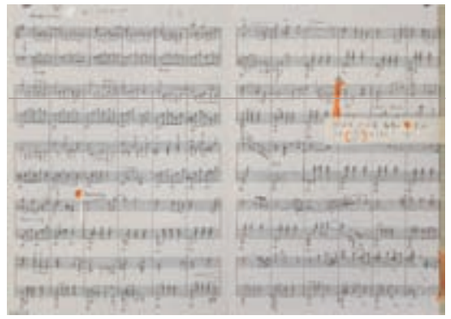
戸田（とだ）義明（よしあき）

昭和14年～平成15年
（1939～2003）

墨俣町中町生まれ。幼少の頃からハーモニカ演奏や独唱など、あらゆる面で非凡な芸術的才能を発揮し、東安中学校から国立音楽大学付属中学校声楽科へ編入した。のちにピアノ科へ転向し、同大学へ入学した。天性の並はずれたピアノテクニック、深い叙情性は在学当時から学内の教授間でも話題となり、クラシックピアニストとしての将来を期待されたが、やがてポピュラー音楽の道に入った。卒業後、原孝太郎の東京六重奏団のピアニストとして活動し、さらに、淡谷のり子、ボニージャックスら実力派シンガーの伴奏・編曲もつとめた。のち、ソリスト（独奏者）として独立、国内では数少ない存在として活躍した。

墨俣小学校時代［大垣市墨俣さくら会館蔵］
最前列左から5人目が6年生の義明。

■小学校四年に進級した時、母親からお祝いにハーモニカが贈られた。その日の夕方には「靴が鳴る」など簡単なものは吹けるようになっており、母を驚かせた。五年の時には、名古屋のラジオ音楽コンクールに出演。その時唄った「こいのぼり」が評判を呼んだ。中学校に進学すると、声楽とピアノを習い始め、本格的に音楽の勉強をしたいと希望し、上京した。



直筆楽譜『ムーンリバー』［個人蔵］

■義明は、音大時代に鍛えぬかれた基本的演奏力と絶妙の編曲手法で歌謡曲とクラシックを巧みに操り、親しみやすさと奥深さの両面を共存させることができる稀（まれ）なピアニストであった。義明には、地元だけでなく、関東をはじめ全国各地に後援組織があった。

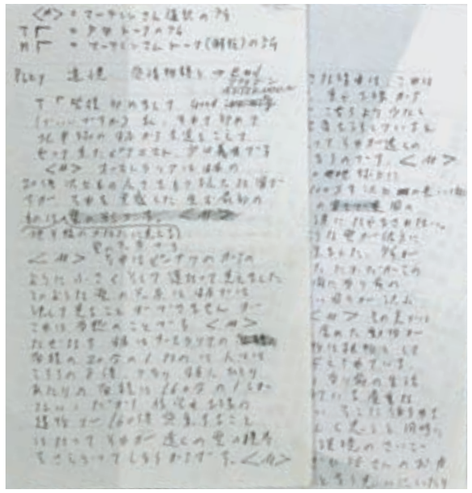
ハリヨ博士のコラム

平成4年（1992）、大垣市スイトピアセンターの音楽堂が完成した際に、購入されたピアノはスタインウェイとベーゼンドルファーであった。この時、ピアニストの間では“弾き手を選ぶ気難しいピアノ”と言われていた名器ベーゼンドルファーを最初に弾きこなしたのは義明だった。このピアノを好んだ義明は、その後毎年のように、大垣市の中学生を対象とした音楽鑑賞教室に招かれた。

■平成六年（一九九四）十一月、墨俣町町制施行百周年を記念して建設された「さくら会館」の竣工記念コンサートが開かれ、以後毎年一回のコンサートが恒例となった。

「さくら会館」竣工記念コンサートのパンフレット［大垣市墨俣さくら会館蔵］

■平成六年（一九九四）五月、オーストラリアのブリスベン郊外の街ヌーサで行われたコンサートは大反響を呼び、翌年には同国のヌーサのほか、三都市から招待され公演した。義明の名は、海外にも知れ渡った。



オーストラリア講演時のトーク原稿［個人蔵］

■平成八年（一九九六）十二月二十五日には、大垣市のフレンドリーシティである鹿児島市において大垣市・鹿児島市友好ピアノリサイタルを開催し喝采を浴びた。

義明の作品［大垣市墨俣さくら会館蔵・個人蔵］

リサイタルのポスター［個人蔵］

戸田義明関係年譜

年	齢	
昭和14年	1	墨俣町に生まれる
昭和20年	7	墨俣小学校に入学する
昭和26年	13	東安中学校に入学する
昭和27年	14	国立音楽大学付属中学校声楽科へ編入する
昭和29年	16	国立音楽大学付属高校声楽科に入学する
昭和30年	17	国立音楽大学付属高校ピアノ科に編入する
昭和32年	19	国立音楽大学ピアノ科に入学する
昭和45年	32	歌手　吉村昭子と結婚する
昭和54年	41	ソリストとして独立する
昭和58年	45	墨俣町公民館にて「里帰りコンサート」を開催する
昭和59年	46	大垣市文化会館にて「ふるさとに音楽のメッセージを贈ろう」を開催する
昭和60年	47	この頃からソロコンサートに専念する
平成4年	54	スイトピアセンター音楽堂が完成し、市教育委員会による中学生音楽鑑賞教室が始まる
平成6年	56	オーストラリア公演を成功させる
		墨俣町町制施行100周年・さくら会館竣工記念コンサートを開催
平成11年	61	NHKラジオ「土曜サロン」のレギュラー紹介ミュージシャンとなる
		東京オペラシティ大ホールでリサイタルを開催する
平成15年	65	永眠
平成19年		さくら会館で「ピアニスト戸田義明を偲ぶ集い」が開催される

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

わが国最初の工学博士で日本鉄道界のリーダー

松本 荘一郎

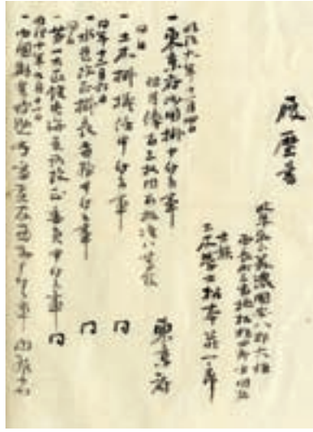
嘉永元年～明治36年
（1848～1903）

現在の兵庫県丹波市で生まれる。洋学者箕作麟祥に学び、のちに大垣藩士上田肇（聴秋）の推薦により大垣藩士に迎えられ、大垣藩校に入学した。藩校から大学南校（現・東京大学）に進み、選ばれてアメリカに留学。帰国後、東京府御用掛を振り出しに開拓使御用掛、工部権大技長、鉄道庁長官などを歴任した。その間、東京大学で教鞭をとるとともに、東海道線や信越線の敷設をはじめ、各地における鉄道工事の中心的な役割を果たし、わが国の鉄道の発展に大きな功績を残した。明治二十一年（一八八八）には、日本初の工学博士となった。大垣出身の野村龍太郎や那波光雄、立川勇次郎ら多くの優秀な鉄道人を育てた。

箕作麟祥先生門下生会案内［個人蔵］
明治34年（1901）に荘一郎に宛てられた門下生の会の案内。
次年度は、荘一郎が幹事になることが決められたようである。

■丹波国で生まれ育った荘一郎は、十二歳の時、松本家本宅がある播磨国粟賀村に帰ったが、翌年には、大阪で緒方洪庵とともに種痘事業に取り組んでいた叔父で医師の松本俊平の家に住み込むこととなった。大阪での暮らしについて、晩年『鉄道時報』の記者に、『私はおじの家に厄介になっていたときは、かいがいしくよく働きました。けれども従兄弟の端は勉強のみに専念できるのに、自分にはそれと同じことは許されない。少しの暇も与えられずに働かなければならない・・・そう思ったときはどうにも残念でたまりませんでした。しかしもし自分の今日の地位でも成功であるといわれるのなら、この成功は全くもって、あの残念の思いのお陰であるといえる。あれほど悔しく思ったことは今日いままで一度もありません』と語っている。こうした苦労をしながら、荘一郎は、池内大学に漢学を習い、のちに箕作麟祥の塾で英仏学を学んだ。

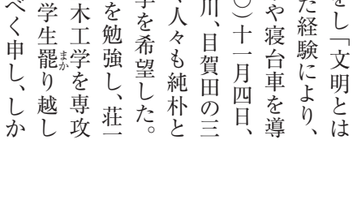
■箕作塾では頭角を現し、高並大助（のちの大井憲太郎）、山田久蔵とともに「箕作塾の三傑」といわれたが、間もなく、経済的な理由から、帰郷を決意することとなった。その時、荘一郎の最大の理解者で親友であった同塾の大垣藩士上田肇（聴秋）は、その才能を惜しみ、荘一郎を大垣藩士に推薦した。これに対して、大垣藩では当初「書生など召し抱える前例がない」として、認めない者が多かったが、上田の不屈の働きかけによって、もともと学問に深い理解を示していた大垣藩は、荘一郎を藩士として迎えることにし、明治二年三月二十日、「藩士の列に差加候・・・切米二十俵下置準士族申付候」という辞令書を下した。



荘一郎の履歴書［個人蔵］

■大垣藩士となった春、荘一郎は、大垣藩校から大学南校（現・東京大学）へ入学した。しかし、藩が学校を興すこととなり九月、大垣藩立学校洋学寮の社長心得を命じられ帰藩した。再び東京留学の命が下ったのは、翌年三月のことだった。大学南校における生活について荘一郎は「私は普段の生活は何ら人と異なることなどありませんでした。しかし人が静まった夜更けには、一人机に向い英書を研究し、殆ど一睡もしないで勉学に励みました。そんな生活に耐え抜けたのは、まったく健康こそが人より優れていたのだと、いつも父母に感謝していました」と語っている。

■明治三年（一八七〇）八月四日、荘一郎は、『為留学米国に被差遣の事、明治三年八月二日』という辞令を手にした。最下級の学生ながら大学南校の米国派遣留学生に選ばれたのである。寄宿舎に帰った荘一郎は、両手を挙げて室内を踊りまわるほどの喜びようだったという。選ばれた同行の留学生は目賀田種太郎（静岡藩）、香月経五郎（佐賀藩）、長谷川雉郎（姫路藩）だった。九月二十九日、太平洋飛脚船五艘の内の一つである「チャイナ号」に乗り込み、アメリカへと旅立った。十月二十四日、サンフランシスコに到着、日記によると「今朝早起甲板上に登るに大霧濛々、暫くにして朝日三竿の外遥か『カリホルニヤ』地方の連山。（中略）すなわち『ゴールデンゲート』にして『サンフランシスコ』港の咽頭なり。（中略）十一字船港の波戸場に至る。祝砲二発旅愁を破る」とある。



亜行日記［個人蔵］
留学先のアメリカ・ニューヨーク州トロイ市までの道中を記録した日記

■サンフランシスコからニューヨルク（ニューヨーク）までは、鉄道の旅であった。鉄道との最初の出会いである。荘一郎はアメリカ建国の原動力となった鉄道を目の当たりにし、汽車の美しくて便利なこと、トイレや、ストーブも備わっており、「ダイニング・カル（カー）」と呼ばれる食堂車で食事をし「文明とは便利なことだ」と嘆息した。こうした経験により、後に荘一郎は、日本において、食堂車や寝台車を導入することとなる。明治三年（一八七〇）十一月四日、ニューヨークに到着した荘一郎と長谷川、目賀田の三人は、ニューヨークよりも物価が安く人々も純朴といわれるツロイ府（トロイ市）への留学を希望した。はじめは、中学校で語学と数学などを勉強し、荘一郎は、レンセラー工科大学に入学、土木工学を専攻した。「先日来、英国の方へも余程留学生罷り越し候由、追々当国にても本邦人相増すべく申し、しかし人民租税中より不容易に学資を頂戴致し候事は、実に恐れ入り候事にて、他日何事にても国家のお役にたって、そのお返しをしたいと痛心致しながら、勉学に奮発いたしております」と家族に書き送っている。目賀田種太郎は、荘一郎とトロイ市の中学校で勉強したのちハーバード大学法科に進学した。荘一郎は、帰国後、彼の妹と結婚することになる。

留学先で仲間らと［個人蔵］
明治4年（1871）2月、ニューヨーク州トロイ市にて撮影。右から荘一郎、目賀田種太郎、ジョージ・ヘンリー・リトルフィールド、長谷川雉郎、山本重輔（のちの毛利重輔）

レンセラー工科大学［個人蔵］

■アメリカ最古の工科大学であるレンセラー工科大学は、邦人留学生のおよそ半数が卒業できないほどの教育レベルであった。そうした中、荘一郎は、山本重輔、目賀田種太郎、戸田氏共（うじたか）（最後の大垣藩主）、大鳥圭介、伊澤修二、濱尾新（あらた）らと「人力社」という会を組織し、日曜日毎に集まり、互いに切磋琢磨した。時には、郊外に出かけ、バス・フィッシングを楽しみ、刺身にして食べるなど遊んだりもした。

留学時代の英語練習帳［個人蔵］
明治4年（1871）2月頃〜6月頃

留学時代の製図ノート［個人蔵］

ハリヨ博士のコラム

荘一郎が学んだレンセラー工科大学には、後に開拓使としてともに活躍し帝国鉄道庁総裁となった平井晴二郎（せいじろう）も学んだ。昭和7年（1932）、同大学に、各国の鉄道界の頂点に立った卒業生の名を冠した10の学生寮が建設され、Matsmoto dormitory（マツモト ドミトリー）（松本寮）およびHirai dormitory（ヒライ ドミトリー）（平井寮）が現在に伝わっている。

参考：レンセラー工科大学のホームページ
（http://www.lib.rpi.edu/dept/library/html/archives/buildings/north_e.html）

留学時代の設計図面［個人蔵］
荘一郎が設計したニューヨーク市エリー運河に架かる橋の図面

■荘一郎が勉学に励んでいる時、文部省は海外留学生一般に対する学資の支給を打ち切ることとなり、親友の目賀田種太郎をはじめ多くの者が帰国を余儀なくされた。この時、荘一郎は、「・・・元より小生の金なきは言うまでもなく、すでに日本ではこの件を聞きおよび大垣藩の藩主戸田従五位（氏共）の留守邸から、小生を自費生として差し止めておくようにと申し来、従五位（氏共）よりも卒業まで是非世話をさせてくれるようにといってくれている・・・」と叔父に送ったとおり、アメリカ遊学中で、のちに同大学に留学した戸田氏共（明治八年入学、同期には平井晴二郎、原口要（かなめ）らがいた）の援助もあって、同大学に留学した邦人としては最初の卒業生として優秀な成績で学業を終えることができた。また、この時、アメリカの多くの友人らにも助けられており、大学の先生の斡旋で、ニューヨーク市の運河の役人となり一日に四ドルの日給を得たりもした。当時、年間の授業料は二百ドルだったという。

八幡橋（旧弾正橋）［東京都江東区］

弾正橋［個人蔵］

八幡橋の菊の紋章

■アメリカで苦学すること六年、明治九年（一八七六）八月、荘一郎は帰国し、大鳥圭介の斡旋で、東京府（現・東京都庁）へ入り、土木の専門家として水道改正掛長、道路改正委員などをつとめ、その一方で、東京大学教授として講義し、第一回内国勧業博覧会の審査官も兼ねる忙しさだった。十一年に完成した弾正橋は、東京府に勤務した荘一郎が設計した国産第一号の鉄橋（かなばし）である。京橋区（現・中央区）の楓川（かえでがわ）にかけられたが、関東大震災後の帝都復興計画により廃橋となり、昭和四年（一九二九）、江東区富岡八幡宮（とみおかはちまんぐう）東隣りに移設され、名称も「八幡橋（はちまんばし）」と改められた。菊の紋章のある橋としても有名な同橋は、鋳鉄（ちゅうてつ）から錬鉄（れんてつ）にいたる過渡期の鉄橋として近代橋梁技術史上においても価値が高く、昭和五十二年（一九七七）、国指定重要文化財（建造物）となり、平成元年（一九八九）には、日本初の米国土木学会栄誉賞が贈られた。

弁慶号（第二番機関車停車場前にて）
［北海道大学附属図書館蔵］
明治13年（1880）10月撮影。
クロフォード他のアメリカ人技師たちと日本人関係者たち。
運転席にのぼるステップに立っているのが荘一郎か。

弁慶号［北海道大学附属図書館蔵］
明治13年（1880）10月撮影。
「弁慶号」と命名された機関車は、現在、鉄道博物館（埼玉県大宮市）に保存展示されている。
運転室の横にローマ字、炭水車の横に漢字で「弁慶」と記されている。

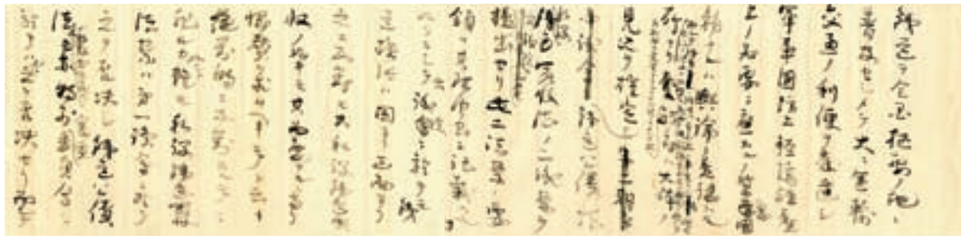
開拓使時代の荘一郎
［北海道大学附属図書館蔵］
明治13年（1880）頃撮影。

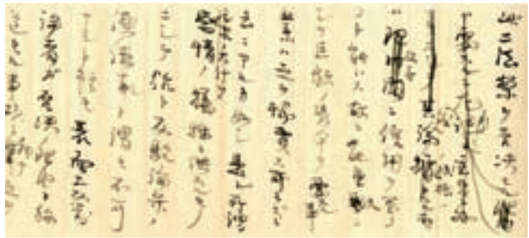
■明治十一年（一八七八）五月、政府は千二百五十万円の起業公債を発行。その中から百五十万円を「北海道岩内幌内を炭鉱を開鑿（かいさく）する事」という条件で開拓使にまわしてきた。西南戦争後、九州の炭鉱の出炭量が減少し、北海道の炭鉱の開発の必要性が高まっていた頃である。開拓使長官黒田清隆は、煤田開採（すたかいさい）事務掛（炭鉱開発掛）を新設すると、鉄道建設を計画し、アメリカ帰りの荘一郎を登用した。荘一郎は、東京府および東京大学を辞し、開拓使御用掛に転じると、直ちに開拓使の邦人技術者の中で最高の官位である副長に就任した。十二月には、アメリカから招いたJ・U・クロフォードが到着すると、鉄道敷設はもちろん、炭鉱開発・市街整備・石狩川河口改築などの事業を手掛け、明治十五年十一月には幌内（ほろない）・手宮（てみや）（小樽）間九一三キロに日本三番目（北海道初）でアメリカの技術の導入としては日本初の幌内鉄道を完成させた。荘一郎は、原始林と湿地の原野を蚊の攻撃や森林での遭難などの苦労を重ね測量し、工事を指揮して、アメリカ式SL弁慶号や義経号を走らせたのである。同年、開拓使は廃止されるが、明治十七年まで、工部権大技長などに任じられ、多くの官営事業に力を注いだ。

■明治十年（一八七七）頃から、政府は全国に鉄道敷設計画を立てていた。明治十三年、日本鉄道会社（民営鉄道）の創立に先立って、岩倉具視の内命を受けた荘一郎は、クロフォードとともに、青森・東京間の実地調査にあたり、計画の大綱（たいこう）決定に尽くした。同十七年には、東京に帰り、「我国の地理上及び経済上よりするもまず東海道を完成し以て東京・大阪間の連絡を図り、しかる後中仙道に及ぼすべし…」と主張し、閣議決定を促す。明治十九年からは、東海道線の天竜川以東横浜までの鉄道建設を総指揮した。明治二十一年、わが国初の工学博士となり、その後、鉄道庁部長を経て、同二十六年、鉄道創業時代の長官井上勝の後を受けて、第二代の鉄道庁長官となった。その後は、わが国の鉄道事業発展のため、日本中をかけ回って部下の指導にあたった。

辞令［個人蔵］

■荘一郎は、国家発展のため、鉄道を全国に普及させることを訴え、そのためには、私設鉄道を国有化することが必要であると説いた。鉄道国有法は、荘一郎の没後三年経った、明治三十九年（一九〇六）に公布された。

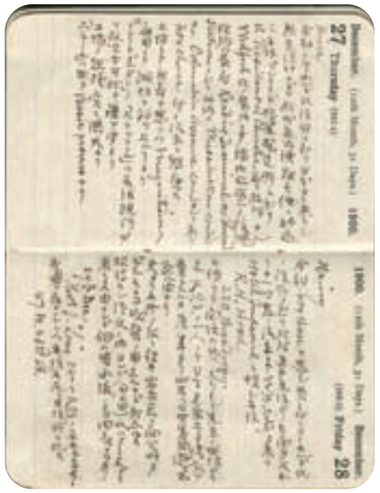




鉄道全国普及のための建言書（草案）
［個人蔵］

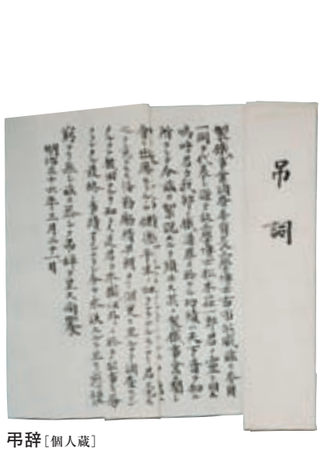
鉄道ヲ全国枢要ノ地ニ普及セシメテ、大ニ運輸交通ノ利便ヲ発達シ、軍事国防上、経済殖産上ノ必要に応スルノ緊急国務ナルハ、輿論ノ是認スル所ナリ、而シテ鉄道の拡張ハ之ヲ国家の事業トシ、其延長布設ヲ謀ルト同時ニ既成ノ私設鉄道ハ之ヲ国有ニ移シテ、其利用ヲ完全ナラシメサル可ラサルカ故ニ、政府ハ大体ノ見込ヲ確定シ、鉄道公債法、私設鉄道買収法ノ二議案ヲ衆議院ニ提出セリ、此二法案の要領ハ、其理由書ニ記載スルガ如クニシテ、衆議院に於テモ鉄道拡張ハ固ヨリ正面ヨリ之ニ反対セス、私設鉄道買収ノ如キモ、其必要アルニ当リ協賛ヲ求ムヘキモノト云イ、絶対的に反対スルモノニ非ルカ如シト雖モ、私設鉄道買収法案ハ、第一読会ニ於テ之ヲ否決シ、鉄道公債法ハ解散前、之ヲ議スルニ及バザリシモ特別審査委員会ニ於テハ、已ニ之ヲ否決セリ、而シテ、此二法案ヲ否決セル議論ノ根抵ハ、政府ニ信用ヲ置クコト能ハス、故ニ如此重大ニシテ巨額ノ資本ヲ要スル事業ハ、之ヲ協賛ス可ラズト云ニアルカ如シ、是レ所謂国家ノ大計ヲ感情ノ犠牲ニ供スルモノニシテ、殆ト反駁論弁ノ価値ナシト謂モ不可ナシト雖モ、表面上反対・・

■明治三十三年（一九〇〇）、荘一郎は、パリで開催された第六回万国鉄道会議に出席するため、世界一周の旅に出た。その際、イギリスでは、急勾配を登るアプト式機関車を視察し、アメリカでは、留学時代に世話になった先生などと再会している。

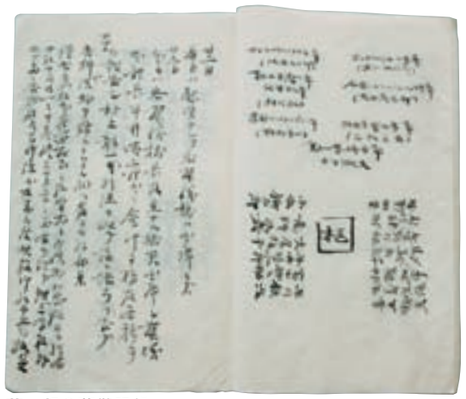


欧米行日記
［個人蔵］
明治33年（1900）年の日記。

■荘一郎は、明治三十六年（一九〇三）三月十七日、腎臓病から肺炎を併発し亡くなった。翌月二十七日、荘一郎の功績を称え、野村龍太郎（P.26）、古市公威、渋沢栄一らが発起人となり、帝国鉄道協会（現・日本交通協会）に、鉄道に関する内外の図書等を収集した「松本文庫」が設立された。昭和四年（一九二九）には、平井晴二郎、クロフォードとともに、北海道鉄道生みの親として、札幌駅前に胸像が建立された（現在は鉄道博物館蔵）。また、小樽市総合博物館には、荘一郎を称えるレリーフが展示されている。技術家として全精力を鉄道事業に注ぎ、日本の鉄道の創業期および伸長期の礎となった荘一郎は、また、数多くの大垣人や西濃人を鉄道界の有能な人材に育て「鉄道は大垣人」といわれるほどであった。



弔辞［個人蔵］
荘一郎の後に鉄道作業局長官となった古市公威による弔辞



荘一郎の葬儀記録［個人蔵］
荘一郎の長男で法学者の烝治（じょうじ）による荘一郎の病態と葬儀までの記録。葬儀では、野村龍太郎（P.26）や平井晴二郎らが葬儀本部をつとめ、留学時代からの親友で義兄の日賀田種太郎も親族として参列している。

松本荘一郎関係年譜

	年齢	
嘉永元年　1848	1	現在の兵庫県丹波市に生まれる
慶応3年　1867	20	大阪城内の陸軍所に15人扶持で出仕、負傷者の治療にあたる
明治元年　1868	21	神戸の箕作麟祥の塾で学ぶ
明治2年　1869	22	大垣藩士族となる
		東京留学を命じられ大学南校に入学する
		大垣藩立学校洋学寮の社長心得を命じられ帰藩する
明治3年　1870	23	再び東京留学の命により大学南校で学ぶ
		レンセラー工科大学（アメリカ・ニューヨーク州トロイ市）に入学する
明治9年　1876	29	帰国・東京府御用掛となる
明治10年　1877	30	東京大学三学部（法理文）の学科教導担当を嘱託される
明治11年　1878	31	開拓使御用掛となる
		開拓使本庁物産局煤田開採事務掛（炭鉱開発掛）副長となる
明治13年　1880	33	開拓使傭米国人クロフォードとともに青森・東京間、東京・高崎間の調査を行う
		小樽・札幌間の鉄道敷設工事に着手する
明治15年　1882	35	開拓使廃止に伴い、工部省御用掛となり、工部権大技長として北海道に残る
		北海道初の鉄道「幌内鉄道（小樽・札幌間）」を開通させる
明治17年　1884	37	東京に転任し、鉄道局に勤務する
		中山道より東海道を優先して敷設する方が有利との調査報告を行い、閣議決定を促す
明治19年　1886	39	閣議により、東海道線の優先が決定され、東海道線の天竜川より東の鉄道敷設を総指揮する
明治21年　1888	41	わが国第1号の工学博士となる
明治22年　1889	42	京仁鉄道函議員となる
		台湾総督府鉄道事務顧問となる
明治26年　1893	46	鉄道庁長官（第2代）となる
明治28年　1895	48	製鉄事業調査会委員となる
明治30年　1897	50	官制改正により鉄道作業局長官となる
明治33年　1900	53	旧大垣藩戸田家家政議員となる
		第6回万国鉄道会議（パリ）出席のため米英仏へ出張する
明治36年　1903	56	永眠
		正三位勲二等瑞宝章を受ける

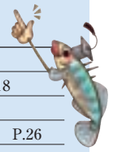
荘一郎のレリーフ［小樽市総合博物館蔵］

札幌駅前の胸像建設落成記念絵ハガキ［個人蔵］

札幌駅前の胸像落成記念式典［個人蔵］

ハリヨ博士のコラム

明治・大正期に活躍した大垣出身の主な鉄道関係者



氏名	生年	備考
河瀬　清蔵	文政5年（1822）	鉄道中属
松本　荘一郎	嘉永元年（1848）	鉄道庁長官　工学博士　P.18
明石　兵之丞	安政元年（1854）	鹿児島鉄道作業局出張所
野村　龍太郎	安政6年（1859）	南満州鉄道社長　工学博士　P.26
吉川　三次郎	万延元年（1860）	鉄道技師　アプト式を導入
佐藤　古三郎	文久元年（1861）	鉄道技師
加納　万次郎	文久元年（1861）	鉄道庁技師
青木　鎌太郎	文久元年（1861）	九州鉄道株式会社技師
立川　勇次郎	文久2年（1862）	養老鉄道社長、京浜急行社長　P.28
西松　亥吉	文久3年（1863）	京都駅長（日本の三名駅長）
小川　末太郎	元治元年（1864）	鉄道院書記
古沢　謙吉	慶応3年（1867）	帝国鉄道庁参事
塩川　敬吉	慶応3年（1867）	鉄道庁建設局課長
中西　錬次郎	明治元年（1868）	鉄道庁技師
山田　兵司	明治元年（1868）	鉄道院書記
那波　光雄	明治2年（1869）	鉄道庁技師　工学博士　P.32
戸田　進吉	明治3年（1870）	鉄道作業局書記
大塚　踐吉	明治4年（1871）	工学士　鉄道局設計課
稲井　初司	明治6年（1873）	京浜電気鉄道会社事務長
箕浦　戒二	明治6年（1873）	鉄道庁技師
渡辺　良夫	明治6年（1873）	名古屋駅首席助役
渡部　勉吾	明治7年（1874）	鉄道院書記
谷　直諒	明治8年（1875）	南満州鉄道技師
田中　耕三	明治10年（1877）	鉄道院札幌鉄道局長
安藤　又三郎	明治10年（1877）	南満州鉄道理事、大垣市長
高木　清吉	明治11年（1878）	京浜電気鉄道会社技師
吉田　耕一	明治11年（1878）	工学士　北海道鉄道作業局
佐竹　三吾	明治13年（1880）	鉄道政務次官、貴族院議員
後藤　悌次	明治15年（1882）	華北交通副総裁
松川　義造	明治15年（1882）	鉄道院技手
長屋　脩	明治17年（1884）	鉄道局技師
種田　虎雄	明治17年（1884）	鉄道局運輸局長、（初代）近鉄社長
戸田　直温	明治18年（1885）	華北運輸公司社長
黒柳　謙吉	明治22年（1889）	鉄道局技師
三輪　真吉	明治32年（1899）	広島鉄道管理局長
三原　種雄	明治37年（1904）	鉄道総局長官官房

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

鉄道界の元老で南満州鉄道社長の工学博士

野村龍太郎

安政6年～昭和18年
（1859～1943）

大垣藩校の督学野村藤陰の長男として藤江村（現・藤江町）に生まれる。幼い頃から学問を好み、藩校では優秀な成績を修めた。東京帝国大学で土木工学を専攻した後、鉄道局の技師となり、東海道線をはじめ各地の鉄道敷設工事を担当したほか、濃尾大震災で被災した橋梁や線路の修復も手がけた。のちに工学博士となり、土木学会会長や南満州鉄道社長、東京地下鉄道社長等を歴任するとともに、岩倉鉄道学校の校長をつとめ何千人もの卒業生を世に送り、わが国の鉄道交通の発展に尽くした。また、旧大垣藩士の子弟らを養成する養成社の社長をつとめるなど、郷土の後進の指導に心を配った。

龍太郎瞑想の木［大垣市保健センター］

■龍太郎は、藩校の庭にあるトネリコの木の下で瞑想していることがあったので、このトネリコは「龍太郎瞑想の木」と称された。現在は、大垣市保健センターに移植されている。

ベルリンにて
［蓑洲会「野村龍太郎傳」（日本交通学会）から転載］

■明治三十年（一八九七）撮影。前年から欧米各国の鉄道事情を視察していた龍太郎はベルリン（ドイツ）で、留学中の大垣出身者と出会った。右から渡辺謙吉、岡田朝太郎、龍太郎。

満州・韓国視察［蓑洲会「野村龍太郎傳」（日本交通学会）から転載］

■明治三十七年（一九〇四）九月撮影。龍太郎は逓信技師として、逓信大臣の出張に随行した。前列椅子席右から龍太郎、古市公威（京釜鉄道会社総裁）、大浦兼武（逓信大臣）、目賀田種太郎（朝鮮政府財政顧問）、山之内一次（逓信省鉄道局長）、池田十三郎（逓信書記官）。

濃飛学寮創立10周年記念［蓑洲会「野村龍太郎傳」（日本交通学会）から転載］

■昭和二年（一九二七）十月撮影。前列中央が龍太郎、その左は関屋龍吉（P.76）。右は、安藤又三郎。龍太郎は、岐阜県出身者の学生寮「濃飛学寮」の理事長をつとめた。関屋龍吉は、大正九年（一九二〇）から理事となり終戦までつとめている。安藤又三郎は、昭和十二年から龍太郎の後任として理事長となり、のちに第四代大垣市長となった。

野村龍太郎寿像［大垣市郷土館蔵］

■大正八年（一九一九）に龍太郎の還暦を記念して製作された。朝倉文夫（一八三三～一九六四）作。

傲不可長　欲不可縦　志不可満　楽不可極
大正丙辰（大正五年）仲春　蓑洲生龍印印

龍太郎の書
［大垣市郷土館蔵］

傲は長ず可からず。欲は縦にする可からず。志は満たす可からず。楽しみは極む可からず

※「蓑洲」は龍太郎の号

ハリヨ博士のコラム

養成社

養成社は、明治18年（1885）頃、旧大垣藩領と幕府大垣藩預領の優秀な子弟を対象に、人材の養成を目的として、学芸の奨励や学費等の援助を行った。明治23年（1890）から3年間にわたり、在京大垣青年会（会長　松井直吉P.60）育成のために、毎年100円ずつ援助金を送った。さらに、岐阜県尋常中学校大垣分校設立のために力を尽くした。明治33年（1900）、文部大臣に「社団法人養成社」の設立を申請し、これが認可されると、ますます活動は活発化した。こうした援助のもと、多くの人々が育っていった。学資をうけた中には、法学の岡田朝太郎、工学の那波光雄（P.32）、林学の小出房吉、医学の望月代次、獣医学の小倉鉀太郎らがいる。大正9年（1920）からは野村龍太郎が社長となった。

野村龍太郎関係年譜

		年齢
安政6年	1859	大垣藩校の督学　野村藤陰の長男として生まれる	1
明治5年	1872	慶応義塾童子寮に入学する	14
明治7年	1874	東京英語学校に入学する	16
明治8年	1875	東京開成学校に入学する	17
明治14年	1881	東京大学理学部土木工学科を卒業する	23
		東京府土木科御用掛となる	
明治19年	1886	一等技手として鉄道局に入る	28
		東海道線横浜・沼津間工事を担当する	
明治20年	1887	箱根トンネル工事を担当する	29
明治21年	1888	甲府鉄道新宿・八王子間工事を担当する	30
明治23年	1890	鉄道局建築課勤務を命じられ、神戸へ赴任する	32
明治24年	1891	濃尾震災の被害状況調査、復旧工事を指揮する	33
明治27年	1894	鉄道局奥羽福島出張所の初代所長となる	36
明治29年	1896	欧米各国の鉄道事情を視察する	38
明治32年	1899	工学博士となる	41
明治33年	1900	養成社の理事となる	42
明治37年	1904	満州・韓国を視察する	46
明治39年	1906	鉄道国有化に貢献する	48
		満州・韓国を視察する	
明治44年	1911	欧米各国の鉄道事情を視察する	53
大正2年	1913	南満州鉄道総裁となる	48
大正6年	1917	第3代土木学会会長となる	59
大正7年	1918	大湊興業株式会社初代社長となる	60
大正8年	1919	南満州鉄道社長となる	61
大正9年	1920	養成社社長となる	62
大正11年	1922	帝国鉄道協会会長となる	64
大正13年	1924	東京地下鉄道株式会社社長となる	66
大正14年	1925	南武鉄道株式会社社長となる	67
昭和12年	1937	濃飛学寮の理事長を辞任する	79
昭和18年	1943	永眠	85

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

電気鉄道業界の先駆者で養老鉄道の創始者

立川勇次郎（たちかわゆうじろう）

文久2年～大正14年
(1862～1925)

大垣藩士清水恒右衛門の次男として生まれ、同藩士立川清助の養子となった。師範学校を卒業し教師となったが、そのかたわらで法律学を学び、代言人（弁護士）として、大垣で開業した。その後、上京し電力事業に目をつけ実業界に転身し、東京と横浜を結ぶわが国最初の都市間電気鉄道を実現させたほか、次々に電気事業を興した。晩年には、養老鉄道株式会社を創立するとともに、揖斐川電力株式会社（現・イビデン株式会社）の初代社長をつとめ、西濃地方の産業基盤を築いた。

■東京で弁護士として開業した勇次郎は、明治二十一年（一八八八）、東京市内に電気鉄道をつくる計画を立てていた宏佛海らから法律相談を受けたことがきっかけで、これに加わることになった。しかし、主要な交通手段が鉄道馬車であった当時、この計画は時期尚早として却下された。その後、弁護士の仕事を辞めた勇次郎は、九州の炭鉱事業に参画した。明治二十六年、再び上京し、再出願するが、これも実現には至らなかった。この頃、同じ考えを持っていた実業家雨宮敬次郎（あめみやけいじろう）、電気工学者藤岡市助（ふじおかいちすけ）らと出会った勇次郎は、一緒になって新たに出願することとなり、明治三十六年、東京市街鉄道としてようやく認可され、雨宮が社長、勇次郎が常務取締役となり開業した。勇次郎らは、乗車区間に関係ない運賃三銭均一制度を実現させ鉄道事業を活性化させていった。

東京市街鉄道［個人蔵］
車両の横に立つのが勇次郎。

■明治二十三年（一八九〇）、日本のエジソンと呼ばれた藤岡市助が設立した白熱舎（東芝の前身）が電球の国産化に成功した。この頃、藤岡を知った勇次郎は、白熱舎が東京白熱電燈球製造株式会社と改組されたのち明治三十一年に同社取締役に就任し、電球、電気機器の普及につとめた。

東京白熱電燈球製造株式会社
［個人蔵］
中央は伏見宮、その左が勇次郎。

■明治三十一年（一八九八）二月二十五日、高速の輸送機関を開設することが、都市の発展につながると考えた勇次郎は、藤岡市助を電気技術顧問に迎え大師鉄道株式会社（京浜急行電鉄の前身）を設立し、翌年一月二一日、川崎六郷橋～川崎大師間の営業を開始した。京都、名古屋に次いで全国三番目の電気鉄道のはじまりとなった。その後、明治三十八年までに品川～神奈川間を開通させ、わが国最初の都市間電気鉄道となった。昭和四十三年（一九六八）十二月、京浜急行電鉄株式会社の創立七十周年を記念して川崎大師駅前に建立された記念碑には、「・・・会社設立発起人代表立川勇次郎はじめ先人の遺徳を偲び・・・」と刻まれている。

電気鉄道発祥の地碑［京浜急行川崎大師駅前］

東京の自宅における勇次郎と夫人［個人蔵］

■東京市赤坂区青山高樹町の自宅は、勇次郎が創立した揖斐川電力株式会社（現・イビデン株式会社）の本店ともなった。

ハリヨ博士のコラム

明治39年（1906）秋、勇次郎は、東京・大阪間を6時間で走らせる広軌高速度電気鉄道（日本電気鉄道）を計画し、安田善次郎ら多くの実業家の支援を受け、翌年2月、発起人総代となって出願書を提出した。現在の新幹線にあたる鉄道の構想は、時代を先行しすぎており、世間を驚かせた。これに対して、政府は却下を繰り返した。大正13年（1924）当時の法制局長官であった大垣出身の佐竹三吾（さんご）は免許に賛成していたが、この年5回目の出願も却下となり、勇次郎は世を去った。

東京の自宅玄関前にて［個人蔵］
当時めずらしい自動車の後部座席に乗るのが勇次郎。

■勇次郎は、日本とアメリカ両国の企業家が、互いに手を結び知恵を出し合うことが必要であると考えていた。大正十一年（一九二二）には、東京電気（旧・東京白熱電燈球製造株式会社、東芝の前身）取締役として、同社販売部長で長男の龍（りゅう）とともに、販売事務研究のためアメリカのゼネラルエレクトリック社（GE）を視察した。同社はGE社と提携関係にあった。

米国GE社を視察［個人蔵］
大正11年（1922）4月4日撮影。前列左から2人目が勇次郎、右端が長男の龍。

立川勇次郎関係年譜

	年齢	
文久2年 1862	1	大垣藩士　清水恒右衛門の二男として生まれる
明治14年 1881	20	大垣藩士　立川清助の養子となる
		弁護士試験に合格、大垣で開業する
明治18年 1885	24	大垣英語学校を創立する
明治19年 1886	25	東京で弁護士として開業する
明治22年 1889	28	電気鉄道敷設免許を出願する
明治24年 1891	30	九州で大垣出身の子安峻と炭坑事業に参画する
明治26年 1893	32	電気工学者　藤岡市助、実業家　雨宮敬次郎と出会う
明治28年 1895	34	養老鉄道敷設願書を提出する
明治31年 1898	37	大師電気鉄道株式会社を設立する
		東京白熱電灯製造（後の東京芝浦電気）取締役に就任する
明治36年 1903	42	東京市街鉄道株式会社常務取締役となる
明治44年 1911	50	養老鉄道株式会社を設立し、社長に就任する
明治45年 大正元年 1912	51	揖斐川電力株式会社を設立する
大正2年 1913	52	養老鉄道　池野～養老間の営業を開始する
大正5年 1916	55	西横山発電所全工事完了
大正6年 1917	56	揖斐川電化工業株式会社を設立し社長に就任する
大正8年 1919	58	養老鉄道株式会社の池野～揖斐間・養老～桑名間の営業を開始する
大正10年 1921	60	揖斐川電化株式会社を揖斐川電気株式会社に社名変更する
大正11年 1922	61	ゼネラルエレクトリック社などを視察する
		揖斐川電気株式会社が養老鉄道株式会社を合併する
大正12年 1923	62	養老鉄道全線電化工事が完了する
大正14年 1925	64	永眠

ハリヨ博士のコラム

明治10年（1877）に師範学校が岐阜に移転してから、大垣には中等学校程度以上の学校はなくなり「文教のまち」を誇る大垣としては不満があった。明治13年（1880）、岐阜県華陽学校大垣分校（中学校）が設置され、那波光雄（P.32）、脇水鉄五郎（P.74）らを輩出したが、明治18年（1885）9月、文部省の一県一校の方針により廃止された。この後、大垣には公立の中等教育機関は設けられなかった。そのため、明治18年、大垣で弁護士として開業していた勇次郎が発起人となり、金森金四郎、吉次郎（P.82）父子の尽力によって「大垣英語学校」が創立された。

■晩年の勇次郎は、郷里の産業観光開発に灯をつけようと、明治四十四年（一九一一）、養老鉄道株式会社を創立し、大正二年（一九一三）に大垣・養老間、大垣・池野間を開通させた。その後、養老・桑名間、池野・揖斐川間の工事が進み、八年には全線が開通、十二年には全線を電化した。また、大正元年には、揖斐川電力株式会社（現・イビデン）を創立、西濃地方の近代化の立役者ともなった。明治維新によって開かれたわが国の近代化の流れの中で、次々に電気事業を興し生き抜いた勇次郎の功績は大きく、没後の昭和二年（一九二七）には、養老駅前に顕彰碑が建立され、現在「立川勇次郎氏顕彰会」によって毎年八月顕彰祭がおこなわれている。

養老鉄道株式会社本社［イビデン株式会社蔵］
大正4（1915）年11月15日撮影。大正天皇の即位を記念した御大典奉祝の山車が見られる。

顕彰碑落成記念［個人蔵］
昭和2年（1927）。碑の撰文は南条文雄（P.56）による。

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

鉄道敷設の大家で橋梁学の工学博士

那波光雄（なわみつお）

明治2年～昭和35年
（1869～1960）

大垣藩士那波光儀（なわみつよし）の長男として袋町（現・本町）に生まれる。現在の興文小学校を経て、帝国大学工科大学土木工学科を卒業後、鉄道界に入り、現場の第一線から、大学、研究所、学会など多方面で活躍した。この間、松本荘一郎らの努力によって外国からもたらされた鉄道敷設技術に、独自の工夫を加え、わが国の風土により適合した新しい技術の開発に挑戦し続けた。特に橋梁工事について足場を使わないでクレーンによって架橋する工法を考案し革新をもたらしたほか、土木分野におけるコンクリート材料の実用化に大きな功績を残した。

袋町（本町）の生家［個人蔵］

帝国大学の学生時代［個人蔵］
明治26年（1893）撮影。帝国大学工科大学土木工学科の学生一同。光雄は、養成社（P.27）から月5円の給費を受け特待生として卒業した。最前列右から3人目が光雄。

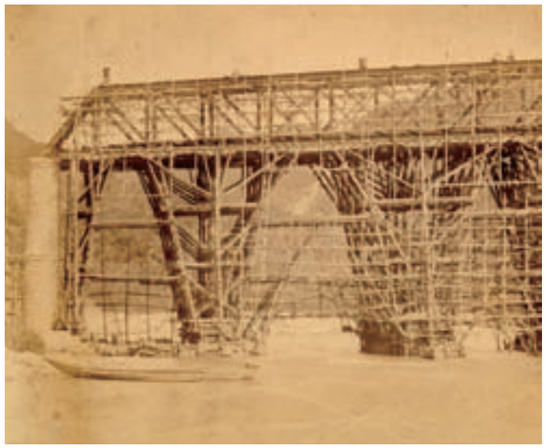
帝国大学卒業証書［個人蔵］
明治26年（1893）7月10日。工科大学長は古市公威、大学総長は濱尾新。

完成した関西鉄道揖斐川橋梁［個人蔵］
明治28年（1895）10月頃撮影。右から3人目が光雄。

■大学を卒業した光雄は、恩師の白石直治（しらいしなおじ）が社長をつとめていた関西鉄道に入社し、明治二十七年（一八九四）、揖斐川架橋（長島・桑名間）の設計および工事を担当した。その際、河底が軟弱なため、基礎工事において困難を極めたが、光雄の研究により、従来の錬瓦井筒（れんがいづつ）に代えて鉄製楕円井筒を用いて克服することができた。また、橋桁（けた）はイギリス製であったが、一部不足していたため、光雄が設計し、橋梁工学の世界的権威であったイギリス人技師ベーカーに称賛されたという。揖斐川橋梁を完成させた光雄は、続いて木津川橋梁（大河原・笠置間）の設計・工事に着手した。工事は光雄の監督のもとで厳格を極め、鉄道工事の模範として語り伝えられた。

建設途中の関西鉄道揖斐川橋梁［個人蔵］
明治27年（1894）5月14日撮影。揖斐川東堤より全景を望む。

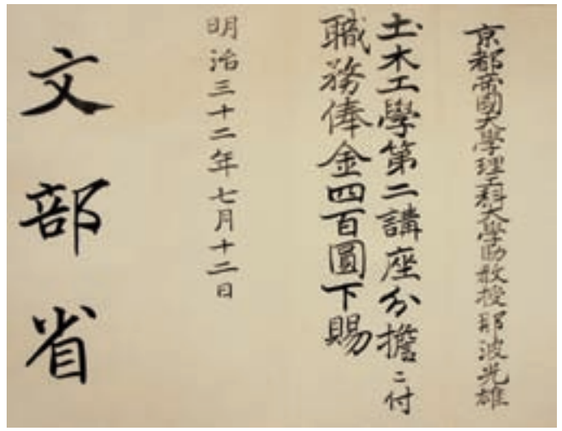
関西鉄道揖斐川橋梁の建設機材［個人蔵］
大型の工具、測量機、潜水道具などが見られる。



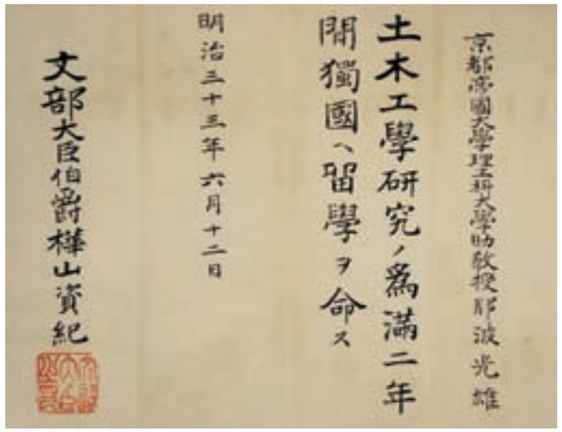
関西鉄道木津川橋梁架橋工事［個人蔵］
明治30年（1897）春頃撮影。足場法による工事の様子がみられる。

ハリヨ博士のコラム

揖斐川架橋工事を終えた光雄は、休暇をもらい上京した際、鉄道庁長官となっていた松本荘一郎（P.18）の官舎を訪ね、技術者として指導・激励されたという。

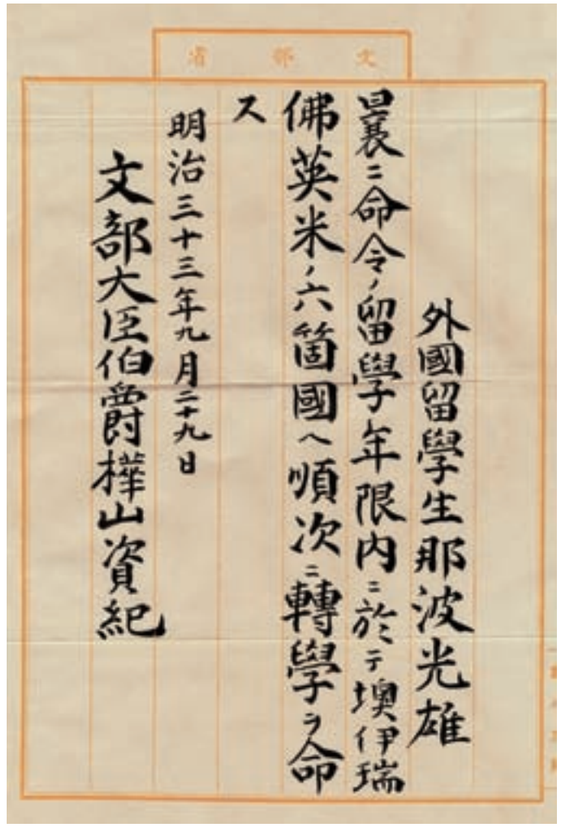


京都帝國大學理科大學助教授那波光雄
土木工學第二講座分擔ニ付
職務俸金四百圓下賜
明治三十二年七月十二日
文部省



京都帝國大學理科大學助教授那波光雄
土木工學研究ノ爲滿二年
間獨國ヘ留學ヲ命ス
明治三十三年六月十二日
文部大臣伯爵樺山資紀

■明治三十二年（一八九九）関西鉄道の建築課長となっていた光雄は、新設されたばかりの京都帝国大学理工科大学土木工学科助教授に迎えられた。現場に従事したいという思いから、東京帝国大学からの誘いも断っていたが、留学への誘いに興味が湧き決意したという。光雄は、土木工学第二講座を担当し、翌年二年間の留学を命じられ、ベルリン工科大学（ドイツ）に留学、カウエル教授に師事し鉄道工学を研究するとともに、欧米各国を視察した。この間、週に一通以上のペースで家族宛に消息を伝えた。



文部省
外國留學生那波光雄
佛英米六箇國ヘ順次ニ轉學ヲ命ス
明治三十三年九月二十九日
文部大臣伯爵樺山資紀

辞令［個人蔵］

ドイツにて［個人蔵］
後列左が光雄。

右から2人目が光雄

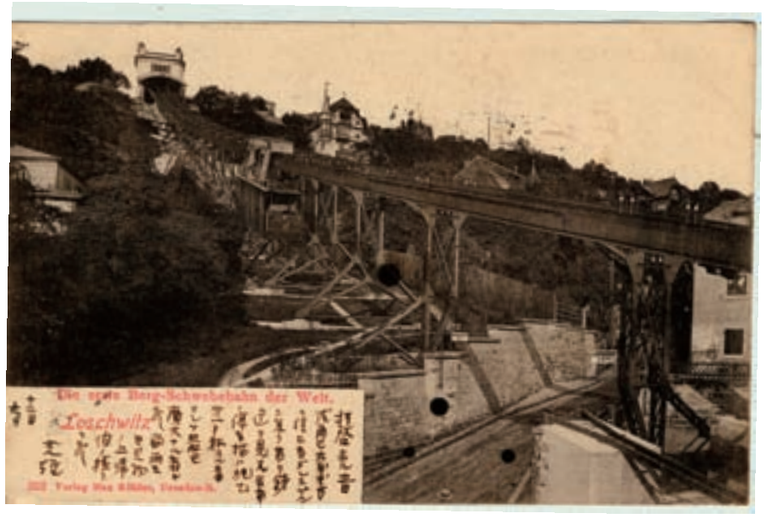
アイススケートを楽しむ光雄

十四日、巴里府ヘ無事到着、十五日ヨリ日々博覧会見物候モ其ノ広大ナル、見尽シ難ク候、丁度、京都岩村家ノ兄、両人当地ニ来リ居り候為メ頗ル好都合ニ候、一人ハ昨日米国ヲ経テ帰朝ノ途ニ就キ、一人ハ来月、郵船会社ノ用ニテ帰朝ノ筈ニ候、私モ明二十七日晩、伯林ヘ向ヶ出発候、先方ニモ支人出迎ヒ呉れ候由申来り候間、大ニ好都合ニ候、此ノ図ハ世界最高ノ「エッフェル」塔ニテ高サ千尺有之、小生モ相登候、其ノ賃銭ハ二円ニ候、市内ハ眼下ニ来り候、其他ハ博覧会場ニテ日本浅草ノ五重塔モ相見ヘ候も其低キ事ハ此ノ図ノ割合ニ近ク候、先ハ右、安着御報申候、

巴里府　十月二十六日　那波光雄

道路ノ良キ事、車・馬絡繹（らくえき）申シテ、道路ヲ横ナルハ危険ナル等ヨリ博覧会ノ規模ノ大ナル驚クト云フヨリ外ハ無之候、皆々様ニ宜敷願候

留学先から家族に宛てた絵ハガキ［個人蔵］
明治33年（1900）10月26日（パリ万国博覧会　エッフェル塔絵葉書）



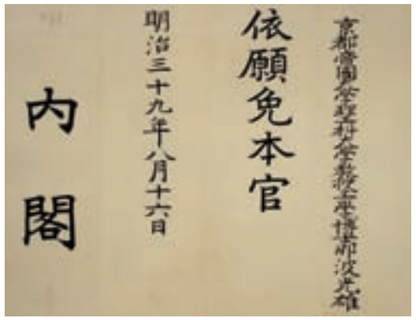
留学先から家族に宛てた絵ハガキ［個人蔵］

■留学から帰った光雄は、京都帝国大学教授に昇進し、教壇に立った。明治三十七年（一九〇四）には工学博士の学位を授与され、大学教育に専念するつもりであったが、翌三十八年二月、古巣の関西鉄道から技術顧問を委嘱され、さらに、三十九年八月には九州鉄道の仙石貢に嘱望され、野村龍太郎（P.26）の斡旋（あっせん）により、九州鉄道へ転職することとなった。翌四十年、九州鉄道は鉄道国有法により官営となるが、引き続き、帝国鉄道庁中津建設事務所長などとして、日豊（にっぽう）線その他の建設に尽くした。大正二年（一九一三）の日豊線大分川橋梁工事では、「（那波式）デリック・クレーン」による架橋工法を考案し、それまでの「足場法」に比べて安全、迅速、低コストな工法として革新をもたらした。また、わが国初の鉄筋コンクリート造の水路橋や、橋脚を無筋コンクリートで設計施工するなど、新技術を導入した。

京都帝国大学教授時代［個人蔵］
明治39年（1906）、土木学科卒業記念。前列左から2人目が光雄。

辞令［個人蔵］

帝国鉄道庁中津事務所長時代［個人蔵］
左端が光雄



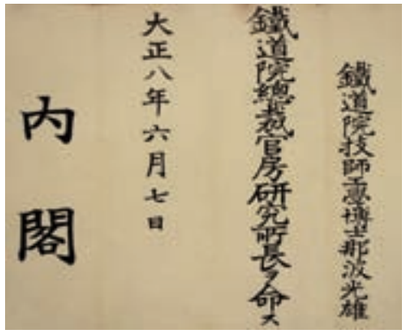
辞令［個人蔵］

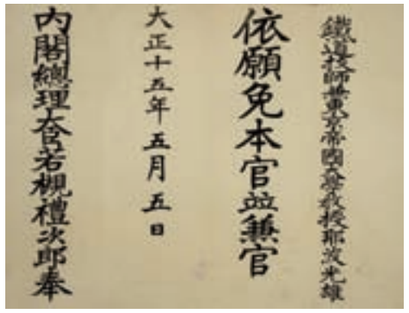
那波光雄関係年譜

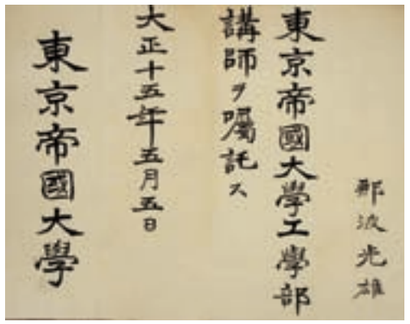
年	齢	
明治2年	1	1869 袋町（現・本町）に生まれる
明治9年	8	1876 興文第四校に入学する
明治14年	13	1881 岐阜県華陽学校大垣分校（中学校）に入学する
明治18年	17	1885 東京神田区私立共立学校に入学する
明治23年	22	1890 帝国大学工科大学土木工学科に入学する
明治26年	25	1893 帝国大学工科大学土木工学科を卒業する
		関西鉄道会社に入社する
		柘植・奈良間線路測量に着手する
明治27年	26	1894 木曽・揖斐川架橋設計を担当する
		揖斐川架橋工事に着手する
明治28年	27	1895 揖斐川架橋工事を終了し、木津川鉄桁設計に着手する
明治29年	28	1896 柘植・奈良間線路工事を担当する
明治31年	30	1898 関西鉄道株式会社　建築課長となる
明治32年	31	1899 関西鉄道株式会社を依願退職し、京都帝国大学助教授（土木工学第二講座）となる
明治33年	32	1900 土木工学研究のため2年間ドイツへ留学する
		ドイツ　ベルリン工科大学に入学する
明治35年	34	1902 帰国し、京都帝国大学理工科大学教授となる
明治37年	36	1904 工学博士となる
		大垣中学校に50円を寄附する
明治39年	38	1906 九州鉄道株式会社に入社する
明治40年	39	1907 帝国鉄道庁技師として日豊線の建設に従事する
明治41年	40	1908 帝国鉄道庁中津建設事務所長となる
明治44年	43	1911 鉄道院大分建設事務所長となる
大正2年	45	1913 デリック・クレーンによる橋梁架設工法を考案する
大正4年	47	1915 鉄道院公務局設計課長となる
大正6年	49	1917 東京帝国大学工科大学教授を兼任する
大正8年	51	1919 鉄道院総裁官房研究所長となる
		震災予防調査委員会委員となる
大正10年	53	1921 満州・支那の鉄道事情を視察する
大正11年	54	1922 第9回国際鉄道会議（ローマ）に出席
		欧米各国の鉄道事情を視察する
大正12年	55	1923 関東大震災起きる
大正14年	57	1925 メートル法実施準備委員会委員長となる
大正15年	58	1926 退官する
		東京帝国大学講師となる（昭和11年まで）
昭和2年	59	1927 「鉄道震害調査書」「同・補遺」を発行する
昭和6年	63	1931 第19代土木学会会長となる
昭和17年	74	1942 「明治以後－本邦土木と外人」を発行する
昭和35年	92	1960 永眠

那波式デリック・クレーンによる橋梁架設［個人蔵］

■大正四年（一九一五）、現場を離れ、鉄道院公務局設計課長に転じた光雄は、国有化以前の会社間でまちまちであった設計方法を統一し、現場での設計・施工の合理化を図った。同六年には東京帝国大学工科大学教授を兼任し、さらに、同八年には鉄道院総裁官房研究所長となった。また、同十一年には、ローマでおこなわれた第九回国際鉄道会議に出席するとともに、欧米各国の鉄道事情を視察した。関東大震災の際には、震災予防調査委員会の委員として鉄道の詳細な被災状況を報告書としてまとめ、その記録は今なお高い評価を受けている。大正十四年には、メートル法実施準備委員会委員長となり、メートル法の導入を図るなど国際的感覚の持ち主であった。明治中期から大正時代の鉄道技術を支え続けた光雄は、大正十五年、鉄道省大臣官房研究所長を最後に退官したが、引き続き、東京帝国大学講師として昭和十一年（一九三六）まで鉄道工学の講座を担当し、多くの技術学生を育てた。また、昭和六年には第十九代の土木学会会長として学会の発展に尽くした。さらに、退官後のライフワークとして、明治初期に日本で活躍した「お雇い外国人」たちの足跡を「明治以後―本邦土木と外人」としてまとめた。







辞令［個人蔵］

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

船町湊の発展に尽くした船問屋

谷九太夫（木因）

たに きゅう だ ゆう

正保3年～享保10年
（1646～1725）

船町湊の船問屋谷家の二代目弥兵衛の長男として生まれる。幼名を伊勢松という、十五歳で九太夫（初代）と名を改め、船問屋の仕事を継いだ。谷家は、豊坂丸、亀坂丸の二艘を持って、藩主の江戸往復の御用船をつとめるほか川船十五艘を持ち、船町湊および大垣城下に繁栄をもたらした。高橋の南（船町三丁目）に残る船町中組常夜灯は、元禄の頃、九太夫（木因）が水運の安全を祈願して建てたものという。俳人としても有名で、松尾芭蕉とはともに京都の北村季吟に師事した。二人の交流は幾度もあり、奥の細道の旅を大垣で終えた時も、九太夫（木因）を訪問している。

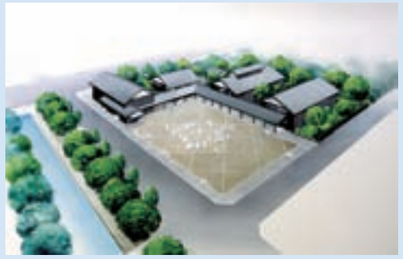
美濃路大垣宿軒別絵図面（部分）［大垣市立図書館蔵］
天保年間に作成された絵地図。「船問屋　九太夫」が谷家の屋敷。

咄つたえ［大垣市立図書館蔵］
九太夫（木因）の孫季因（5代九太夫）によって谷家の来歴が記されている。

谷家のれん［大垣市立図書館蔵］
船問屋の入口を飾った四布のれん。「谷」の文字を染め抜いている。
谷家には、家紋の「陰左三つ巴」を染め抜いた五布のれんも掲げられていた。

ハリヨ博士のコラム

奥の細道むすびの地周辺整備構想



イメージ図
平成20年（2008）、大垣市制90周年を記念して、「奥の細道むすびの地周辺整備構想」を策定した。この構想は、文化の薫り高い大垣の個性を生かし、中心市街地の回遊性の誘発と市内外からの来訪者の増加を目指して、「憩いとにぎわいの空間」を整備するものです。

対象区域
構想の対象区域は、水門川沿いの土地（左図の桃色部分、約5,500平方メートル）とその周辺で、次の機能の整備を進めます。

◇歴史と文化の場の整備
奥の細道むすびの地記念館の整備、先賢館の整備、無何有荘大醒樹（大垣藩藩老小原鉄心（P.54）の別荘）の復元

◇観光・交流産業促進の場の整備
インフォメーション館の整備、観光・交流館の整備、イベント広場の整備

◇その他周辺整備
周辺道路の遊歩道化、水門川の護岸修景、駐車場の整備、川舟運行の試みなど

谷九太夫（木因）関係年譜

		年齢
正保元年	1644	松尾芭蕉生まれる
正保3年	1646	船町に生まれる	1
万治3年	1660	家督を相続する	15
天和元年	1681	江戸で芭蕉と出会う	36
天和2年	1682	芭蕉と鳶の付句をめぐり書簡を応酬する	37
貞享元年	1684	芭蕉、「野ざらし紀行」の旅で大垣の木因（九太夫）亭に泊まる（第1回来訪）	39
貞享3年	1686	家督を娘婿に譲り隠居する	41
元禄元年	1688	芭蕉、「笈の小文」の旅の後、赤坂に滞在、木因（九太夫）と会う（第2回来訪）	43
元禄2年	1689	芭蕉、「奥の細道」の旅で大垣に至り木因（九太夫）を訪ねる（第3回来訪）	44
元禄4年	1691	芭蕉、江戸へ向かう途中、大垣に滞在（第4回来訪）	46
元禄7年	1694	芭蕉、大阪にて没	49

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

芭蕉と交友のあった大垣俳壇の指導者

谷木因（たにぼくいん）

正保3年～享保10年
（1646～1725）

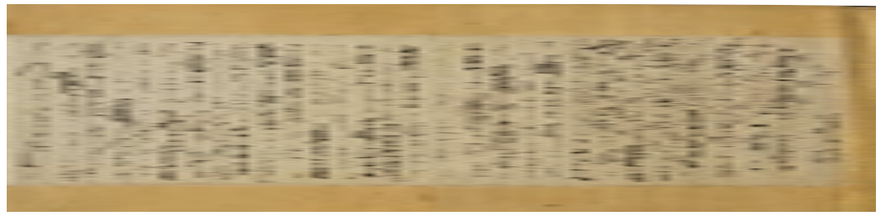
船町湊（みなと）で船問屋を営んだ谷弥兵衛（やへえ）の長男として生まれる。十五歳で九太夫を名乗り家督を相続するが、四十歳で隠退し、その後は風雅の道に専念した。木因は俳号。京都の北村季吟（きぎん）に和歌や俳諧を学び、相弟子の松尾芭蕉と親交をもった。これがのちの数度にわたる芭蕉の大垣来訪や大垣俳壇の蕉風（しょうふう）化への大きな力となった。俳諧に深く通じ、『連俳秘決抄或問（しょうわくもん）』や『桜下文集（おうかぶんしゅう）』等を著し、美濃の俳諧に多大な影響を与えた。

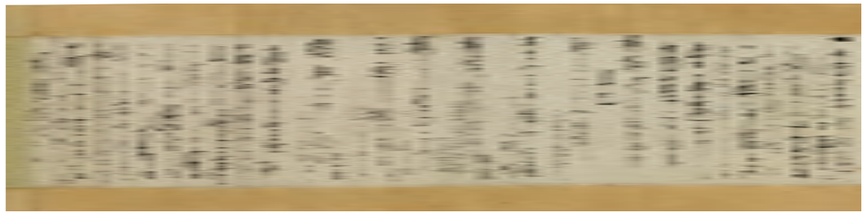
愛用の重硯箱（かさねすずりばこ）［大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵］

■外箱（外家）の底に「元禄十二卯年（一六九九）九月日硯箱十箇　ぬしや利兵衛細工　外家（外箱）船町大工源四郎細工　濃州大垣谷木因」の銘がある。このような組硯は、俳席に用いられた。

「観水軒」額［大垣市立図書館蔵］

■「観水軒」は木因の別号の一つ。師の北村季吟が木因の家を想像して、ここでの月の眺めをほめたことに木因が感激し、製作した額。（現存するのは後世の複製品）



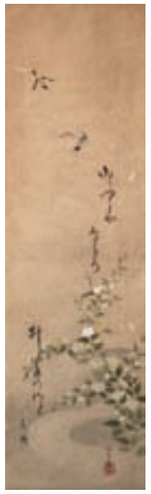


芭蕉書簡　木因宛
［大垣市立図書館蔵］

■天和二年（一六八二）春、桑名滞在中の木因から干白魚が送られてきたことに対する謝礼の書簡。大垣蕉門の動向に触れるとともに、この年大垣訪問の意志があったことが知られる。

木因筆「此萩（このはぎ）の」画賛
洞竹（どうちく）画
［大垣市教育委員会蔵］

色ある浪とよみしを
此萩のさらさにちりて水のうへ　木因



木因筆「山ぶきや」画賛
洞竹画
［大垣市教育委員会蔵］

山ぶきや
鳥に水かふ
井手のさと　木因

※傍島洞竹（そばじまどうちく）は狩野派の絵師で大垣藩画員

谷木因関係年譜

		年齢
正保元年	1644	松尾芭蕉生まれる
正保3年	1646	船町に生まれる	1
万治3年	1660	家督を相続する	15
天和元年	1681	江戸で芭蕉と出会う	36
天和2年	1682	芭蕉と鳶の付句をめぐり書簡を応酬する	37
貞享元年	1684	芭蕉、「野ざらし紀行」の旅で大垣の木因（九太夫）亭に泊まる（第1回来訪）	39
貞享3年	1686	家督を娘婿に譲り隠居する	41
元禄元年	1688	芭蕉、「笈の小文」の旅の後、赤坂に滞在、木因（九太夫）と会う（第2回来訪）	43
元禄2年	1689	芭蕉、「奥の細道」の旅で大垣に至り木因（九太夫）を訪ねる（第3回来訪）	44
元禄4年	1691	芭蕉、江戸へ向かう途中、大垣に滞在（第4回来訪）	46
元禄7年	1694	芭蕉、大阪にて没	49

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

西洋医学の先駆者

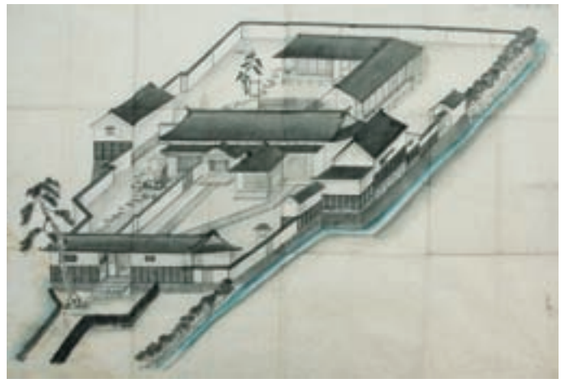
江馬蘭斎（えまらんさい）

延享4年～天保9年
（1747～1838）

伝馬町で版木彫を職業としていた鷲見荘蔵（わしみしょうぞう）の長男として生まれる。大垣藩侍医江馬元澄（えまもとずみ）（初代春齢（しゅんれい））の養子となり、医学の道に入った。名は元恭（げんきょう）、通称春齢（二代）、号は好蘭斎（こうらんさい）（蘭斎）といった。養父を師として漢方医として活躍したが、四十六歳で蘭学を志し、江戸で前野良沢や杉田玄白に学び、大阪・京都などより早く美濃に西洋医学をもたらした。患者には慈悲深く接し、自らは倹約を第一義として、硯（すずり）の水さえ井戸水を用いず、雨水を受けて用いたという。すぐれた才知をもって日夜学問に励むとともに、蘭学塾「好蘭堂」を創設し、多くの門人を世に送り出した。

肖像画（家訓十二ヶ条）［個人蔵］

■江馬春斎筆。七十歳の蘭斎像。家訓は文化二年（一八〇五）、蘭斎が、養父元澄（もとずみ）の教訓をもとにつくったもの。倹約を第一とすること、人としての慈悲と実意をもつことなど、医を業とする者の心得を記している。

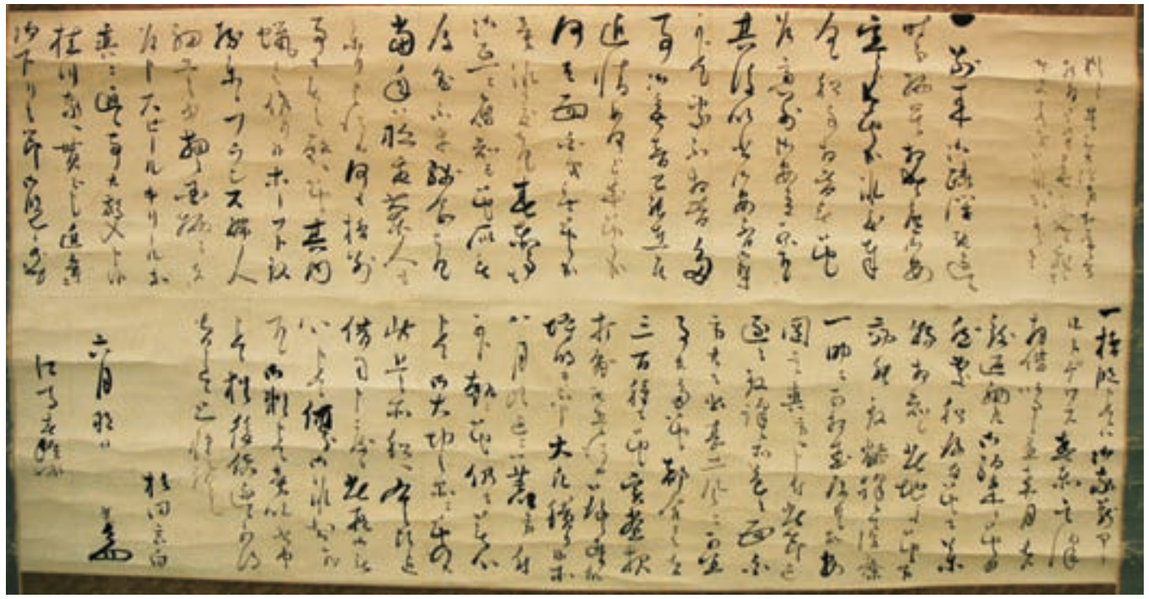


江馬邸鳥瞰図［個人蔵］

■江馬活堂筆。活堂は、蘭斎の孫で蘭方医として活躍し、「藤渠漫筆」九十巻、「近聞雑録」百巻などを執筆している。

解体新書［個人蔵］

■安永三年（一七七四）、杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らが解剖学書「ターヘルアナトミア」を翻訳して出版した日本最初の本格的な西洋医学の翻訳書。本文四巻、付図一巻からなる。これにより、蘭学は急速に広がった。蘭斎は、寛政四年（一七九二）、江戸に赴き、杉田玄白から「解体新書」の詳しい講義を受け、翌年には、前野良沢から蘭学を学んだ。



杉田玄白書簡　蘭斎宛［個人蔵］

■寛政六年（一七九四）六月一日付、玄白六十二歳の時のもの。まず、当年は珍しくオランダ人が江戸に来たが、別に格別の事もなかったようである。四月、商館長ヘムミイがフランス婦人の細工になる蠟（ろう）製のホーフト（頭部）を持って参府東上したので、この解剖模型を見た玄白が大変驚いている。次いで、蘭斎所蔵の「アールドゲワス」というオランダ本草の参考書を、高崎藩松平侯医嶺春泰と大槻玄沢が供覧していたが、それを玄白がわきから見せてもらったこと、そして、その内容に惹かれ、その薬物の効能を安岡玄真（のちの宇田川榛斎）に翻訳させていることなどが書かれている。

■蘭斎が前野良沢のもとで学んでいる時、オランダの医師ボイセンの内科書「人体の排泄物についての論」を翻訳したもの。五液（尿・大便・汗・唾液・おう吐物）の検査による診断法を説明している。寛政五年（一七九三）頃から翻訳を始め、文化十三年（一八一六）に出版された。わが国最初の西洋内科診断書といわれている。

五液診法の写本［個人蔵］

■蘭斎はオランダ書翻訳のため幾種類もの単語帳を作っている。医学用語を主としたものや一般的な単語のもの、あるいはＡＢＣ順のものや折本仕立にしたものなど、さまざまである。これは、出典を明記し凡例をつけたもので蘭斎の研究の跡がよく見られる。

蘭斎のオランダ単語帳
［個人蔵］

江馬蘭斎関係年譜

		年齢
延享4年	1747	版木彫　鷲見荘蔵の長男として生まれる	1
安永2年	1773	養父元澄が藩主戸田氏教の侍医となる	27
安永3年	1774	養父が没し、江馬家を継ぐ	28
天明元年	1781	大垣藩士郡奉行の娘　乃宇と結婚する	35
天明7年	1787	長女　多保（細香）生まれる	41
天明8年	1788	「論語訓詁解」を完成させる	42
寛政元年	1789	藩主の侍医として江戸に下る	43
		二女　柘植生まれる	
		妻　乃宇永眠	
寛政2年	1790	大垣藩士の娘　佐野と結婚する	44
寛政4年	1792	再び江戸に下り杉田玄白から「解体新書」の講義を受ける	46
寛政5年	1793	前野良沢につき蘭学を学ぶ	47
寛政7年	1795	大垣藤江村に開業する	49
		蘭学塾「好蘭堂」を開設する	
寛政10年	1798	京都西本願寺法主の病気を治療する	52
文化元年	1804	「五液診法」の開板願書を出す	58
文化2年	1805	「家訓十二ケ条」を記す	59
文化3年	1806	藩主氏教診察のため江戸に下る。藩主永眠	60
文化4年	1807	侍医を退任。二女柘植の夫松斎が継ぐ	61
文化9年	1812	司馬江漢が訪問する	66
文化10年	1813	頼山陽初めて江馬家を訪問する	67
文化13年	1816	「五液診法」を刊行する	70
文政3年	1820	養嗣子松斎が没したため、再び医業に専念する	74
天保元年	1830	「言志篇」を記す	84
天保2年	1831	妻　佐野　永眠	85
天保3年	1832	「人生観」を記す	86
天保8年	1837	遺書を記す	91
天保9年	1838	永眠	92

西本願寺御門跡御病気ニ付京都江罷越候一件覚書
［個人蔵］
寛政10年（1798）

■江戸で蘭学を学んで大垣に帰った頃は、漢方医全盛の世であり、蘭方医となった蘭斎の診察を求める者はほとんどいなかった。その頃、京都西本願寺法主（ほっす）文如上人（ぶんにょしょうにん）が長い間、病に伏せていた。信徒一同大いに心配していた時、「大垣の江馬蘭斎という蘭医は治療が大変うまい」という者がおり、本町の縁覚寺を通じて、本願寺から治療の依頼があった。弟子や供回りを連れた蘭斎は、早速上洛して法主を診察したところ、処方した薬剤が功を奏し、難病は全治した。この話が広がり、蘭斎は在京中に、日々二百人余りを診察したという。この後、蘭方医としての蘭斎の名声は大いに上がったのである。

江馬家門人姓名録［個人蔵］

■寛政七年（一七九五）に江戸から戻った蘭斎は、藩医として仕えながら、藤江の自宅で蘭学塾「好蘭堂」を開いた。この塾で学んだ門人は、その後、全国各地に蘭学を広めていった。飯沼慾斎（P. 4参照）もその一人である。

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

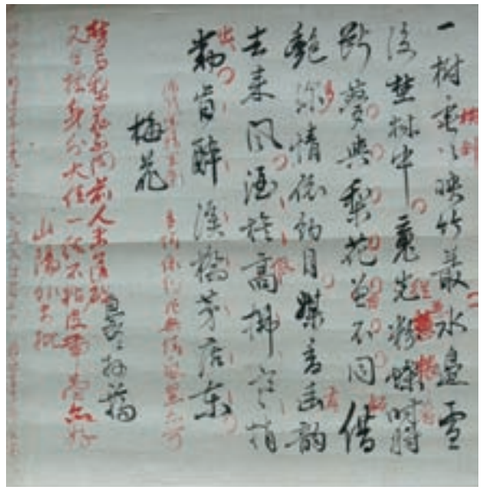
墨竹画を得意とした女流漢詩人

江馬細香

天明7年～文久元年
（1787～1861）

大垣藩主戸田氏教の侍医江馬蘭斎の長女として生まれる。名を多保、字を細香、号を湘夢という。幼少の頃より書画の才能に富み、京都の玉潾和尚（後に永観堂住職）に墨竹画を学び、後には浦上春琴に師事し、南宋画も学んだ。父の蘭斎を訪ねた儒者・詩人として有名であった頼山陽に入門後は、詩文・書画ともに大きな影響を受け、生涯の師と慕った。美濃の文人ともさかんに交流し、梁川星巌・紅蘭夫妻ら頼山陽の門下生と「白鷗社」を、小原鉄心らとともに「咬菜社」を結成した。

竹と雀の図［個人蔵］
細香5歳の作。



細香詩稿　山陽添削　梅花［個人蔵］

■細香は七回にわたって京都の頼山陽を訪ね、詩の指導を受けただけでなく、日常的に書簡を往復して添削指導を受けた。山陽の朱が入った詩稿が、今も数多く残されている。二人の交流が深まる中、文化十一年（一八一四）、頼山陽は細香に求婚したが、父の蘭斎の一存で断ってしまった。胸中深く山陽への思慕を秘めていた細香は、ひどく落胆したといわれる。一方、細香の心を知る由もない山陽は、彼女を断念し、友人の養女と結婚した。これを境として細香は心ならずも一生を未婚のまま過ごすに至った。

細香

水墨竹の図
［大垣市教育委員会蔵］

竹月蕭騒憶写真　千年邈矣李夫人
閨窓掃盡無塵點　一瓣名香要手親

湘夢遺稿［大垣市立図書館蔵］

■安政三年（一八五六）冬、七十歳になった細香は脳出血にかかり、年の暮に吐血した。細香の師頼山陽も、肺結核ではあったが同様に吐血していたので、その病状が似ているのに驚き、自分を慰めた。病気は翌年五月頃にはほとんど癒えたが、文久元年（一八六一）、脳出血が再発し、師山陽の没した三十年目の同じく白菊の匂う晩秋の九月四日永眠した。

吾が年七十四
情味灰よりも冷ややかなり
無病の身仍ほ痩せ
綿衣窄く裁たんと欲す

この詩が細香の遺稿の絶筆となっている。

江馬細香関係年譜

		年齢
天明7年	1787	大垣藩主の侍医江馬蘭斎の長女として生まれる	1
寛政5年	1793	赤坂の矢橋邸で荻生徂徠の書を臨書する	7
寛政11年	1799	この頃、玉潾に墨竹画を学ぶ	13
文化10年	1813	頼山陽初めて江馬家を訪問する	27
		頼山陽の門人となる	
		浦上春琴に南宋画を学ぶ	
文化11年	1814	頼山陽から求婚される	28
		初めて京に上り、頼山陽らと清遊する	
文化14年	1817	二回目の山陽訪問	31
文政2年	1819	三回目の山陽訪問	33
		この頃、詩社「白鷗社」を結成する	
文政5年	1822	伊豆原麻谷に「白鷗社集会図」を描かせる	36
		四回目の山陽訪問	
文政7年	1824	五回目の山陽訪問	38
文政9年	1826	父蘭斎の「論語訓詁解」を刊行する	40
文政10年	1827	六回目の山陽訪問	41
文政12年	1829	伊勢に遊ぶ	43
天保元年	1830	七回目、最後の山陽訪問	44
天保3年	1832	頼山陽没す	46
天保8年	1837	京都に上る	51
天保9年	1838	父 蘭斎 病没する	52
天保10年	1839	名古屋・京都に遊ぶ	53
天保12年	1841	京都・大阪に遊ぶ	55
弘化3年	1846	この頃詩社「黎祁吟社」を結成する	60
嘉永元年	1848	詩社「咬菜社」の社長となる	62
嘉永2年	1849	京都に遊ぶ	63
安政3年	1856	脳出血で倒れる	70
文久元年	1861	脳出血再発　永眠	75

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

幕末の漢詩人で勤王の志士

梁川星巌

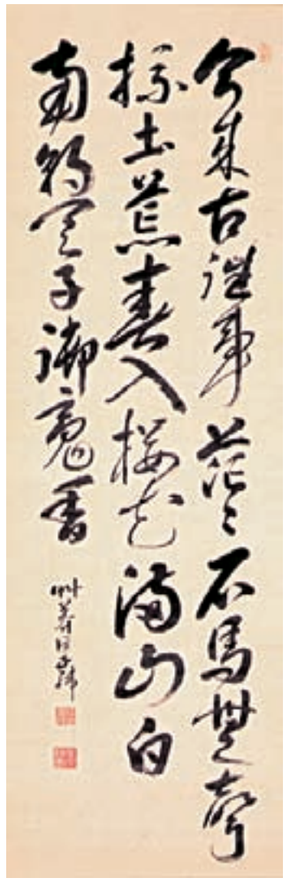
寛政元年～安政5年
（1789～1858）

現在の曽根町に生まれ、幼少の頃から華渓寺住職太随和尚に歴史や詩文を学ぶ。江戸で学んだのち帰郷し、私塾「梨花村草舎」を開く。妻の紅蘭との五年にわたる西国の旅を経て、江戸お玉が池に「玉池吟社」を開き、詩壇の中心人物となった。また、藤田東湖や佐久間象山らと交わり、時事への関心をも高めた。のちに京都鴨川畔に居を移し、勤王の志士の導き手となった。京都で流行したコレラにかかり没したが、直後に「安政の大獄」が起こったため、世間から「死（詩）に上手」と評された。

鉄如意
［大垣市教育委員会蔵 岐阜県指定重要文化財］

明星津石
［大垣市教育委員会蔵 岐阜県指定重要文化財］

■文政九年（一八二六）、赤坂の金生山を訪れたとき、市橋村谷理九郎から譲り受けて珍重した。このような穴の多い石灰岩の奇石は、中国では「太湖石」と呼ばれ、文人に珍重され、庭園等に配された。日本では金生山が産出地として知られている。「吾が郷西山の下澗水（谷川の水）あり。いわゆる明星津なるものすなわちこれなり。多くの怪石を出す。・・・其の色蒼黒、峯巒洞壑悉具わる。信に希世の宝なり。」と言い、明星津石歌を作っている。



吉野懐古
［華渓寺蔵　大垣市指定重要文化財］

星巌66歳の作。
河野鉄兜・藤井竹外の詩とあわせて「吉野三絶」と称されている。

今来古往事茫々
石馬無声抔土荒
春入桜花満山白
南朝天子御魂香

私が吉野山に来て花を見るという今日という日は、現にここにあるのだが、昔のことはみな過ぎ去って、すべての事は茫々として何もない。御陵の前にある石の馬は声もないし、御陵に盛り上げられた土も荒れ果てている。
春は桜の木に吹き入って、このように白く爛漫と花をさかせた。変わらぬのはこの春だけだ。
春の力で開いた花に埋もれて、南朝の天子さまの御魂は、いつまでも香うていらっしゃる。

山水の図
［個人蔵　大垣市指定重要文化財］

東村西村春有無　梅花欲老白模糊　春風吹雪上客榻　興來爲此雪棧圖
連峰去天不盈尺　長棧帶雪光絡繹　馬影凌兢何爲者　定知遠道疲行没
噫吁戲危乎高哉　蜀道之難々於上　青天誰其事之李　謫仙古來憚嶮乃
爾々况復値此風　雪寒圖成自笑還　自哭我亦年來踪　牢落十踰函關七
渡河鬢綴冰珠脚　跼蹐何似山中伴　山翁尊前占瑞話　年豐何當歸來第
屋□爛醉高歌拆掌　重與看此白玲瓏

梁川星巌関係年譜

		年齢
寛政元年	1789	曽根村（現・曽根町）に生まれる	1
寛政7年	1795	華渓寺太隨和尚に学ぶ	7
文化4年	1807	江戸で学ぶ	19
		山本北山の奚疑塾に入る	
文化6年	1809	大垣に帰る	21
文化7年	1810	再び江戸の奚疑塾に入る	22
		北山門下の十哲といわれる	
文化14年	1817	帰郷後、塾「梨花村草舎」開く	29
文政2年	1819	この頃、詩社「白鷗社」を結成する	31
文政3年	1820	紅蘭と結婚する	32
文政4年	1821	単身で旅に出る	33
文政5年	1822	紅蘭と西国への旅に出る	34
文政9年	1826	帰郷する	38
文政10年	1827	京都木屋町に住む	39
天保3年	1832	頼山陽没す	44
		江戸に住む	
天保5年	1834	詩塾「玉池吟社」を開く	46
弘化2年	1845	大垣に帰る	57
弘化3年	1846	京都に住む	58
安政5年	1858	安政の大獄はじまる	70
		永眠	

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

星巌とともに詩画の才能を発揮した才女

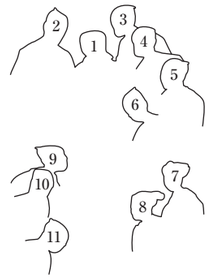
張紅蘭（ちょうこうらん）

文化元年～明治12年
（1804～1879）

現在の曽根町の生まれ。幼名は、きみ、のちに紅蘭と号した。十四歳の時、遊学先の江戸から戻った梁川星巌が開いた「梨花村草舎（りかそんそうしゃ）」で詩文を学び、十七歳で星巌と結婚。夫婦で五年にもおよぶ西国の旅に出、各地で見聞したことをもとに三十一首の優れた詩を残した。その後、京都や江戸において多くの文人墨客（ぼっかく）と交わり、生涯に四百余首の詩をつくったとされる。画にも才能を発揮し、数多くの作品を残している。

白鷗社集会図（はくおうしゃ）［個人蔵］

■白鷗社は、文政二年（一八一九）に結成された漢詩を研鑽（けんさん）するための結社。江戸時代においては儒学者・文人の素養として、漢詩の才能が要求された。そのため、このような結社で、互いに自作の詩を発表し、批評しあった。美濃地方においては、安永・天明年間に岐阜の山田鼎石（ていせき）が主唱した「鳳鳴社（ほうめいしゃ）」と弘化・嘉永年間の「皎菜社（こうさいしゃ）」、文化・文政年間の「白鷗社」の三つが知られている。文化十年（一八一三）の頼山陽による大垣訪問は、美濃漢詩界に多大な影響を与え、山陽の門下生になる者が急増した。白鷗社は、こうした山陽の門下生が中心であった。参加した主な人物は、梁川星巌（P.50）・紅蘭夫妻をはじめ、揖斐の柴山老山、上有知（こうずち）（現・美濃市）の村瀬藤城（とうじょう）、大垣の江馬細香（P.48）を主軸として、村瀬藤城の門下生である下有知（しもうち）（現・関市）の塚原篁園（こうえん）、大垣の金森匏庵（ほうあん）（金森吉次郎 P.82の祖父）、高田（養老）の柏淵蛙亭（かしわぶちあてい）、日比野草川、服部筌岳、墨俣の沢井樵歌、石原東堤といった美濃漢詩界のそうそうたるメンバーであった。白鷗社の同人は、月一回、伝馬町の実相寺に集まり、詩文について大いに論議し、研鑽につとめた。



1 梁川星巌
2 柴山老山
3 服部筌岳
4 塚原篁園
5 石原東堤
6 村瀬藤城
7 張紅蘭
8 江馬細香
9 沢井樵歌
10 日比野草川
11 柏淵蛙亭

紅蘭筆 群蝶之図［個人蔵］

條風百草一齊花　朶朶分明剪綺霞　也識東君鍾愛甚　送春偏到粉侯家
低飛無力舞傞傞　奈此春光駘蕩何　誰氏窈娘吮青管　也應依様畫眉螺
故臺芳草罩煙霏　萬古青陵事已非　愛箇貞魂吹不散　春風随處作團飛

老龍琴（七絃琴）［大垣市郷土館蔵］

■老龍琴（七絃琴）は、中国の伝統楽器で、弦は七本。琴柱（ことじ）はなく徽（き）と呼ばれる印が十三あり、これに従い左手で弦を押さえて右手で弾く。

嘉永五年（一八五二）四月、紅蘭は、京都の商人からこの古い琴を買い求めた。琴の裏には「老龍」の二字が刻してあり、印に「笑傲烟霞」の四字がある。買琴歌によれば、非常に喜んでいる様子で、漆が古く木目は髪のように細い、断紋が梅花のようで、五百年くらい前のものだと言っている。

買琴歌

壬子の夏建卯の月。
商人琴を携えて来りて夸（こ）説す。
かくの如きの器は世に希なるところと。
古漆断紋は髪よりも細し。
余の琴を求むること年久し。
何んぞ料（はか）らんや一旦尤（ゆう）物を見んとは。
古気森然として来りて人を衝く。
目悦び心抬（よろこ）びて口訥なるがごとし。（以下略）

ハリヨ博士のコラム

紅蘭は、氏を常に「張」あるいは「張氏」と称した。これは曽祖母の生家が尾張であり、家格が大垣の稲津家（紅蘭の父は稲津長好）よりもかなり上であることを誇りとしていたためである。

張紅蘭関係年譜

		年齢
文化元年	1804 曽根村（現・曽根町）に生まれる	1
文化14年	1817 星巌の塾「梨花村草舎」で学ぶ	14
文政2年	1819 この頃、詩社「白鷗社」を結成する	16
文政3年	1820 星巌と結婚する	17
文政5年	1822 星巌と西国への旅に出る	19
文政9年	1826 帰郷する	23
文政10年	1827 京都木屋町に住む	24
天保3年	1832 頼山陽没す	29
	江戸に住む	
弘化2年	1845 大垣に帰る	42
弘化3年	1846 京都に住む	43
嘉永5年	1852 老龍琴を購入する	49
安政5年	1858 安政の大獄はじまる（翌年まで）	55
	捕らえられる	
安政6年	1859 釈放される	56
万延元年	1860 京都の旧宅に住む	57
文久3年	1863 星巌遺稿を完成させる	60
明治10年	1877 美濃に遊び曽根村に寄る	74
明治12年	1879 永眠	76

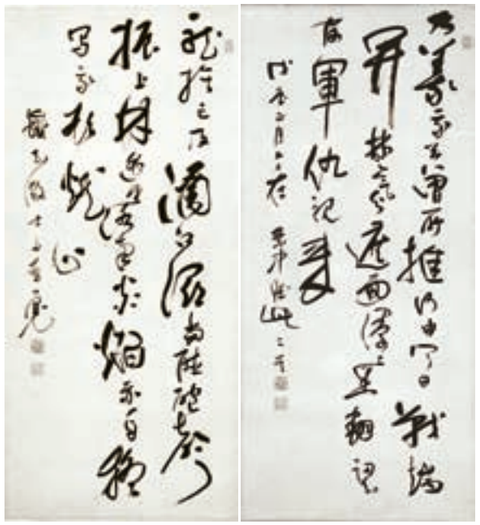
秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

大垣藩の藩政改革の推進者

小原鉄心

文化14年～明治5年
（1817～1872）

大垣藩士小原忠行の長男として生まれる。藩老として大垣藩の財政・軍政改革を推進した。ペリー来航時は浦賀に出兵、禁門の変に際しては御所を守護した。明治新政府のもとで参与となり、大垣藩の大参事となった。鳥羽伏見の戦いでは、子忠迪が幕府軍の先鋒となり砲を発したが、時勢を説き、激論の末に藩論を勤王に統一した。一方で文雅風流を好み、林村（現・林町）に別荘「無何有荘」を構え、東西の志士や学者、文人と詩文を談じ国事を論じた。梅をこよなく愛し、酒を好み、酔いにまかせて筆を揮った話はよく知られている。



鉄心書「禁中において二首を賦す」［個人蔵　大垣市指定重要文化財］

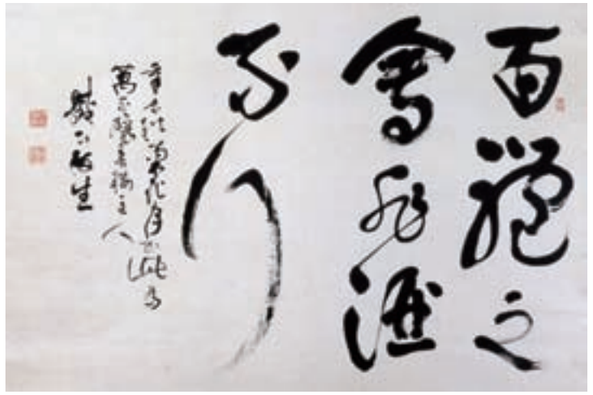
■慶応三年（一八六七）、将軍徳川慶喜は大政を奉還し、ついで朝廷は、王政復古の大号令を発令すると、明治新政府は、広く人材を天下に求めた。明治元年（一八六八）一月三日、五十二歳の鉄心は選ばれて京都に入り、参与として国事に参画した。この日に、旧幕府軍と新政府軍との間に鳥羽・伏見の戦いが起こった。当時、大垣藩兵を率い、慶喜の親衛隊として大阪にいた鉄心の子忠迪は、鳥羽街道の先陣を命じられ、二日午後、淀に着いた。鉄心は、これを聞いてひどく驚いた。父鉄心は朝廷方にあり、子忠迪は幕府方であったからである。鉄心は、早速、使者を忠迪のもとに送り説得したが、既に隊は戦闘に入っていた。鉄心が心配したかいもなく、ついに大垣藩は一時「朝敵」の汚名を受けることとなった。この時、鉄心は、父としての気持ちを詩によんだ。

大義我兵曽所推　何由今日戦端開
楚氛遮面漫漫黒　翻認官軍仇視来
　戊辰正月五日在禁中賦此二首
龍旗已及澱江潯　尚聴砲聲振上林
遥望洛南炎焔赤　自疑写我欲燃心
　鉄心徴士　小原　寛

大義我が兵曽て推す所
何に由って今日戦端を開く
楚氛面を遮って漫漫として黒し
翻えって官軍を認めて仇視し来る
　戊辰正月五日禁中に在り此の二首を賦す
龍旗已に及ぶ澱江の潯
尚聴く砲声上林を振う
遥かに望む洛南炎焔の赤きを
自ら疑う我が燃んと欲する心を写すかと
　鉄心徴士　小原　寛

八日、鉄心は急ぎ京都を出発し、十日に帰藩して時勢を説き、約四時間にわたる激論の末、藩論を勤王にまとめた。即刻急使を京都へ送り、朝廷への忠勤の旨を誓約した。その後、諸藩は大垣藩にならって帰順していった。鉄心は、藩や国の進むべき道を真剣に考え、賢明な判断によって、将来を見通した。

■鉄心の酒好きは有名で、行きつけの酒屋で、盃を傾け、酔いが廻り、興がのると筆をとり、鮮やかに大書したという。また、梅を愛し、多くの遺墨や詩文をのこした鉄心は、嘉永元年（一八四八）、江馬細香（P.48）を社長に推薦して、宇野南村・松倉瓦鶏・鳥居研山・溪毛芥（南条文雄　P.56の父）らと詩文を楽しむ「咬菜社」を結成している。



酔中大書［個人蔵　大垣市指定重要文化財］
明治4年（1871）9月の作

「百禮之会　非酒不行
辛未秋菊花月書此為
萬家釀春楼主人
鉄心醉生」

百礼の会　酒あらずんば　行なわず

鉄心遺稿［大垣市立図書館蔵］
明治6年（1873）刊。

小原鉄心関係年譜

		年齢
文化14年	1817	大垣藩士小原忠行の長男として生まれる	1
天保元年	1830	8代藩主戸田氏庸に御目見えし、二十人扶持を賜る	14
天保7年	1836	この頃から斎藤拙堂に学ぶ	20
天保13年	1842	家督を継ぎ藩の会計事務を執る	26
天保14年	1843	江戸の梁川星巌を訪問する	27
嘉永元年	1848	詩社「咬菜社」を結成し、江馬細香を社長にする	32
嘉永3年	1850	9代藩主戸田氏正から藩政改革の命令を受ける	34
嘉永6年	1853	ペリーの来航にあたり浦賀に藩兵を派遣する	37
安政元年	1854	ペリーの再来にあたり藩兵とともに浦賀の警護につく	38
安政3年	1856	林村（現・林町）に別荘「無何有荘」を構える	40
文久3年	1863	藩主に従い京都を守護する	47
元治元年	1864	禁門の変で長州藩を撃退する	48
明治元年	1868	朝廷に召されて参与職に就く	52
明治2年	1869	大垣藩大参事となる	53
明治5年	1872	永眠	56

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

梵語学の道を究めた文学博士

南条文雄

嘉永2年～昭和2年
（1849～1927）

船町の誓運寺住職渓毛芥の三男として生まれる。大垣藩校で学んだのち、東本願寺の高倉学寮に入学した。その後、本山から選ばれてイギリスへ留学し、オックスフォード大学で梵語（サンスクリット語）学を研究した。明治十六年（一八八三）には、今日の仏教研究においても欠かせない不朽の名著『大明三蔵聖教目録』を編纂し、「マスター・オブ・アーツ（修士号）」の学位をうけた。明治二十一年、わが国初の文学博士となり、のちに真宗大谷大学学長をつとめた。この間、各校で教鞭をとりながら、近代的な仏教研究の普及に尽力するとともに、「梵文入楞伽経」などの研究書をはじめ多くの著書を残した。

高倉学寮入学許可証［誓運寺蔵］

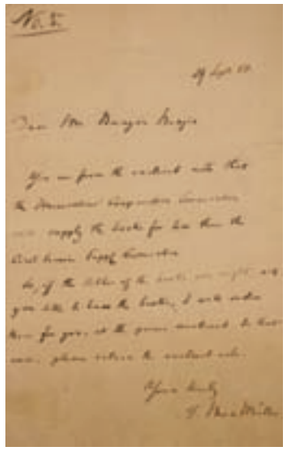
御用之儀、在之間、明
廿八日卯刻、知事所へ
可被罷出者也
辰五月　知事印
濃州
僧恪子

御用の儀、之在間、明廿八日卯刻、
知事所へ罷り出られるべきものなり。
辰五月　知事
濃州
僧恪子

■慶応二年（一八六六）大垣藩は、藩老小原鉄心の提案で僧兵隊が組織されることとなり、文雄も隊員の一人となった。そのため、文雄は大垣藩士の子弟に限られていた藩校への入学が認められ、大垣藩督学野村藤陰に漢学を学ぶことができた。また、父毛芥と兄良順にすすめられ、広瀬淡窓の門人で本郷村光慶寺の稲葉道貫に仏教学を学ぶこととなった。明治元年（一八六八）、大垣藩の僧兵隊は解散、同年四月、文雄は学問の道を志し、両親の許しを得るとともに、稲葉道貫の紹介状を携えて京都東本願寺の高倉学寮（大谷大学の前身）に向かった。

高倉学寮木札［誓運寺蔵］

南条笠原両師書簡［大谷大学博物館蔵］

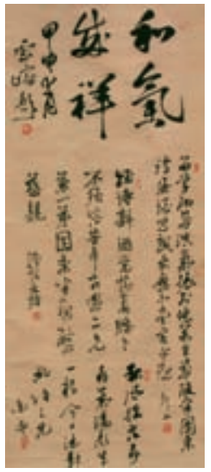


マックス・ミュラー書簡 文雄宛
［岐阜県歴史資料館蔵］

■明治九年（一八七六）文雄と笠原研寿の二人は、本山から選ばれてイギリスに留学することになり、横浜から出向、その道中、香港やセイロン（スリランカ）に寄港し、旅の様子を本山に報告している。

大明三蔵聖教目録［大谷大学図書館蔵・岐阜県歴史資料館蔵］
大谷大学図書館蔵の同書は、病に倒れ、先に帰国した親友の笠原研寿に贈呈したものである。

■イギリスに着いた文雄と笠原研寿は、日本学生会に参加して、英語を学んだ。大垣出身の関谷清景（P.80）とも親しく交流した。明治十二年（1879）、オックスフォード大学のマックス・ミュラー博士のもとで梵語研究をはじめることとなった。文雄は博士に協力してサンスクリット文の「金剛般若経」「無量寿経」「阿弥陀経」「般若心経」「尊勝陀羅尼」の刊行を果たした。そして、不朽の名著といわれた英文「大明三蔵聖教目録」を著し、明治十七年三月十八日、マスター・オブ・アーツ（修士号）の学位を受けた。イギリス留学八年におよぶ苦学が実り、帰国の途に就くことになった文雄は三月二十八日、ロンドンを出発した。



四兄弟寄せ書き［誓運寺蔵］

和気祥を成す
甲申十月
雲嶂題（長男　溪良順・誓運寺住職）

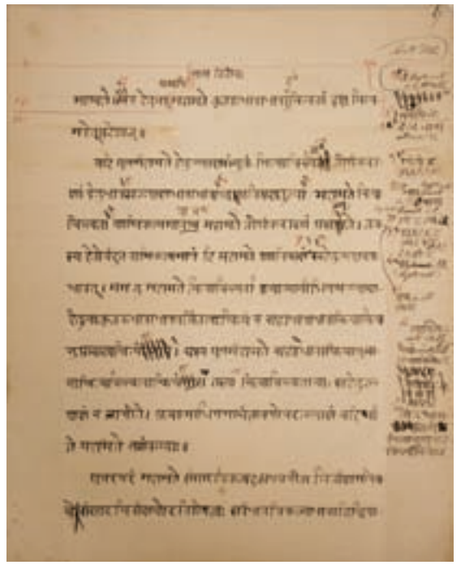
留学功成り浩気振う。他を知る万里幾酸辛。
団楽詩酒児戯を談じ、要ず北堂垂白の親を慰めん。
刺山（二男　泉得雄・久瀬川大泉寺住職）

詩を賦し酒を斟み情真なるを覚ゆ。膝下須らく苦辛を談ずべからず。相遇う二兄と一弟と。団楽半夜慈親を慰む。
僧恪文雄（三男　南条文雄）

秋風落節を揺がし、喜気満顔に生ず。一樽今日の酒。対酌して三兄に侍す。
円義（四男　藤円曦・中町乗蓮寺住職）

■日本に帰国した文雄は、実父毛芥の一周忌にあたる明治十七年（一八八四）十月、郷里大垣の誓運寺に立ち寄り、毛芥の霊前に礼拝ののち、母操と兄弟たちに留学中の出来事などを報告した。そして、久しぶりの再会を喜び、この日の記念にと四兄弟が筆をとった。

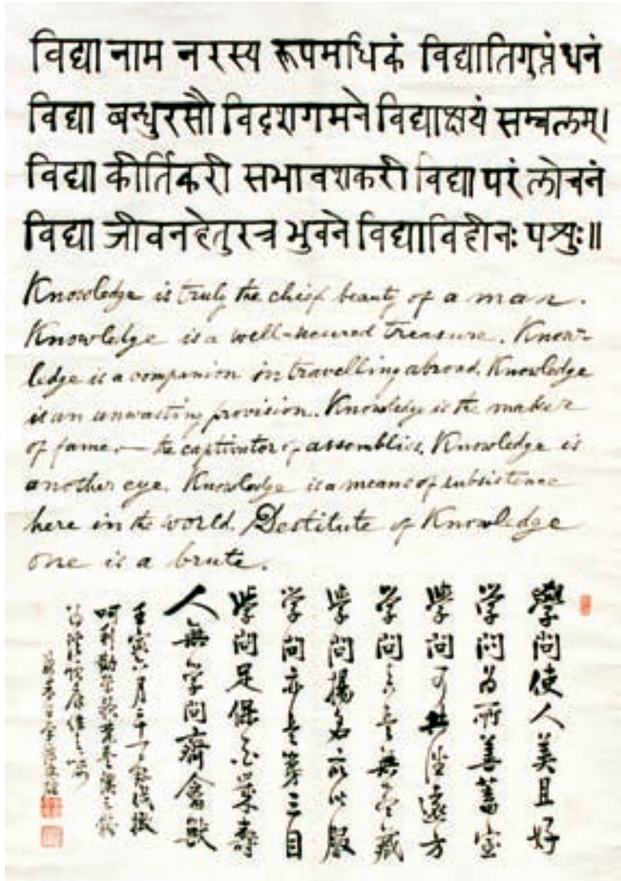
南条文雄・泉芳璟訳自筆草稿「邦訳梵文入楞伽経」
［大谷大学博物館蔵］
昭和2年（1927）2月に発行された泉芳璟との共訳による「邦訳梵文入楞伽経」の自筆草稿。推敲の跡が見られる。



校訂自筆草稿「梵文入楞伽経」
［大谷大学博物館蔵］
大正2年（1913）に発行された「梵文入楞伽経」の自筆草稿。推敲の跡が見られる。

大谷大学卒業記念写真［大谷大学真宗総合研究所蔵］
大正11年（1922）卒業生（第29期生）。最前列右から6人目が学長の文雄。背景の校舎「尋源館（旧本館）」（大正2年建築）は、大谷大学のシンボルとして現存している。

■明治十七年（一八八四）十月、文雄は東京に出て、東京大谷教校教授に就任するとともに、翌年二月には、東京帝国大学文科大学で梵語学の嘱託講師となった。二十年一月、本山寺務所と東京帝国大学に辞表を提出してインド・中国の仏教遺跡を探訪した。旅先で、養父神興が病気で倒れたとの報に接し、五月に急遽帰国することとなった。神興の病状は悪化が進み六月に没したため、文雄は憶念寺を継ぐこととなる。二十一年二月には、名古屋普通学校長兼教授となり、清沢満之らと講壇に立った。同年六月には、日本第一号の文学博士の学位を授与され、三十九年には、帝国学士院の会員となり、翌年二月には大谷派最高の学位である「講師」の称号が授けられた。大正三年（一九一四）七月には真宗大谷大学学長に就任した。



विद्या नाम नरस्य रूपमधिकं विद्यातिगुप्तं धनं
विद्या बन्धुरसौ विदेशगमने विद्याक्षयं सम्बलम्।
विद्या कीर्तिकरी सभावशकरी विद्या परं लोचनं
विद्या जीवनहेतुरत्र भुवने विद्याविहीनः पशुः॥

Knowledge is truly the chief beauty of a man. Knowledge is a well-hoarded treasure. Knowledge is a companion in travelling abroad. Knowledge is an unwasting provision. Knowledge is the maker of fame — the captivator of assemblies. Knowledge is another eye. Knowledge is a means of subsistence here in the world. Destitute of Knowledge one is a brute.

學問使人美且好
學問為所善藏宝
學問可無遠方
學問之幸無衰時
學問為名所揚
學問亦是百歲寿
學問是保之第三目
學問足保之第四目
人無學問齎禽獸

壬寅（明治三十五年）六月二十一日
伐撥呵利（バルトリハリ）勧学の歌梵・英・漢三体を録す
溪順康住の嘱の為なり
碩果生　南條文雄

バルトリハリ歓学の歌［誓運寺蔵］

学問は人をして美且つ好ならしむ。
学問は善く宝を蓄うる所為り。
学問は共に遠方に往く可し。
学問は真に是れ無尽蔵なり。
学問は名を揚げ衆皆服す。
学問は亦是れ第三の目。
学問は百歳の寿を保つ。
人学問無くば禽獸に齊し。

■文雄は、碩果（せきか）・小老南などと号したが、碩果は大きい柿、すなわち大垣を意味するものであるといわれている。また小老南は養父南条神興の号が老南であったため、養父を慕って称したものという。

愛用の懐中時計
［岐阜県歴史資料館蔵］

南条文雄関係年譜

		年齢
嘉永2年	1849	船町の誓運寺住職渓毛芥の三男として生まれる	1
慶応2年	1866	大垣藩僧兵隊に入り、藩校での学問を許される	18
		大垣藩校督学野村藤陰に漢学を学ぶ	
明治元年	1868	京都東本願寺高倉学寮に入学する	20
明治4年	1871	福井県憶念寺住職南条神興の養子となる	23
明治9年	1876	学友笠原研寿とともにイギリスへ留学する	28
明治12年	1879	オックスフォード大学で梵語学を研究する	31
明治16年	1883	英訳『大明三蔵聖教目録』を編纂する	35
明治17年	1884	「マスター・オブ・アーツ（修士号）」（オックスフォード大学）の学位をうけ帰国する	36
		東京大谷教校の教授となる	
明治18年	1885	東京大学講師となる	37
明治21年	1888	文学博士となる	40
明治23年	1890	華族女学校（現・学習院）の英語講師となる	42
明治34年	1901	真宗大学（現・大谷大学）教授となる	53
明治39年	1906	帝国学士院（現・日本学士院）会員となる	58
明治40年	1907	大谷派の最高学位「講師」の称号をうける	59
大正3年	1914	真宗大谷大学（現・大谷大学）学長となる	66
昭和2年	1927	永眠	79

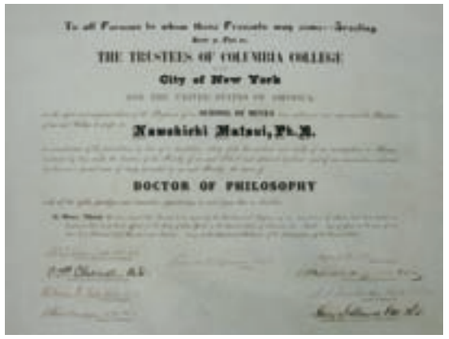
秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

東大総長をつとめた大学教育の先駆者

松井直吉（まつい なおきち）

安政4年～明治44年
（1857～1911）

大垣藩士和田為助の二男として生まれ、のち旧大垣藩士松井喜太郎の婿養子（むこ）となる。幼い頃から大垣藩校で学び、貢進生（こうしんせい）として大学南校（現・東京大学）へ進学。文部省の第一期海外留学生としてコロンビア大学（アメリカ）に留学し、「ドクター・オブ・フィロソフィー（博士号）」の学位をうける。帰国後は東京大学理学部教授、帝国大学農科大学学長、第七代東京帝国大学総長を歴任。この間、わが国初の理学博士となった。また、文部省の実業教育局長、高等学務局長、専門学務局長を歴任し、実業教育・大学教育の充実につとめた。和田万吉（P.66）は実弟。



学位記「ドクター・オブ・フィロソフィー（博士号）」
コロンビア大学［個人蔵］

■明治四年（一八七一）、直吉は成績優秀のため、大垣藩貢進生として関谷清景（P.80）とともに大学南校に入学し、化学を専攻した。同八年、数百名の中から選ばれた十一人の文部省第一期海外留学生の一員として、アメリカ・ニューヨークのコロンビア大学へ留学した。十一年にはコロンビア大学鉱山学校化学科を卒業し大学院へ進学。十三年、有田陶土の研究によって、当時の日本人としては極めてまれな最高学位「ドクター・オブ・フィロソフィー（博士号）」を授与された。

文部省第一期海外留学生の同期［個人蔵］
明治38年（1905）、文部省第一期海外留学生の同期が、ポーツマス条約全権大使小村寿太郎外相の歓送会を記念して撮影。前列右から小村寿太郎,松井直吉,原口要,菊地武夫,齋藤修一郎,後列右から平井晴二郎,長谷川芳之助,古市公威,南部球吾,鳩山和夫。この年、直吉は東京帝国大学総長をつとめている。

学位記「博士号」
［個人蔵］

■明治十三年（一八八〇）帰国した直吉は東京大学理学部講師となり、翌年には、教授となった。その後、第三高等中学校（現・京都大学）教諭兼教頭を経て、二十三年、帝国大学に農科大学ができると、教授兼（初代）学長となった。この間、明治二十一年には、日本初の博士号授与者として理学博士となった。そして、三十八年十二月二日には農科大学長兼東京帝国大学総長となった。

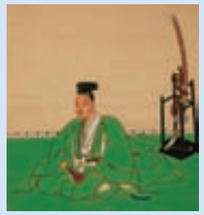
留学時代のデッサン［個人蔵］

■直吉は、若い時から美術に親しみ、大学につとめてからも美術鑑賞に強い興味を示した。そして、政府に招かれ哲学や経済学を講義していたアメリカ人フェノロサとも交友した。
明治四十年（一九〇七）、文部省は美術振興のため文部省公設美術展覧会（文展）を開くこととなり、その審査委員として任命された四十二人の内の一人となった。直吉は西洋画の部の主任審査委員として、明治の文豪森鴎外（もりおうがい）や、日本の西洋画界をリードしていた黒田清輝（せいき）・浅井忠（ちゅう）らの審査委員をまとめ、また日本画の部の審査委員も兼任した。

ハリヨ博士のコラム

博士のまち 大垣

天保11年（1840）、8代大垣藩主戸田氏庸（うじつね）が藩士の文武奨励のため、江戸の昌平坂学問所にならい藩校「学問所」を開いた。藩校は、のちに「致道館（ちどうかん）」、さらに「敬教堂（けいきょうどう）」などと改称されたが、その伝統と校風は多くの人材を育て、のちに大垣は、「博士のまち」といわれた。



8代大垣藩主戸田氏庸肖像画［大垣城蔵］

■明治21年（1888）、日本ではじめて博士号をうけた50人のうち3人が大垣（町）出身であった。当時の大垣町が、現在の中心市街地の区域だけであったことを考えると、一層驚かされる。

明治21年（1888）5月7日に誕生した最初の博士は、次の25人である。

法学博士…箕作麟祥・田尻稲次郎・菊地武夫・穂積陳重・鳩山和夫

医学博士…池田謙斎・橋本綱常・三宅秀・高木兼寛・大澤謙二

工学博士…松本荘一郎（P.18）・古市公威・原口要・長谷川芳之助・志田林三郎

文学博士…小中村清矩・重野安繹・加藤弘之・島田重禮・外山正一

理学博士…伊藤圭助・長井長義・矢田部良吉・山川健次郎・菊池大麓

翌月7日にも次の25人に博士学位が与えられ、わずかひと月の間に50人の博士が生まれた。

法学博士…井上正一・木下廣次・熊野敏三・岡村輝彦・富井政章

医学博士…田口和美・佐藤進・緒方正規・佐々木政吉・小金井良精

工学博士…高松豊吉・谷口直貞・平井晴二郎・辰野金吾・巌谷立太郎

文学博士…黒川真頼・川田剛・中村正直・南条文雄（P.56）・末松謙澄

理学博士…寺尾寿・小藤文次郎・松井直吉（P.60）・箕作佳吉・桜井錠二

□枠＝大垣出身者

■明治26年（1893）、帝国大学卒業生158人中、大垣町出身者は6人を数えた。政治学科 桑原八司（新馬場町）、土木工学科 那波光雄P.32（袋町）・杉野茂吉（歩行町）・中西錬次郎（外側町）、造船工学科 小島門彌（室村）、地質学科 脇水鉄五郎P.74（西外側町）。那波光雄は後に「大垣は旧藩時代から教学に力を入れ、維新後も大垣出身の先輩は常に後進の指導・援助に努力し、わたしたち後進もまた、その感化を受け向学の志に燃えて、意気さかんなものがあった。」と述べている。

大垣出身の主な博士

学位	博士号取得年	氏名	生年
工学博士	明治21年	松本　荘一郎（P.18）	嘉永元年
	明治32年	野村　龍太郎（P.26）	安政6年
	明治37年	那波　光雄（P.32）	明治2年
	大正8年	矢橋　賢吉	明治2年
	大正8年	高橋　辰二郎	明治元年
	大正13年	松井　元太郎	明治15年
理学博士	明治21年	松井　直吉（P.60）	安政4年
	明治24年	関谷　清景（P.80）	安政元年
	大正6年	脇水　鉄五郎（P.74）	慶応3年
	大正10年	関根　秀三郎	明治19年
	昭和6年	阿藤　質	明治18年
医学博士	明治24年	佐藤　三吉（P.64）	安政4年
	大正3年	望月　代次	明治14年
	大正10年	真島　卯吉	明治6年
	大正10年	早野　龍三	明治14年
	昭和17年	吉益　修夫	明治32年
文学博士	明治21年	南条　文雄（P.56）	嘉永2年
	大正9年	和田　万吉（P.66）	慶応元年
	昭和3年	川合　貞一	明治3年
法学博士	明治43年	松本　烝治	明治10年
	明治34年	岡田　朝太郎	慶応元年
薬学博士	大正2年	平山　松治	慶応2年
林学博士	明治33年	小出　房吉	安政4年
	大正8年	宮井　健吉	明治15年
獣医学博士	明治28年	小倉　鉀太郎	慶応元年
	大正2年	可児　岩吉	明治4年

松井直吉関係年譜

年	年齢	
安政4年	1	1857　大垣藩士和田為助の二男として東長町に生まれる
元治元年	8	1864　大垣藩校に入学する
明治4年	15	1871　大垣藩貢進生として大学南校に入学する
明治5年	16	1872　旧大垣藩士松井喜太郎の婿養子となる
明治8年	19	1875　文部省第1期海外留学生としてコロンビア大学（アメリカ）に留学する
明治11年	22	1878　バチェラー・オブ・フィロソフィー（コロンビア大学）の学位をうける
明治13年	24	1880　ドクター・オブ・フィロソフィー（コロンビア大学）の学位をうける
		帰国して東京大学理学部講師となる
明治14年	25	1881　東京大学理学部教授となる
明治19年	30	1886　帝国大学工科大学教授となる
明治20年	31	1887　第三高等中学校教諭兼教頭となる
明治21年	32	1888　理学博士となる
明治23年	34	1890　帝国大学農科大学教授兼（初代）学長となる
明治30年	41	1897　文部省実業教育局長となる
明治31年	42	1898　文部省高等学務局長となる
明治35年	46	1902　文部省専門学務局長となる
明治38年	49	1905　農科大学長兼東京帝国大学総長となる
明治40年	51	1907　文展審査員となる
明治44年	55	1911　永眠

初期文展審査員［個人蔵］
明治40年（1907）、前列右から森鴎外、直吉。

ハリヨ博士のコラム

フェノロサ（1853−1908）は日本の伝統的美術に興味を持ち、伝統的日本画の復興を提唱した。そして新日本画運動を起こし、東京美術学校（現・東京芸術大学）の開設に努力し、日本の近代美術に大きな影響を与えている。直吉が第三高等中学校（現・京都大学）教諭兼教頭であったとき、奈良に古美術の調査にきたフェノロサを案内したと伝えられている。

直吉の名刺［岐阜県歴史資料館蔵］
裏面には、直吉とともに文展審査委員をつとめた洋画家浅井忠による直吉の似顔絵が描かれている。

直吉の胸像［東京大学農学部蔵］

■大正三年（一九一四）、新海竹太郎作。直吉を追慕するため仲間らによって建立された。現在は、学生食堂もあり賑わいのある東京大学農学部三号館の一階正面で学生たちを見守っている。

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

近代外科医学の最高峰に立った医学博士

佐藤三吉

安政4年～昭和18年
（1857～1943）

大垣藩士佐藤只五郎の三男として生まれる。東京大学医科大学（現・東京大学医学部）を卒業後、ドイツ人のスクリバ教授の助手となり外科の道へ進んだ。その後、ベルリン大学（ドイツ）に学び、帝国大学教授、同大学医科大学付属医院（現・東京大学医学部附属病院）長、同大学医科大学（現・東京大学医学部）学長を歴任した。外科手術に無菌法や止血法など画期的な手法を取り入れ、今日の基本術式となるいくつもの工夫を考案した。また、日本外科学会の初代会長となるなど近代外科医学の発展に貢献した。昭和八年（一九三三）、大垣市立診療所（現・大垣市民病院）の開所にあたっては、門下生を所長として派遣した。

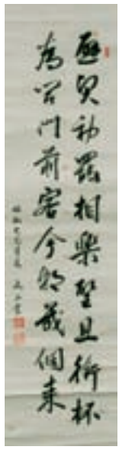
臨床講義中の三吉
『東京大学医学部外科学第二講座百年のあゆみ』から転載
大正元年（1912）、佐藤外科大手術室にて

親友青山胤道と三吉［個人蔵］
前列左端が三吉、右端が青山胤道

■三吉と美濃苗木藩（現・中津川市）出身の青山胤道とは、東京大学医科大学の同級生であった。明治十六年（一八八三）、政府派遣の留学生として選ばれた二人は、ともにベルリン大学（ドイツ）に学び、帰国後わずか一年で教授に就任した。三吉三十一歳、青山二十九歳という若さだった。明治二十四年には、ともに医学博士号を授与され、のちには、「外科の佐藤、内科の青山」と称えられた。

自宅にて［個人蔵］

■三吉の妻は体調を崩し、実家で養生するため別居した。また長男も幼くして脳疾患に侵され、目が不自由となり昭和十四年（一九三九）には、脳溢血で突然亡くなってしまった。しかし、三吉は、この間、愚痴ひとつ言わず、長男を生きがいとして最善を尽くし、娘貞子の母親がわりもつとめた。温厚で、自分には厳しく、私利私欲のために動くことが全くない人格者であった。誰に対しても相手の身になって尽くし、臨終の患者の願をきいて、その子どもに学資を送り続けたという話も残っている。



佐藤三吉筆五言絶句『罷相作』
［縁覚寺蔵］

印
避賢初罷相　楽聖且銜杯
為問門前客　今朝幾個来
昭和己巳（昭和四年）盛夏
文山書　印　印

■昭和四年（一九二九）夏の書。唐の詩人李適之作五言絶句「罷相作（相を罷めしとき作る）」三吉は書道に親しみ、文山と号して多くの書を残した。

愛用品［東京大学医学図書館蔵］
ペーパーナイフ、文鎮、墨挟み、葉巻置き台、筆、水差、硯、メガネ、懐中時計、右下は聴診器（部分）。

三吉の胸像［東京大学医学部付属病院蔵］

■大正十三年（一九二四）、水谷鉄也作。佐藤外科の門下生によって建立された。現在は、東京大学医学部付属病院管理研究棟の通称「バス通り」に面する庭に親友青山胤道の胸像と並んで置かれている。台座には、学生たちに取り囲まれて臨床講義する三吉のレリーフがある。門下生たちは、三吉から学問・技術とともに、その徳の高さを学び、心から三吉を尊敬していた。三吉の胸像は、ＪＲ東京総合病院と縁覚寺にも残されている。

佐藤三吉先生顕彰碑除幕式［個人蔵］
昭和44年（1969）、門下生らによって大垣城西の常葉神社境内に建てられた。後に大垣市医師会館（新田町）に移設され現在に至っている。

佐藤三吉関係年譜

		年齢
安政4年	1857	大垣藩士佐藤只五郎の三男として新地町に生まれる	1
明治3年	1870	小原鉄心付きの給仕となる	14
明治4年	1871	上京し、司馬凌海の塾でドイツ語を学ぶ	15
明治5年	1872	南校（現・東京大学）に入学する	16
明治6年	1873	医学を志し、第一大学区医学校（現・東京大学医学部）へ転校する	17
明治15年	1882	東京大学医科大学（現・東京大学医学部）を卒業する	26
明治16年	1883	スクリバ教授の助手となる 政府派遣の留学生として、ベルリン大学（ドイツ）に留学する	27
明治20年	1887	帰国し、帝国大学（現・東京大学）教授となる	31
明治22年	1889	岐阜県知事小崎利準の娘滋子と結婚する	33
明治24年	1891	医学博士となる 帝国大学医科大学付属医院第二医院の外科主任となる	35
明治32年	1899	日本外科学会を創立し初代会長となる	43
明治34年	1901	東京帝国大学医科大学付属医院（現・東京大学医学部附属病院）長となる	45
明治45年 大正元年	1912	宮内省御用掛となり、明治天皇の侍医となる	56
大正3年	1914	日本鉄道医協会（現・日本交通医学会）を設立し初代会頭となる	58
大正7年	1918	東京帝国大学医科大学（現・東京大学医学部）学長となる	62
昭和18年	1943	永眠	87

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

近代図書館学を確立した文学博士

和田万吉（わだまんきち）

慶応元年～昭和9年
（1865～1934）

大垣藩士和田為助の三男として東長町に生まれる。帝国大学文科大学を卒業後、帝国大学附属図書館に勤務し、約三十年間にわたり館長をつとめた。この間、図書館経営に関する研究・建議をおこなうとともに、日本文庫協会（現・日本図書館協会）、文部省図書館員教習所の創設ならびに「図書館雑誌」を創刊するなど全国の図書館の発展に貢献した。また、東京帝国大学文科大学教授を兼任し、わが国最初の図書館学講座を担当するなど図書館学の研究・教育の発展につくした。松井直吉（P.60）は実兄。

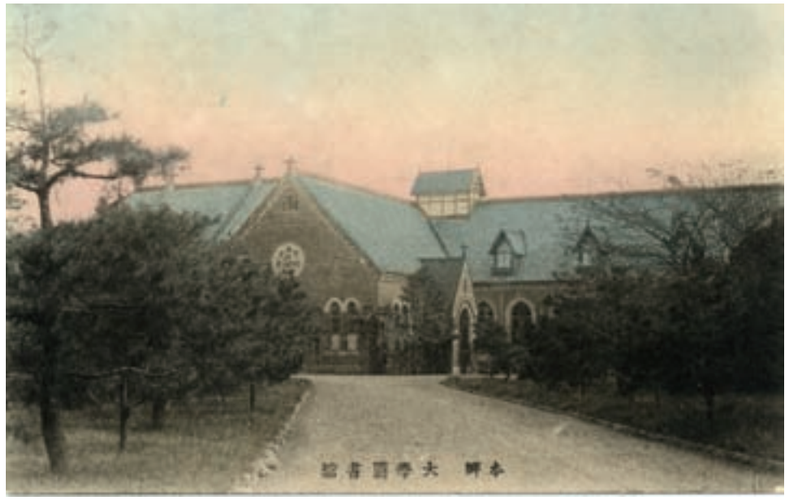
二都初遊日記［個人蔵］

■文科大学で、物集高見（もずめたかみ）や小中村清矩（こなかむらきよのり）らの指導のもと国文学を学んでいた明治二十二年（一八八九）八月、学友の岡倉由三郎（岡倉天心の弟でのちの英語学者）とともに奈良・京都を旅した。十六日間の旅行中、精力的に寺社仏閣をめぐり大文字の送り火も見物している。行く先の寺院などでは、岡倉天心の紹介もあって、書生の身分にもかかわらず、手厚い待遇を受けた。また、京都では当時、第三高等中学校（現・京都大学）教諭兼教頭として赴任していた兄松井直吉（P.60）宅にも寄っている。往路は船であったが、復路は汽車を利用し大垣も通過している。旅行時に使った名刺では、一時、戸田家の養子となっていたのか、「戸田万吉」と名のっている。

旅行中に使った名刺
［個人蔵］

■「道志亭日記（どうしてい）」と題された帝国大学の学生から同大学図書館へ勤務し始める頃の日記には、岡倉由三郎（英語学者）・白鳥庫吉（くらきち）（東洋史学者）・三好学（植物学者）らとの交友、自著「普通論理学」の出版、兄の松井直吉（P.60）が、帝国大学農科大学長となって京都から赴任することへの喜びなどが記されている。

道志亭日記［個人蔵］



東京帝国大学附属図書館［個人蔵］
明治25年（1892）建築。レンガ造りで、白い石材による尖塔アーチが、入口・窓に配された中期ゴシック様式に基づく建物。屋根は木造瓦葺。

■明治二十三年（一八九〇）、兄直吉（なおきち）の友人和田垣謙三（わだがきけんぞう）の世話で大学図書館に奉職した万吉は、田中稲城（いなぎ）に初めて図書館のことを学び、それ以来、生涯を図書館の発展に捧げることとなった。二十五年、大学に独立した図書館を完成させた万吉は、翌年、帝国大学図書館管理心得（事実上の館長）となった。二十九年には、文科大学助教授となり併せて大学図書館管理を命じられ、同年六月「帝国大学図書館の規模拡張に関する建議」を提出。この建議により発足した「東京帝国大学図書館商議会」は、現在も「図書行政商議会」として受け継がれ、重要事項が審議されている。明治三十年、館長制がスタートすると初代館長となり、大学図書館の経営に手腕を発揮し、図書館が大学の中枢機関となる基礎を築いた。

欧米各国の図書館を視察
［個人蔵］
明治42年（1909）9月23日、ロンドンにて撮影。右が万吉、左は早稲田大学から派遣され、欧米を視察していた佐藤功一。佐藤は、早稲田大学に建築科を創設したことで知られる建築家。同大学のシンボルとなっている大隈講堂などを残した。

■明治四十二年（一九〇九）、万吉は、欧米各国の図書館視察の旅に出た。アメリカからヨーロッパ諸国（イギリス・ドイツ・オーストリア・フランス・イタリア・オランダ・ベルギー・スイスなど）を回り各地の図書館を精力的に視察し、わが国の図書館の行くべき方向を考えた。

欧米視察の際に家族に宛てた葉書［個人蔵］
イギリス（ロンドン）、フランス（パリ）からのもの。フランスからの葉書にはパリ滞在中の洋画家和田三造（わださんぞう）による万吉の似顔絵が描かれている。

東京帝国大学図書館長室にて［個人蔵］
明治44年（1911）5月13日撮影。

■万吉は、大学の図書館のみならず、日本の図書館界全体の発展を図るため明治二十五年（一八九二）三月、日本文庫協会（現・日本図書館協会）の創立に参画した。明治三十七年、同協会の会長となった万吉は、『図書館雑誌』の発行を提唱し、徳川頼倫（よりみち）侯爵の支援を受けて、明治四十年にその創刊を果たした。『図書館雑誌』は、現在も日本図書館協会の機関誌として発行されている。

図書館雑誌［個人蔵］

名刺と封筒［個人蔵］

和田万吉（率莽）筆
七言二句
［個人蔵］

印
聖澤雲天
何以服臣心
鋏石未全衰
甲戌（昭和九年）初夏　率莽　印　印

文部省図書館員教習所卒業式［個人蔵］
前列中央が万吉

■万吉は、大正七年（一九一八）文科大学教授を兼任し、学生に図書館学の講義の始まりといわれている。翌年、文部省の図書館員養成の計画立案に参加し、大正十年文部省図書館員教習所を設立し、講師として図書館史、洋書目録法等の講義を行い後進の育成につとめた。講義の合間には図書館員としての資質や心得を熱心に語ったという。

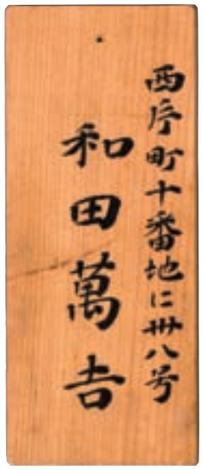
■大正十二年（一九二三）九月一日、関東大震災が起こり、図書館の建物・蔵書を焼失した。このことは、館長であった万吉にとって終生心の痛手となった。万吉は、直ちに、図書館の復興に尽くし、大学内外、政府、諸外国に支援を求め、再建の道筋を立て、同年十一月二十九日に退官した。新しい建物は、昭和三年（一九二八）に完成し、現在に至っている。万吉は、退官後も、東京商科大学予科、国学院大学、法政大学、東洋大学の各講師、聖心女学院高等専門学校教授をつとめ、図書館学、国文学などを講義した。

自筆論文
「読書と図書館」
［個人蔵］

家族に宛てた葉書［個人蔵］

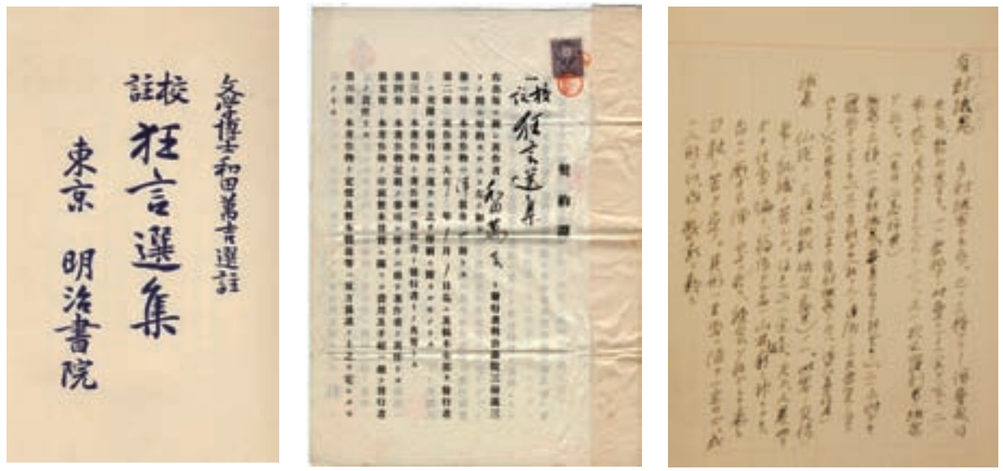
■万吉はのちに友人から「煙霞の癖（へき）あり」といわれたように、旅行が好きで、日本中を歩き、とりわけ関西にはよく出かけ、文人墨客、高僧との交歓を楽しみ、旅先から家族に手紙を寄せたという。「車窓の景色日本一は、脇水鉄五郎博士（P.74）の説でも越美南線（えつみなんせん）［美濃太田（美濃加茂市）―北濃（郡上市）］である。」とも話した。葉書には戯画や風刺漫画を好んで描き、「卍子」、「曼子」、「大笑子」などと号した。

自宅玄関前での家族写真［個人蔵］
後列で立っているのが万吉



自筆表札［個人蔵］

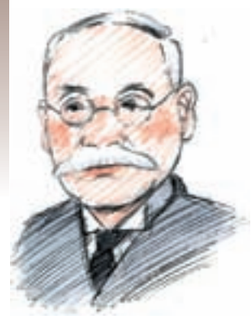
■万吉が長年暮らした東京市本郷区駒込西片町（こまごめにしかたまち）（現・文京区西片（にしかた））は、明治以降、東京大学が近い関係で関谷清景（P.80）、夏目漱石など多くの学者、文人が居住し学者町といわれた。万吉は、十六歳年下の妻との間に八人の子供をもうけた。



著書「校註　狂言選集」の稿本資料（昭和5年（1930）頃）と執筆契約書および著書［個人蔵］

著書［個人蔵］
万吉の著書は、図書館学、書誌学、国語・国文学から能・謡曲など広範囲におよぶ。

和田万吉関係年譜



年	齢	
慶応元年	1	1865　大垣藩士和田為助の三男として東長町に生まれる
明治14年	17	1881　東京大学予備門に入学する
明治20年	23	1887　チャールズ・ラムの戯曲（訳本）「みなれざを」を出版する
明治22年	25	1889　学友岡倉由三郎（岡倉天心の弟）と奈良・京都を旅行する
明治23年	26	1890　帝国大学文科大学国文科を卒業する 帝国大学文科大学附属図書館につとめる
明治25年	28	1892　帝国大学に独立した図書館を建設する 日本文庫協会（現・日本図書館協会）を設立する
明治26年	29	1893　帝国大学図書館管理心得（事実上の館長）となる
明治29年	32	1896　「帝国大学図書館の規模拡張に関する建議」を提出する 帝国大学文科大学助教授兼帝国大学附属図書館管理となる
明治30年	33	1897　東京帝国大学附属図書館長となる
明治36年	39	1903　第1回図書館事項講習会で、目録編纂法を講義する
明治37年	40	1904　日本文庫協会（現・日本図書館協会）会長となる
明治40年	43	1907　「図書館雑誌」を創刊する
明治42年	45	1909　欧米各国の図書館を視察する
大正7年	54	1918　東京帝国大学文科大学教授（兼任）となり図書館学講座をはじめる
大正8年	55	1919　文学博士となる
大正10年	57	1921　文部省図書館員教習所を開設し講師となる
大正12年	59	1923　日本図書館協会顧問となる
昭和9年	70	1934　永眠

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

地質学を大衆化した理学博士

脇水鉄五郎（わきみず てつごろう）

慶応3年～昭和17年
（1867～1942）

大垣藩士脇水貫一の長男として生まれる。帝国大学理科大学地質学科を卒業し、帝国大学農科大学の地質学・土壌学の講師を経て教授となった。欧州留学の後、森林立地・地質学の第一人者として活躍。地質学に関するわかりやすい著作を数多く出版した。当時、無尽蔵といわれていた大垣の地下水についても将来への警鐘を発している。晩年は、名勝および天然記念物の調査のため、全国各地を奔走した。佐渡「尖閣湾」や岩手「龍泉洞」など景勝地の命名や北海道二股温泉等の効能を広く紹介した。「根尾の菊花石」の特別天然記念物指定も鉄五郎の推挙によるものである。

興文学校卒業証書［個人蔵］明治14年（1881）1月29日

第一高等中学校卒業記念［個人蔵］
明治23年（1890）7月撮影。3列目右から4人目が鉄五郎。
最前列右から4人目は那波光雄（P.32）。

帝国大学地質学教室にて
［個人蔵］

自筆ノート［個人蔵］
上京後の数学、英語、地質学についてのノート

■鉄五郎の実弟岩越彦次郎（雪峯）は、大垣に住み、大日本書道作振会・泰東書道院の審査員をつとめた。兄の鉄五郎も書道に親しみ、「寿山」と号して多くの書を残した。鉄五郎の書はさすが雪峯の兄といわれるほどすぐれていた。

実弟と鉄五郎一家［個人蔵］
明治34年（1901）9月4日大垣にて撮影。
後列右が鉄五郎、左は弟の岩越彦次郎（雪峯）。

脇水鉄五郎筆
五言一句
［個人蔵］

※「理学博士脇水鉄五郎」という落款も使用している。

印　翰墨伴清閑
寿山　鐵書　印　印

帝国大学農科大学卒業記念写真
［『講農會廿五週年紀念號』から転載］
明治37年（1904）度の卒業記念写真。前列右から2人目が助教授の鉄五郎。前列左から2人目が農科大学長の松井直吉。（P.60）

ハリヨ博士のコラム

鉄五郎は、ベルリン（ドイツ）で学んでいた時、同じくベルリンに留学していた小倉末子（P.10）と出会ったという。2人は食卓をともにしながら、郷里の話に花を咲かせたということである。

■明治四十五年（一九一二）七月、海外留学を命じられ、ドイツ・オーストリア・ハンガリーで研究した。帰国すると農科大学に復職したが、その頃農科大学にはまだ農業の主要学科でさえ講座がなく、地質学や土壌学の講座の設置は遅れたため、鉄五郎は二十年以上も助教授をつとめた。友人たちは、そのことをさかんに同情したが、当の鉄五郎はまったく取り合わず、黙々と学問研究にいそしんだ。その後、大正六年（一九一七）に農科大学教授となり、同八年には理学博士の学位を受けた。

鉄五郎の著書
［個人蔵］

■鉄五郎は、一般向けの書籍として、「日本風景誌」「日本風景の研究」「車窓から観た自然界（山陽道）」「車窓から観た自然界（東海道）」などを出版した。鉄五郎の文章は論理が一貫しているだけでなく、表現がとてもわかりやすく、地質学の関係者のみならず、一般大衆に人気があった。

鉄五郎の油彩画「伊吹山」［個人蔵］

■昭和三年（一九二八）、大垣市教育会主催の講演会で鉄五郎は「大垣市の地下水問題」と題して講演した。まず、大垣の自噴の井戸水が飲料水としてすべての美点を備えており、広い世界の中で誇りにできるものであることを述べた。そして、大垣の地下水の本源を、地上を流れている河川の水が地中にしみこんだものと、西濃の平野を囲んでいる山地に降った雨や雪がそのまま地中にしみて地下水となったものとが、地層の間をもぐって大垣付近に噴き出していると説明した。そして最後に、大垣の自噴水を守るためには、第一に市民が井戸を掘る数を制限しなければならないこと、第二に工場などが使う地下水の量を制限しなければならないことを訴えた。さらに西濃の深井戸を守るためには、ただ大垣だけが心配していただけでは効果はなく、西濃全体が共存共栄の主義で守っていくことが大切であるとした。

脇水鉄五郎関係年譜

		年齢
慶応3年	1867	大垣藩士脇水貫一の長男として西外側町に生まれる	1
明治8年	1875	興文義校第一校に入学する	9
明治14年	1881	興文学校を卒業する	15
明治17年	1884	岐阜県華陽学校大垣分校初等科を卒業する 東京英語学校に入学する	18
明治23年	1890	第一高等中学校を卒業する	24
明治26年	1893	帝国大学理科大学地質学科を卒業する 帝国大学農科大学の地質学・土壌学の講師となる	27
明治35年	1902	「地質学雑誌」に「美濃国赤坂金生山の石灰岩層」を寄稿する	36
明治42年	1909	国会議事堂の建築用石材調査を担当する	43
明治45年 大正元年	1912	地質学研究のため欧州（ドイツ・オーストリア・イタリア・ハンガリー）に留学する	46
大正6年	1917	東京帝国大学農科大学教授となる	51
大正8年	1919	理学博士となる	53
昭和3年	1928	「大垣市の地下水問題」を発表し、自噴水の保全を論じる	62
昭和4年	1929	文部省から名勝および天然記念物調査を嘱託される	63
昭和6年	1931	内閣から国立公園委員会委員を嘱託される	65
昭和7年	1932	天然資源に関する調査をおこない、全国各地の調査を始める	66
昭和15年	1940	文部省から天然資源研究に関する調査を嘱託される	74
昭和16年	1941	文部省から資源科学研究所創立委員を嘱託される	75
昭和17年	1942	永眠	76

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

社会教育育ての親

関屋龍吉（せきや りゅうきち）

明治19年～昭和51年
（1886～1976）

大垣藩校で教官をつとめた一柳元吉（ひとつやなぎげんきち）の二男として生まれる。東京帝国大学法科大学を卒業し文部省に入省後、異例の昇進で文部省督学官兼参事官となり、当時立ち遅れていた社会教育の振興を図った。欧米の青少年教育の実情を視察した後、三十八歳の若さで文部省普通学務局長となる。青年教育およびその指導者の育成と結集を目的に、日本青年協会を設立し、「真ん中を歩こう」「土台石になろう」をスローガンに掲げ、青年教育を全国的規模で展開した。文部省社会教育局長、国民精神文化研究所（現・国立教育政策研究所）所長を歴任し、「社会教育育ての親」と称された。

大垣中学一年の龍吉［個人蔵］
明治31年（1898）撮影。

帝大三年の龍吉
［個人蔵］
明治42年（1909）撮影。

■龍吉は、父の弟子で日本鉄道の要職にあった吉川義幹の養子となる予定であったが、明治三十年（一八九七）、義幹が突然亡くなったため、その妻与喜子の実家関屋家の養子となった。そして、大垣中学一年の課程を終えて翌三十二年春上京し、東京府中学（翌年東京府立第一中学校に改称）に入学した。その後、東京帝国大学法科大学政治学科に進学、夏目金之助（のちの漱石）や松本烝治（松本荘一郎P.18の長男）などの講義を受けた。また、弓術部に属し、後に財団法人生弓会の理事長をつとめた。

■明治四十四年（一九一一）、大学を卒業し、教育行政の道に進むため文部省に入ろうと決めていた龍吉は、高等文官試験にも合格。翌年三月、文部省試補として採用され、役人生活をスタートさせた。大正三年（一九一四）、文部省督学官兼参事官に任命され、翌年には、専門学務局実業教育課長となった。この頃、龍吉は、東京高等工業附属補習学校に「国民の心得」という名前の学科を設け、自ら週一回講義を行い、『国民の心得』を出版した。これが日本初の公民科設置と公民科教科書といわれている。大正十一年四月には、欧米へ教育制度と青少年教育の視察に出張し、同十三年、三十八歳で文部省普通学務局長となった。高級官僚としては最も若い局長で、異例の昇進だった。この役職が、社会教育との生涯にわたる関係との始まりであった。

ベルリン（ドイツ）にて［個人蔵］
大正12年（1923）撮影。

文部省普通学務局長の龍吉［個人蔵］
大正14年（1925）撮影。

日本青年協会本部会館
［財団法人日本青年協会蔵］

■昭和三年（一九二八）地域の中堅青年育成の組織作りを各方面に働きかけ、財団法人日本青年協会を創設した。翌年には、全国各地で推薦された二十六人の青年を東京麻布の本部会館に集め、龍吉も寝食をともにし、身をもって指導した。後には、各地に道場も設けた。「真ん中を歩け」「土台石になろう」をモットーに、ここで教育を受けた人は五千人におよぶという。昭和四年には、文部省社会教育局長となり、家庭教育の振興を図った。また児童の校外指導のために、帝国少年団協会を設立し、少年団活動の普及に努めた。これらの活躍から、龍吉は、「社会教育育ての親」といわれるようになった。

龍吉愛用の灰皿［個人蔵］

日本青年協会分塾の表札
［個人蔵］

関屋龍吉書
「真ん中を歩け・土台石になろう」
［財団法人日本青年協会蔵］

関屋龍吉関係年譜

		年齢
明治19年	1886	大垣藩の儒学者柳元吉の二男として生まれる	1
明治32年	1899	東京府中学校に入学する	14
明治37年	1904	第一高等学校大学予科第一部に入学する	19
明治40年	1907	東京帝国大学法科大学政治学科へ入学する	22
明治44年	1911	文官高等試験合格	26
明治45年 大正元年	1912	文部省試補となる	27
大正3年	1914	文部省督学官兼文部省参事官となる	29
大正4年	1915	専門学務局実業教育課長となり、『国民の心得』を出版する	30
大正5年	1916	文部大臣秘書官兼文部省参事官となる	31
大正9年	1920	濃飛学寮の理事となる	35
大正10年	1921	秘書課長となる	36
大正11年	1922	欧米の教育制度および青少年教育の実態を視察する	37
大正13年	1924	文部省普通学務局長となる	39
		総合雑誌「青年講座」を発刊する	
大正14年	1925	社会教育協会を発足させる	40
昭和2年	1927	アメリカ・イギリス・イタリア・ドイツを視察する	42
昭和3年	1928	日本青年協会を設立する	43
昭和4年	1929	文部省社会教育局長となる	44
昭和6年	1931	大日本連合婦人会を発足させる	46
昭和9年	1934	国民精神文化研究所（現・国立教育政策研究所）の（初代）所長となる	49
昭和19年	1944	大日本女子社会教育会を結成する	59
昭和23年	1948	ブラジルを視察する	63
昭和51年	1976	永眠	91

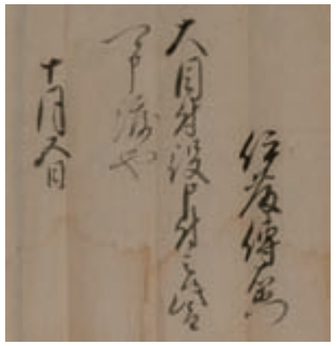
冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

鵜森伏越樋の建設に命をかけた大垣藩士

伊藤伝右衛門

寛保元年～天明5年
（1741～1785）

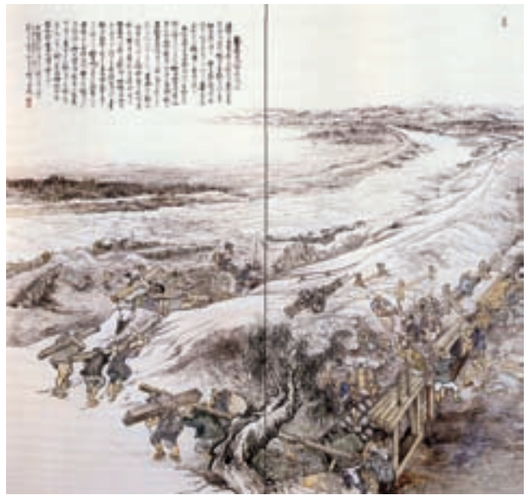
現在の安八郡輪之内町楡俣に生まれ、幼くして大垣藩士伊藤作之丞政明の養子となった。当時、大垣輪中の南部は、たび重なる水害に悩まされたため、藩主戸田氏教は郡奉行であった伝右衛門を伏越樋御用掛（工事責任者）に任じ伏越樋の築造にあたらせた。伝右衛門は、輪中内の悪水（不要な水）を放出するため、横曽根村と安八郡塩喰村（輪之内町）の鵜森を結ぶ揖斐川の川底下に木製トンネルを埋め、揖斐川の下流へ流す難工事を成し遂げた。これにより、田畑の収穫が増えることとなった。その後、伏越樋は明治末期に行われた木曽三川改修工事が完成するまで、樋管を取り替えながら引き継がれた。



大目付役拝命書［片野記念館蔵］

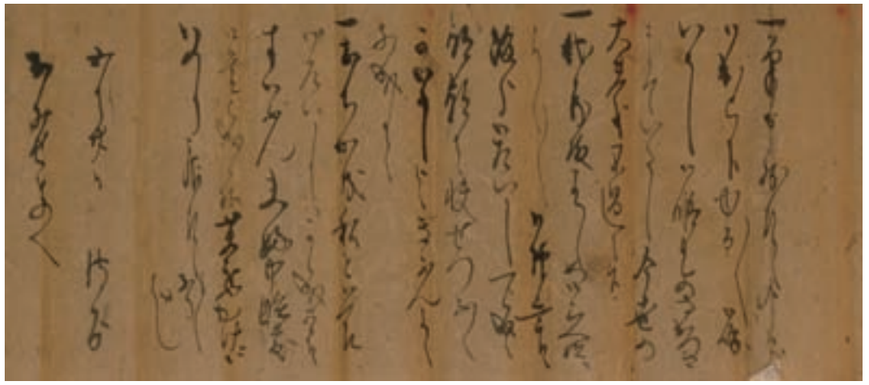
■安永二年（一七七三）十月五日、伝右衛門は大垣藩の大目付役となった。

■鵜森伏越樋の建設は、藩の財政再建という藩主の意図とも合致したため、大垣藩にとって最大の御手伝普請（幕府としての事業）となり、予定通り天明四年（一七八四）に完成した。しかし、その後川床下の樋管が揖斐川の水流によって洗い出されて吹き上がり、ほとんどその効果をなくしたため、悪水路を塩喰村南端まで延長し、根古地村対岸で放流するという改修工事をおこない翌年に完成した。



林慶司画　鵜森伏越樋普請図［大垣市輪中館蔵］

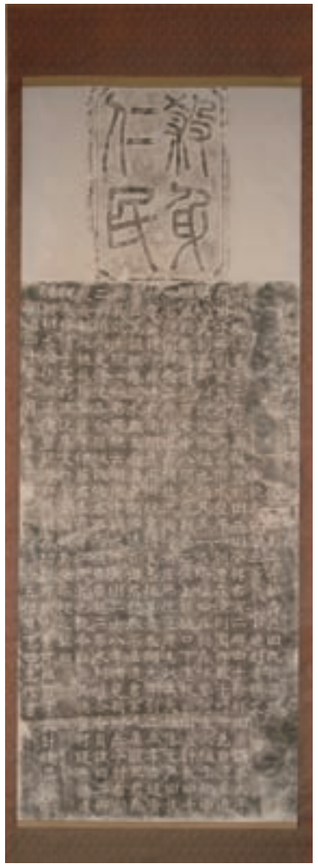
■伝右衛門は、大垣藩最大の難工事となった伏越樋の建設に一身をささげる決意でのぞみ、成功させたが、完成後の天明五年（一七八五）五月二十三日切腹自殺した。これは、前年の工事の不成功と人々の非難にあったのを機会に、責任をとる覚悟を決めたものと考えられる。伝右衛門は、家族である、おちか・おみせ・おまん宛にそれぞれ遺書を残した。



娘おみせ宛遺書［片野記念館蔵］
「明朝は快せつふく（切腹）」の文字が認められる。

伊藤伝右衛門遺績碑除幕式［片野記念館蔵］
明治41年（1908）6月1日撮影。

■後に伝右衛門の功績は改めて見直され、金森吉次郎（P.82）らによって、鵜森神社境内に顕彰碑が建立された。さらに吉次郎の尽力によって、大正六年（一九一七）十一月、従五位が追贈された。碑の篆額「殺身仁民（人々のために一身を捧げる）」は戸田氏共によるもので、岐阜県知事小崎利準が文を作成し、明治三筆の一人とされた日下部東作が書いた。同碑は、杭瀬川の改修工事により平成十五年（二〇〇三）、大垣市横曽根地内に移設された。



伊藤伝右衛門遺績碑拓本［片野記念館蔵］

伊藤伝右衛門関係年譜

		年齢
寛保元年	1741	現在の安八郡輪之内町楡俣に生まれる	1
		幼くして大垣藩士伊藤作之丞政明の養子となる	
明和4年	1767	養父の後を継ぎ、知行50石の詰番所役となる	27
安永2年	1773	大目付役となる	33
安永5年	1776	郡奉行加役となる	36
天明元年	1781	郡奉行本役となる	41
天明2年	1782	知行70石となる	42
天明3年	1783	鵜森伏越樋御用掛となる	43
天明4年	1784	伏越樋を完成させた功績により、幕府より綿入一重を賜わる	44
天明5年	1785	伏越樋の工事を改修し完成させる	45
		切腹自殺する	

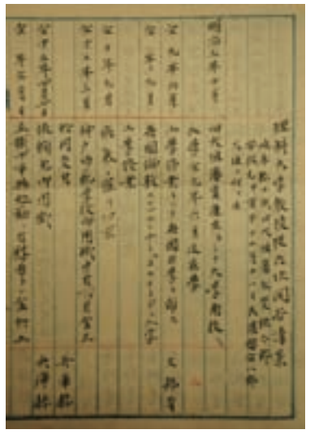
冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

世界初の地震学教授となった理学博士

関谷清景（せきやきよかげ）

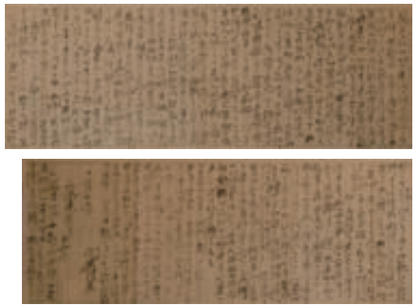
安政元年～明治29年
（1854～1896）

大垣藩士関谷玄助の長男として歩行町（おかちまち）に生まれる。大垣藩貢進生（こうしんせい）として、大学南校（現・東京大学）に学び、機械工学研究のためイギリスへも留学した。明治十三年（一八八〇）、東京大学地震観測所助手となり、外国人科学者ミルン、ユーイングを中心に始まった日本の地震研究を受けつぎ、わが国における地震学の基礎を築いた。この間、火山の破裂や地震が発生するたびに、病を押して現地へ赴き研究を深めるとともに、論文を発表し、人心の動揺をおさえるようつとめた。また、全国に地震観測網を作り、地震の予防と予知の調査研究を深めるため震災予防調査会を発足させた。明治十九年には、世界初の地震学を専門とする教授となった。



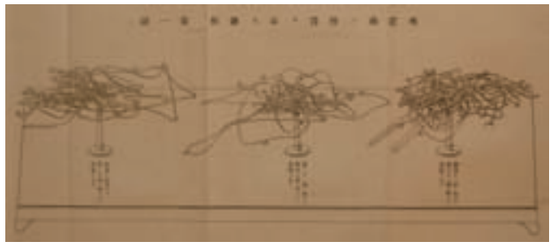
清景の履歴書［東京大学地震研究所蔵］

■清景は、大垣藩校敬教堂で野村藤陰に漢学を学ぶ一方で、江馬活堂（四代春齢）、五代春齢から蘭学を学んだ。明治三年（一八七〇）十月、貢進生制度により大垣藩からは清景と松井直吉（P.60）が選ばれ、大学南校（現・東京大学）に入学した。その後、文部省第二期海外留学生として、ロンドン・ユニバーシティカレッジで機械工学を学んだ。



清景書状江馬活堂宛［個人蔵］

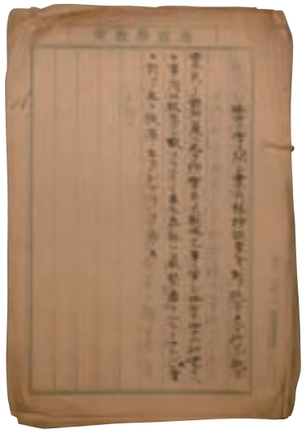
■留学先のロンドンに到着して四か月後、故郷の師 江馬活堂に送った手紙。明治九年（一八七六）十二月二十五日付。現地でも友人ができ、会話にも不自由していないと記している。



地震動の性質を示す雛型の説明（図）［東京大学地震研究所蔵］

「地震動の性質を示す雛型の説明」の草稿［東京大学地震研究所蔵］

■明治二十一年（一八八八）一月十五日に東京帝国大学理科大学校内に設置したユーイングの地震計が描いた地動による波線を再現したもの。清景が考案した、針金細工によって地震動を示す雛型は、高い評価を受け、教材などとして大量生産され、国内外で活用された。清景は全国の地震観測業務をとりしきる役職を兼ね、地震観測網の整備を推進した。また、日本初の震度階（「微」・「弱」・「強」・「烈」の四段階）も定義している。



地震学に関し震災予防調査会に於いて従事すべき研究の概要（草稿）［東京大学地震研究所蔵］

■明治二十四年（一八九一）十月二十八日午前六時三十七分十一秒、濃尾大震災が発生した。この時、兵庫県明石で療養中のため、すぐに現地に赴けなかった清景は、翌日から「震災地方の人士に告く」などと題した論文を次々に発表、各方面に配布し、被災者の動揺の鎮静と震災対策に動いた。そして、濃尾大震災の体験によって、一層の地震学の研究の必要性を感じた清景は、同年十一月十七日「今回ノ震災ニ付取調委員設置ノ義ニ付建議」を政府に提出。これにより、翌年、震災予防調査会が発足した。清景は、設立後も意見書を提出し、地震計の改良や地震予知と震災予防の重要性を説いている。

「関谷先生誕生之地」碑除幕式［個人蔵］

■矢橋大理石株式会社を創業した矢橋亮吉は、書生として清景の家に住み込み指導を受けた。亮吉は、歩行町の清景の誕生地が他人の所有になっているのを買い取り、昭和四年（一九二九）四月、ここに「関屋先生誕生之地」と記した記念碑を建立し、付近を小公園として市に寄付した。

ハリヨ博士のコラム

岐阜県地震防災の日

濃尾大震災が発生した10月28日は「岐阜県地震防災の日」、そして、毎月28日は「岐阜県防災点検の日」とされています。いつか来る地震に備えて、備蓄品、避難経路、家族間の連絡方法など、家庭や事業所において確認しましょう。

関谷清景関係年譜

		年齢
安政元年	1854	大垣藩士関谷玄助の長男として歩行町に生まれる	1
明治3年	1870	大垣藩貢進生に選ばれ、大学南校（現・東京大学）に入学する	17
明治9年	1876	文部省第2期海外留学生として、イギリスへ留学する	23
明治10年	1877	肺結核となり帰国し、神戸（ヒョウゴ）で療養する	24
明治12年	1879	神戸師範学校事務職となる	26
		神戸師範学校副校長となる	
明治13年	1880	東京大学地震観測所助手となる	27
明治14年	1881	東京大学助教授となる	28
		日本地震学会会員となる	
明治17年	1884	地震専門誌「日本地震学会報告」を発行する	31
明治19年	1886	帝国大学地震学教授（世界初の地震学専門の教授）となる	33
明治21年	1888	磐梯山噴火の調査に赴き、「磐梯山破裂の記」を発表する	35
明治22年	1889	肺結核を再発させ療養生活に入る	36
明治24年	1891	理学博士となる	38
		濃尾大震災が起きる	
明治25年	1892	震災予防調査会を発足させる	39
明治29年	1896	永眠	43

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

治山・治水に尽くした大垣輪中の恩人

金森吉次郎

元治元年～昭和5年
（1864～1930）

上魚屋町（現・魚屋町）生まれ。幼少期から賢く、読書好きで、何事にも情熱的であった。治山・治水のため活躍していた静岡県の実業家金原明善の生き方に大きな感銘を受け、自分も社会や人々のために尽くそうと決意する。明治二十四年（一八九一）、濃尾大震災が発生すると、早期復旧を政府等に訴えるなどして被災者を救った。二十九年の大洪水時には、一刻の猶予もない中、独断で堤防の切り割りを決行し、大垣輪中八千の家屋と四万の人命を救った。さらに、「水を治むるの本は、山を治むるに在り」の思想をもって、県内山林への植林を推進し、私財を投げうって治山・治水のために生涯をささげた。

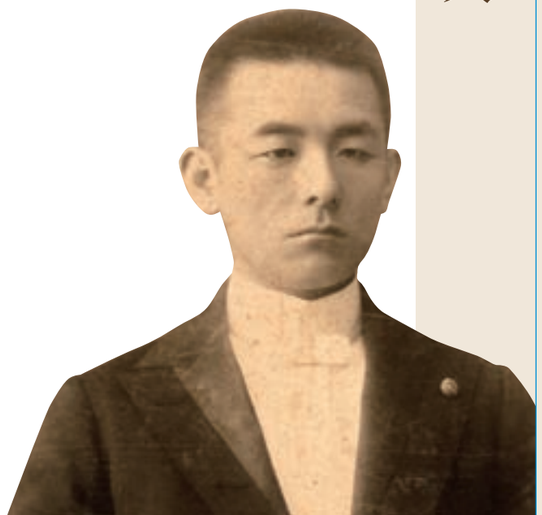
美濃路大垣宿軒別絵図面（部分）［大垣市立図書館蔵］
天保年間に作成された絵地図。生家は「納屋　金四郎」と記されている。

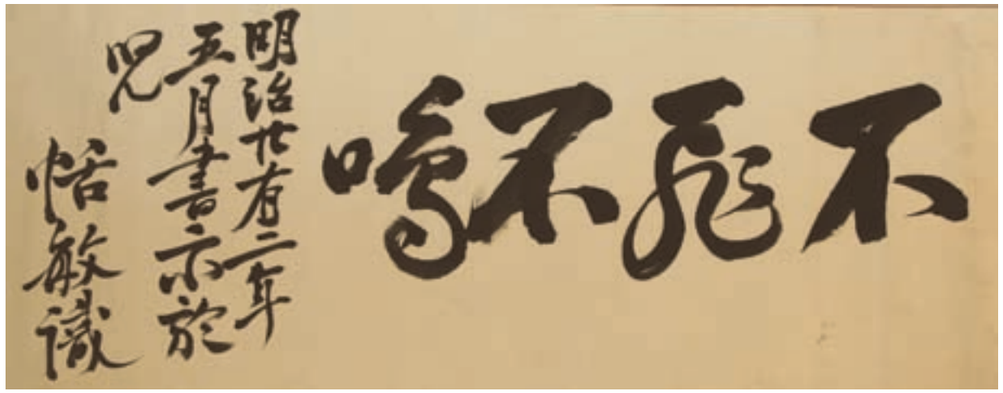
■吉次郎の父金四郎は、字を恬敏、号を澹庵と号した。鎖国体制が崩壊したのち、横浜に出て製茶貿易をはじめ、三井とならぶ業績をあげ成功をおさめた。また、蚕糸が将来有望な輸出品となることに着眼し、製糸工場を経営して巨万の富を築いた。吉次郎は、父の影響を受け、立川勇次郎（P.28）らとともに大垣英語学校を設立するなど教育に力をいれたり、京都妙心寺大法院への佐久間象山墓道標の寄進や、真照寺（綾野町）、松濤寺（中川町）、万福寺（墨俣町）などに棟瓦などの寄進をした。

ハリヨ博士のコラム

吉次郎による主な顕彰事業

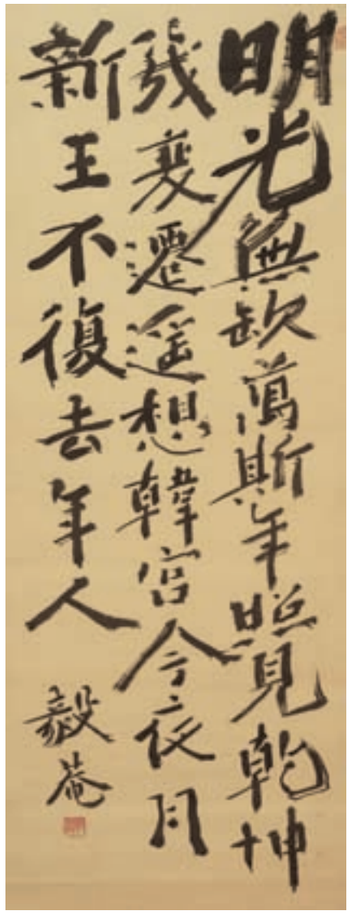
年月	顕彰内容
明治24年7月	梁川星巌翁（P.50）贈位申告祭
明治24年8月	所郁太郎経歴調査
明治32年12月	薩摩義士追弔大法会（桑名海蔵寺）
明治33年3月	飯沼慾斎（P.4）顕彰碑建設（大垣公園）
明治33年5月	宝暦治水碑建設（油島千本松原）
明治41年6月	伊藤伝右衛門（P.78）顕彰碑建設
明治42年	金原明善翁伝記出版遺勲内申弔祭
大正6年2月	伊藤伝右衛門（P.78）贈位申請
大正8年12月	薩摩義士碑建設（京都伏見大黒寺）





父金四郎の書「不飛不鳴」［個人蔵］
明治22年（1889）5月の書

「鳴かず飛ばず」
将来の活躍に備えて、機会を待つ。



金森吉次郎（毅庵）筆七言絶句［個人蔵］

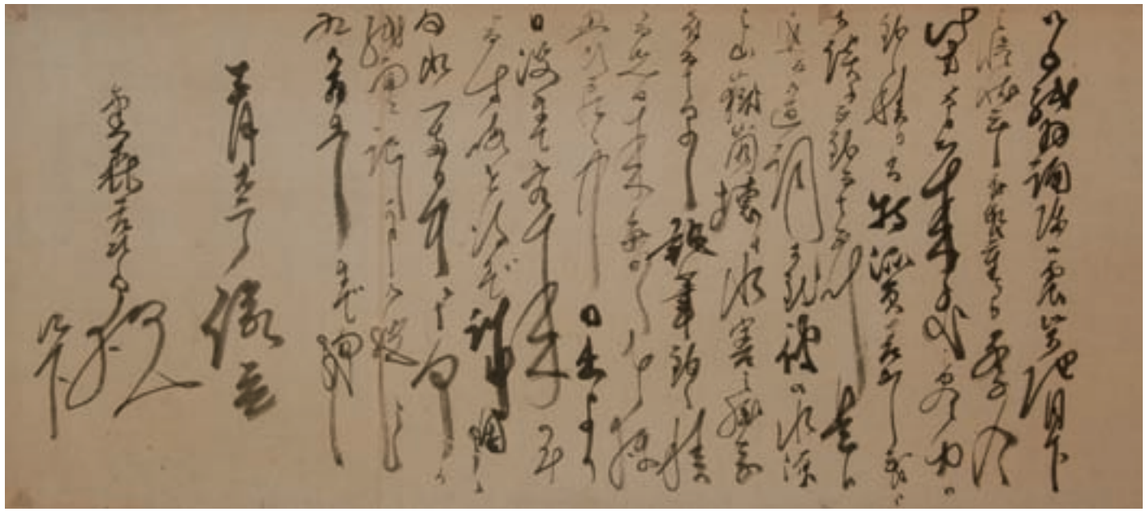
㊞ 明光無缺蕩斯年　照見乾坤
幾変遷　遥想韓宮今夜月
新王不復去年人　毅菴㊞

（大意）
明光は欠けることなく、この時代を揺り動かす。天と地が幾度か変遷していくのをかえりみる。遥かに韓国の王宮の今夜の月を想う。新しい王は二度と時代と人々から離れることはない。

■吉次郎の祖父嘉兵衛（匏庵）は商人であったが、学問を好み、多くの書物を集め、頼山陽や梁川星巌（P.50）、江馬細香（P.48）らと交際し、白鷗社という漢詩結社の同人として活躍した。吉次郎もこれを受け継ぎ、「毅庵」と号して多くの詩文を残している。

金森製糸工場［大垣市立図書館蔵］
父金四郎が創業した製糸工場は、近代的な設備を誇り、多くの女性が働いた。

■明治二十四年（一八九一）十月二十八日、美濃地方を襲った濃尾大震災による被害は、県内で死者五千人、全半壊家屋八万五千戸という惨状で、特に震源地の根尾谷に近い西濃地方の被害は大きかった。吉次郎も母を亡くしたが、「自分のことより人々のために」という考えで、直ちに、電報で政府に惨状を報告するとともに、母の鮮血がついた衣服のまま上京し、皇室に一日も早い災害復旧を訴えた。吉次郎の行動により、政府は、三百五十万円を支出して、被災者を救済するとともに、道路、堤防、山林の復旧費を出した。また、震災の直後から、「時事新報」が救援のための論陣を張っていたのをたよりに、発行していた福沢諭吉に種々の尽力を依頼した。福沢は、罹災地の救援・復興に、引き続き「時事新報」によって尽力すると返事を送った。そして、翌二十五年一月八日付「時事新報」の社説で「震災地の手当は遅々す可らず」と題した論文を発表した。



金森吉次郎宛（福沢）諭吉書状［個人蔵］

御手紙拝誦。陳ば、震災地目下
之惨状云々義幾重ニも察入候
此方ニても出来る丈之尽力ハ
致候積り、尚、特派員差出候義ハ
相談も不致ては不叶、是ハ
近日御返詞可致、彼の水源
之山嶽崩壊と水害之掛念
ニ付ては早々執筆致候積
ニて先日来毎日〳〵左様
思ひ居候中、日出より
日没まて客来のみ
ニて寸暇を得ず誠ニ困申候
何れ一両日中ニは何か
紙面ニ記し可申、御覧可被下候
右、御拝答まで　匆々頓首
十二月廿二日　諭吉
金森吉次郎様
几下

（読み下し文）
御手紙拝誦。陳ば、震災地、目下の惨状云々義、幾重にも察し入り候。此方にても出来るだけの尽力は致し候つもり、尚、特派員差し出し候義は、相談もいたさずては、かなわず。これは近日、御返詞いたすべく、かの水源の山岳崩壊と水害の掛念（懸念）に付ては、早々、執筆いたし候つもりにて、先日来、毎日毎日、左様思い居り候なか、日出より日没まで客来のみにて寸暇を得ず。誠に困り申し候。いずれ、一両日中には何か紙面に記し申すべく、ご覧くださるべく候。右、御拝答まで。匆々頓首
十二月二十二日　諭吉
金森吉次郎様
几下

■明治二十九年（一八九六）七月、降り続いた豪雨により堤防が決壊し、大垣城天守閣の石垣下部まで浸水するほどの大洪水となった。大垣輪中に流れ込んだ水を引かせるためには、堤防を切るしか方法はないと決断した吉次郎は、大垣郡役所の許可がでないまま、激しい風雨の中、村人を集め、船で横曽根権現下の堤防の乙澪（おとみお）（あらかじめ水が流れやすくしてある所）切りを決行した。この吉次郎の決断により、輪中内の濁水は一挙に揖斐川へ流れ出し、八千戸の家屋と四万人の命を救うこととなった。この決断をさせたのは、同月の初めに病没した父金四郎が、前年に村人から切り割りによい場所を聞き、手近にあった団扇にそのことを書きつけたことをもとに、「もし大洪水になって輪中内の水が引かない時は、横曽根権現下で堤防の切り割りを実行せよ」という遺言を残したことによるものであった。吉次郎は、人々がこの洪水の恐ろしさを忘れないようにと、大正十二年（一九二三）七月、大垣城の石垣に洪水点を刻み標柱を建立した。そして、さらに当時進められていた三川分流工事が一日も早く完成するよう、県会・国会などへ働きかけた。

父金四郎の遺訓が記された団扇（うちわ）
（「乙澪（おとみお）切団扇撮影帳」）
［大垣市立図書館蔵］

「権げん下にテ横曽根より、切割の事」

明治29年大洪水点の標柱［大垣城蔵］
石垣に刻まれている線が洪水点

（標柱側面碑文）
是歳夏秋兩次三大川暴漲氾濫西濃各郡浩渺如湖海在茲
天守閣浸礎石及五尺民屋漂蕩人畜慘厄田園荒廢比之所
謂慶安三寅洪水其害最甚矣恐後世礎石刻痕漫滅特表焉

（標柱裏面碑文）
大正十二年七月
金森吉次郎建之

金森家居宅の瓦［大垣市郷土館蔵］
金森家居宅の屋根瓦と伝えられている

大垣の吉次郎邸［西圓寺］
外側町にあった居宅と思われる。昭和2年（1927）、草道島町の西圓寺に移築された。

■明治三十年（一八九七）七月、吉次郎は金原明善を招き、山田省三郎ら地元有志とともに、揖斐川水源地根尾谷・揖斐谷に赴き、震災や前年の水害後の山岳崩壊の実況を視察した。そして、被災状況の説明書をつけて政府に送り、治山対策を訴えた。亀裂ができた山岳地帯は、前年の豪雨で山崩れや崖崩れが発生し、清流をほこる揖斐川の流れは濁り、川底に土砂をため、再び洪水による被災の起こる危険性をはらんでいた。こうした山々を復興させるために吉次郎は、植林の重要性を訴え、同年、森林法を成立させた。これにより、県内の公有林の総面積の約一割にあたる山々に一億八千万本の植林を実現させるとともに、以後の植林費の支出を決定させた。この時、吉次郎も揖斐川上流の村々へ三十万本の苗木を寄贈し、以後も全国各地へ寄贈し続けた。また、明治末期に分流工事が完成すると、引き続き上流改修工事のために尽力した。それまで、山岳出身の山場議員と下流部出身の水場議員とが何かにつけて対立していたが、吉次郎の「水を治むるの本は山を治むるに在り」の思想が結実し、治山・治水を一体として考えるようになった。

根尾谷を視察する吉次郎たち
「金森吉次郎翁」から転載
後列左から3人目が吉次郎、6人目が山田省三郎、前列左端が金原明善

西濃山岳震災図（美濃国根尾谷震災実況図）［個人蔵］

衆議院議員当選祝宴会（巻）
［個人蔵］
青木僊稿画。明治33年（1900）年、吉次郎の衆議員議員当選を祝して大垣の料亭「吉岡楼」で開かれた祝宴会の模様。会場に集まり、祝宴が繰り広げられ、駅で見送られるまでが描かれている。

金森吉次郎宛小室翠雲書状［個人蔵］
東京千駄ヶ谷にあった吉次郎邸の内部が描かれている。床の間を背にするのが吉次郎。その向かいに座るのが小室翠雲。吉次郎邸を訪れたことへの礼などが記されている。小室翠雲（明治7年（1874）～昭和20年（1945））は、文展審査員をつとめた日本画家。

■長年にわたって郷土大垣や岐阜県だけでなく、全国的な立場に立って、広く国家・社会の治水と山林事業に尽くした吉次郎の功績をたたえるため、大垣輪中水害予防組合が中心となって、大正十二年（一九二三）、大垣公園に彼の銅像が建てられ、八月六日除幕式が開催された。この像は、その後、昭和十九年（一九四四）、太平洋戦争中の金属回収で取り除かれたが、昭和二十九年に再建された。人々の吉次郎に対する熱い想いを示す出来事である。

金森吉次郎翁寿像除幕式［個人蔵］

金森吉次郎関係年譜

		年齢
元治元年	1864	実業家 金森金四郎の二男として上魚屋町（現・魚屋町）に生まれる	1
明治7年	1874	興文第四義校に入学する	11
明治11年	1878	金原明善小伝を読み、治山・治水を志す	15
明治18年	1885	父 金四郎、立川勇次郎（P.28）らと大垣英語学校を創立する	22
明治20年	1887	木曽三川改修工事がはじまり促進に尽くす	24
明治23年	1890	岐阜県会議員、大垣町会議員、大垣輪中水利土功会議員となる	27
明治24年	1891	金原明善を訪問し、治山・治水に対する決意を一層強くする	28
		濃尾大震災による復旧に尽力する	
明治28年	1895	大垣輪中評議員となる	32
明治29年	1896	大洪水による大垣輪中内の濁水排出のため堤防を切り割る	33
明治30年	1897	金原明善と根尾谷・揖斐谷に赴き、山地崩壊の実情を視察する	34
明治32年	1899	桑名海蔵寺にて薩摩義士の追弔会を開催する	36
明治33年	1900	衆議院議員となる	37
明治41年	1908	岐阜県山林会副会頭となる	45
大正12年	1923	治水功労者として宮中観桜会に招かれる	60
		大垣公園に銅像が建立される	
		大垣城天守閣の石垣に明治29年大洪水時の洪水点を刻む	
昭和5年	1930	永眠	67

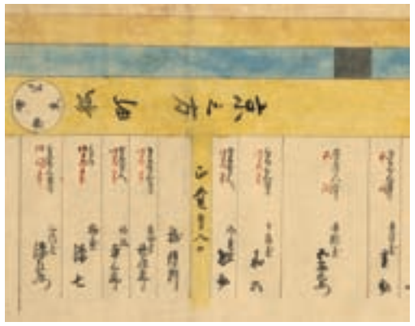
冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

世界的なスポーツ用品メーカーを創業した実業家

水野利八（みずの りはち）

明治17年～昭和45年
（1884～1970）

大工棟梁（とうりょう）水野利八の二男として西船町（現・南切石町）に生まれる。幼名は仁吉（にきち）（後に利八を襲名）。濃尾大震災により自宅が焼失、その二年後には父をも亡くし、水野家再興を誓って、大阪・京都の商家で修業した。奉公先では、商才を発揮する一方、第三高等学校（現・京都大学）野球クラブの試合に魅了される。帰省後、戦地生活を経て、大阪で弟利三（りぞう）と洋品店「水野兄弟商会」を創業。スポーツ用品の販売、オーダーメードを始め成功する。現在の高校野球や社会人野球大会の前身となる大会を主催するなど、スポーツ振興に貢献するとともに、多種にわたるスポーツ用品を提供し、世界的なメーカーに発展させた。



美濃路大垣宿軒別絵図面（部分）［大垣市立図書館蔵］
「井桁屋（いけたや）　五郎右衛門」とあるのが利八の生家

■利八（幼名は仁吉（にきち）、後に父の名利八（りはち））を襲名）が生まれた（明治十七年）五月十五日は、大垣市民が心待ちにする八幡神社の例大祭「大垣祭」の日だった。父は、その日「うちに、八幡さまが生まれてござった」と喜んだという。旧大垣藩出入りの大工で苗字帯刀（みょうじたいとう）を許された父は、「殿様ご用の棟梁（とうりょう）」と呼ばれ、大垣の町の建築を手広く引き受け繁栄していた。利八の生家の間口が十三間もあったことからもそのことがわかる。

興文高等小学校 1年時の学籍簿（部分）
［大垣市立興文小学校蔵］

■小学校時代の利八は、久瀬川を中心に、愛宕（あたご）神社や大垣城の周辺、やがては“山行き”と称して赤坂村（現・赤坂町）の金生山にまで、弁当持ちで遠征して遊んだという。興文高等小学校一年時の成績は、第一回小試験が七十八人中十三番で上位だった。明治二十四年（一八九一）、濃尾大震災により、水野家は倒壊・焼失し、利八のすぐ下の妹も犠牲となった。さらに、この震災からの復興のため、一家は仮住居のままで、大工として働き続けた父もその二年後に世を去り、きびしい生活となっていた。この時、利八は「自分の手で水野家を再興する」といい、その証（あかし）として「間口は昔と同じ（十三間）でも、高さ百尺の店をたててみせる」と誓った。そして明治二十九年四月二十八日、興文高等小学校を一年で中退し、大志実現の第一歩を大阪の地に求めた。

利八が奉公時代に作成した取引先番付表（顧客名簿）
［ミズノ株式会社蔵］
利八は、良い品物を良心的に販売することで信用を得て、次々に獲得していった顧客に独特のランクづけをして大切にした。当時の職制「吉、三、七、助」により「仁吉」は「仁七」と名乗っている。

■興文高等小学校の担任であった堤道太郎の勧めで大阪行きを決意した利八は、大阪道修町（どしょうまち）の薬種問屋「川崎屋」に奉公にでた。奉公先での生活は、入浴は週に一度、散髪は二か月に一度という小僧生活で、目があいてから夜寝るまでが勤務時間だったという。そして、番頭格で仕入れの一切を任されるほど商才を発揮するとともに、空いた時間をみつけては、経済雑誌「実業之日本」などを読み漁（あさ）り、経済学を学んだ。明治三十三年（一九〇〇）には、母の勧めで、京都の織物問屋「小堀商店」に奉公した。ここでも、一年足らずで番頭になるという異例の出世を見せた利八は、次々に顧客を広げ、企業経営の基礎を身に付けていった。そして、この京都の地で商売に夢中だった利八は、第三高等学校（現・京都大学）野球クラブの試合に魅了され、その後の生涯をスポーツにかけることになる。

日露戦争出征日記［ミズノ株式会社蔵］
明治38年（1905）7月13日の日記。出征の日、亡き父の墓へ参詣し、井筒屋（利八の実家）から停車所（大垣駅）まで見送られ、金沢に向かったことが記されている。

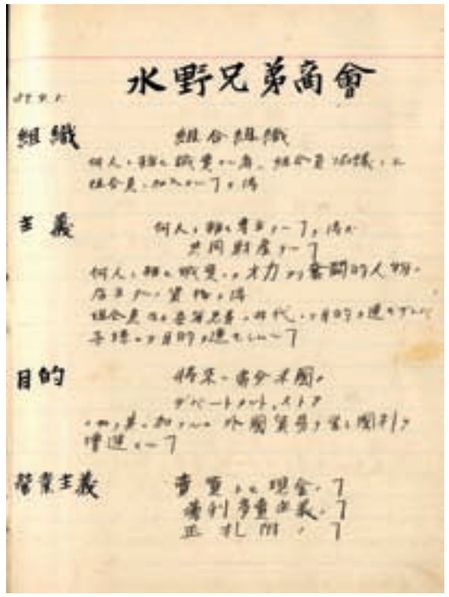
日露戦争軍隊手帳［ミズノ株式会社蔵］
利八は第九師団第二十三補助輸卒隊第二小隊第三分隊に配属された。

■明治三十七年（一九〇四）、利八は、小堀商店を辞して大垣に帰省し、日露戦争の補充兵として翌年七月、召集され戦場へ向かった。玄界灘を渡る船中では、野球談義に花が咲き、「将来、実業人の野球チームで大会を開いてみたらおもしろい」と利八が発案し、戦友同士で議論しあったという。戦地では、「昨日も山を越え、今日も山を越ゆ。実に道は困難なり」という行軍の間中、雨が降りしきり、もともと頑強でなかった利八の身体は蝕（むしば）まれ、ついに野戦病院に入院となり、十月に帰国することとなった。その後、金沢の陸軍病院で五か月の闘病生活を経て翌年三月大垣へ帰った。この療養期間中に、経済や数学、作文など広く勉強に励み、水野家再興の大望を実現するべく、退院後の方針を固めていった。

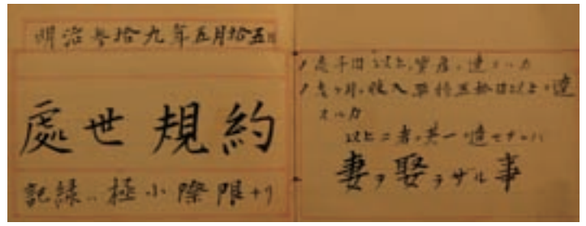
療養中（創業年）の日記
［ミズノ株式会社蔵］
陸軍病院で療養中の明治39年（1906）1月1日の日記。「勉学をなすは、将来、大実業家たらんがためなり」とある。以後、連日ハードな勉強の日々を送ったことが書き留められている。この年の4月1日、利八はついに起業することとなる。

創業時の屋号
“イズ日”

■療養生活を終えた利八は、大垣へ帰ると、すぐに大阪へ出て、大阪北区芝田町の北野中学（現・北野高校）の近くで間借りし、明治三十九年（一九〇六）四月一日、弟利三（りぞう）と洋品雑貨や野球ボールを販売する「水野兄弟商会」を創業した。創業資金（資本金）は百五十円。当初は「本日の販売金額、靴下六、カラー三、九十七銭」とあり、小規模なものであった。しかし、会社は、すでに「組合組織」になっており、「何人といえども誠実にて才力あり、奮闘的人物は、店主たるの資格を得る」などと規約し、さらに、従業員は兄弟二人にもかかわらず、仕入課、販売課、庶務課、そして商況課まで置いていた。日本一になるという意味をこめて、生家の井桁屋（いげたや）の頭文字「井」の中に「日」の字をいれた“イズ日”印の屋号を大きく書き込んだ箱車を引きながら、水野兄弟は大阪のまちを売り歩き、着実に売上高をあげていった。そして、翌年から始めた運動服のオーダーメードが評判となり事業は拡大していった。明治四十三年には更なる飛躍を目指そうと、大阪梅田新道に店舗を移転し、同時に店名を「美津濃商店」と改名、既製運動服の生産・販売を開始し、スポーツ用品のトップメーカーとして全国に広く知られるようになっていった。明治四十五年には、弟利三が上京し東京支店も開設した。


会社設立趣意書［ミズノ株式会社蔵］

大阪実業団野球大会で優勝旗を授与する利八［ミズノ株式会社蔵］


処世規約［ミズノ株式会社蔵］

■明治四十四年（一九一一）、大阪実業団野球大会を美津濃商店が主催した。春秋二回、六十回開催した同大会は、現在の都市対抗野球大会に発展している。利八は、日露戦争出征の船中で戦友に語った大会を実現させたのである。大正二年（一九一三）には、関西学生連合野球大会を主催した。この大会は、二年後の大正四年、朝日新聞社の要請で、開催権を放棄し、現在の全国高校野球大会に発展している。その後しばらくして、利八は春の中学生野球大会を開催し、これは“センバツ”の前身となった。

ハリヨ博士のコラム

「美津濃商店」店名の由来

「美津濃商店」の店名の由来は、利八が美濃大垣の西船町生まれであることから「美濃」の間に、湊（みなと）を意味する「津」をあてて名付けられたという。将来店が発展したとき、子孫以外の人材に立派な才能を持った人が出てくることも考え命名した。その後、「美津濃運動用品株式会社」などと改名されながら、昭和62年（1987）に社名標記が「ミズノ」と統一されるまで“美津濃”の文字が使用された。

大阪淀屋橋の新社屋［ミズノ株式会社蔵］
昭和2年（1927）、大阪淀屋橋に高さ100尺のビルを完成させた。13間の間口は、濃尾大震災によって失われた生家のサイズであった。利八が大垣を出た時に母に誓った大志が実現したのである。

大阪北区蜆橋北西角の新店舗［ミズノ株式会社蔵］
大正2年（1913）に移転した新店舗。

美津濃チームの利八［ミズノ株式会社蔵］
利八は自らも野球に熱中し、40歳を過ぎるまで二塁手として美津濃チームの練習に打ち込んだ。

利八のパスポート［ミズノ株式会社蔵］
昭和4年（1929）10月から翌5年8月まで、欧米歴訪の視察旅行にでた。11カ国、80都市を訪問し、スポーツ用品メーカーやオリンピック施設をはじめ、関連施設を視察した。

利八の名刺［ミズノ株式会社蔵］

■部下への命令は必ず書類で書き残し、一定の日数の後、正確な報告を求めた。そのため、カーボン紙を利用した複製機を考案し、命令を発する際に、部下と利八が同じ書類を持てるようにした。

部下への命令書複写機と命令書［ミズノ株式会社蔵］

オフィシャル大学ボール
［ミズノ株式会社蔵］
昭和10年（1935）頃製造

■大正四年（一九一五）、利八は、関西学生連合野球大会を朝日新聞社主催の全国中等学校優勝野球大会へと引き継ぐと、その第二回大会を前に、ボールの規格統一を提唱した。素材となる良質のゴムや羊毛の調達、皮革業者の指導などのために全国を駆け回り、これを成し遂げ、アメリカにはない反発力の基準まで設定し、自社工場の二階窓から落とし利八の目の高さまで跳ね返ったボールに合格印を与えた。これが、「四メートル十二センチの高さから大理石板に落とし、一メートル四十五センチまで跳ね上がったもの」という不思議な数値となって昭和五十五年（一九八〇）まで生き続けた公式ボールの規定の起源である。戦後、野球ボール（一個四五〇円）は二十数年間値上げすることはなかった。「野球ファンに迷惑かけたらあかん」と利八は語った。

全国高等学校野球連盟表彰状と表彰式の利八
［ミズノ株式会社蔵］

■昭和三十年（一九五五）八月十日、利八は、実業団野球大会の始祖、学生野球大会の先駆者として全国高等学校野球連盟から表彰された。「第三十七回全国高校野球選手権大会」開会式で、中澤良夫高野連会長から表彰状を受け取り、胸に記念バッチを付けてもらった利八は、大観衆の拍手の中、うれし涙でスタンドがほんやり潤んだという。また、生涯をスポーツ界の発展に尽くした利八は、没後の昭和四十六年七月二十二日、業界人として初の野球殿堂入りを果たした。

水野利八関係年譜

年	年齢	
明治17年	1	1884 大工棟梁水野利八の二男として西船町（現・南切石町）に生まれる
明治24年	8	1891 興文尋常小学校に入学する
明治26年	10	1893 濃尾大震災により自宅が焼失、妹を失う
明治28年	12	1895 父・利八が亡くなる
明治29年	13	1896 興文尋常小学校を卒業し興文高等小学校に入学する
明治33年	17	1900 大阪道修町の薬種問屋「川崎屋」へ奉公に出る
明治38年	22	1905 京都の織物問屋「小堀商店」に奉公する
		大垣へ帰る
		日露戦争の補充兵として出征する
		肺尖カタルにおかされ、帰国し、療養生活に入る
明治39年	23	1906 大阪北区で「水野兄弟商会」を創業する
明治40年	24	1907 運動服のオーダーメードを始める
明治43年	27	1910 店名を「美津濃商店」と改称する
明治44年	28	1911 大阪実業団野球大会（現・都市対抗野球大会の前身）を開催する
大正2年	30	1913 関西学生連合野球大会（現・全国高校野球大会の前身）を開催する
大正4年	32	1915 亡父の「利八」を襲名する
大正5年	33	1916 硬式野球ボールの規格化を提唱する
		東京実業団野球大会を開催する
大正6年	34	1917 全国実業団優勝野球大会を開催する
大正7年	35	1918 オーバースェター、カッターシャツ、ボストンバッグなどをネーミングし、アイデア製品を発売する
大正12年	40	1923 国産スキーの生産を開始する
昭和2年	44	1927 大阪淀屋橋に高さ100尺、間口13間の本社ビルを建てる
昭和4年	46	1929 欧米11か国を視察する
昭和11年	53	1936 創業30周年を記念し、グライダーの製造を開始する
昭和16年	58	1941 大阪府から実業功績者の表彰を受ける
昭和17年	59	1942 社名を「美津濃株式会社」に変更する
昭和18年	60	1943 養老工場を開設する
昭和29年	71	1954 日本社会人野球協会表彰を受ける
昭和30年	72	1955 全国高校野球連盟から表彰される
昭和31年	73	1956 藍綬褒章を受ける
昭和39年	81	1964 勲五等双光旭日章を受ける
		東京オリンピック大会への協力に対し、日本体育協会、日本陸上競技連盟から表彰を受ける
昭和44年	86	1969 美津濃株式会社取締役会長に就任する
昭和45年	87	1970 永眠
		従五位勲四等瑞宝章を受ける
		遺志により財団法人水野スポーツ振興会が設立される
昭和46年		1971 業界人初の「野球殿堂」入りを果たす

利八の野球殿堂入り除幕式［ミズノ株式会社蔵］
東京球場でのオールスター第1戦試合開始前に利八のひ孫の手で除幕された。

ハリヨ博士のコラム

カッターシャツの名付け親

カッターシャツ、ボストンバッグ、ランパン（ランニングパンツ）…は、現在、普通名詞として使われているが、これらは利八によるネーミングであり、アイデア商品であった。ボストンバッグは語呂がいいから、カッターシャツは“勝ったシャツ”からネーミングされたという。

記念絵ハガキ
（水野新道（右上）・西船倶楽部（右下）・水野家頌徳碑（左））
［ミズノ株式会社蔵］

■利八は西船町（現・南切石町）における道路拡張に際し、水野家の敷地を無償で提供した。そのためこの道路は「水野新道」と称された。そして家屋を西船倶楽部（西船町の集会施設か）として提供したものと思われる。昭和二年（一九二七）十月十六日、利八夫妻、弟の利三夫妻をはじめ、西船町・東船町・南切石町の住民、市長、市議会議員ら約二百人が出席し、新道開通と倶楽部の開館を記念して、常楽寺境内に建立された「水野家頌徳碑（しょうとくひ）」の除幕式がおこなわれた。

利八の愛用品［ミズノ株式会社蔵］
メガネ、時計式計算機、懐中時計

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

産業の振興と学校教育の充実に尽くした実業人

土屋（つちや）義雄（よしお）

明治17年～昭和45年
（1884～1970）

大垣市名誉市民

荒尾町生まれ。神戸高等商業学校を卒業後、大垣共立銀行に入行。以来、明治・大正・昭和の三世六十有余年にわたり、取締役、頭取、会長等の要職を歴任し、地方金融界の安定と地方産業、特に中小企業の育成発展に大きく貢献した。さらに、大垣商工会議所会頭のほか幾多の公職を歴任し、郷土の発展に献身的な努力を続けた。また、大垣高等学校を新設し理事長に就任するなど私学の振興を図ったほか、商工業女子従業員対象の大垣市立第一女子高等学校設立世話人会長となるなど、学校教育の充実に尽力するとともに、大垣城の再建や大垣市観光協会の設立に尽くすなど市民の文化向上に貢献した。

神戸高等商業学校学生時代の義雄［個人蔵］
明治37年（1904）頃撮影。

大垣共立銀行に入行頃の義雄［個人蔵］
明治42年（1909）撮影。

大垣共立銀行本店行員
［株式会社大垣共立銀行「大垣共立銀行百年史」から転載］
大正2年（1913）撮影。前列左から4人目が義雄。

大垣商工会議所会頭の義雄［個人蔵］
昭和33年（1958）10月1日撮影。前列右から5人目が義雄。その右に田口利八（副会頭）（P.108）、左に小川宗一（副会頭）（P.100）。後から2列目の右から5人目は須崎潔（P.106）。

家族とともに［個人蔵］
昭和12年（1937）4月撮影。前列左が義雄。

■昭和二十五年（一九五〇）、義雄は、大垣商工会議所会頭に就任した。長年、金融業界で活躍してきた義雄は、時代の流れをつかみ、先を見通す力を身につけてきた。大垣の経済を復興させるため、中小企業の発展に心をくだいた彼は、次の言葉をのこしている。「戦後の統制がはずされ、すべての業者が自主的経営、真の自由競争の時代になります。中小企業は大企業のまねをしないで、よい品物をより安くつくることが今後は必要です。また、郷土の産業の発展のためには、中小企業同士が互いに同調協力することが必要です。そのためには、まず資本の蓄積が必要であり、企業の合理化、生産の増強こそが大切なことです」。このような指導力や新しい時代と経済の発展を見通す力が認められ、義雄は、昭和四十三年まで連続して会頭をつとめ、今日の産業都市大垣の基盤を築いた。

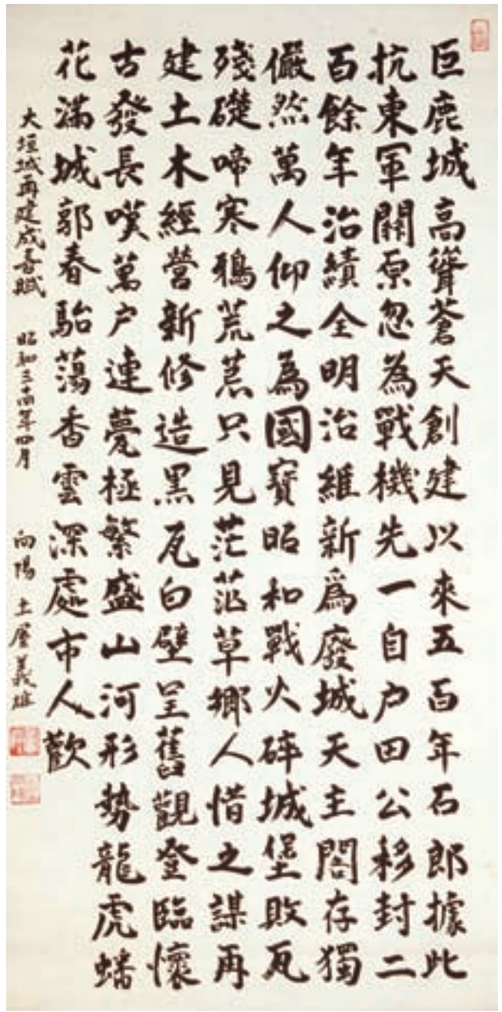
土屋義雄（向陽）筆「竹影」
武藤嘉門画賛［個人蔵］

抱節元無心　印
凌雲如有意
九十翁嘉門題　印　印
画竹
向陽　印

■昭和三十五年（一九六〇）頃の作。岐阜県知事をつとめていた武藤嘉門（かもん）［明治三年（一八七〇）～昭和三十八年（一九六三）］との合作。義雄が竹を描き、題を九十歳の嘉門が記している。

土屋義雄（向陽）
筆山水画「雨後新緑」
［個人蔵］

印
満地緑陰新雨後
一簾香霧午風初
壬辰（昭和二十七年）初夏
向陽山人　印　印



土屋義雄筆　「大垣城再建古詩」［個人蔵］

印
巨鹿城高聳蒼天　創建以来五百年
石郎據此抗東軍　関原忽為戦機先
一自戸田公移封　二百餘年治績全
明治維新為廃城　天主閣存獨儼然
萬人仰之為国寶　昭和戦火碎城堡
敗瓦殘礎啼寒鴉　荒荒只見茫茫草
郷人惜之謀再建　土木經營新修造
黒瓦白壁呈舊觀　登臨懐古發長嘆
萬戸連甍極繁盛　山河形勢龍虎蟠
花満城郭春駘蕩　香雲深處市人歡
大垣城再建成喜賦
昭和三十四年四月　向陽　土屋義雄　印　印

■昭和三十四年（一九五九）四月、巨鹿城（大垣城の別称）再建を祝って詠んだ詩。古くから城下町大垣の象徴として親しまれてきた国宝大垣城は、昭和二十年七月の戦災で焼失したが、近代都市として再生した大垣市の発展からも、市民のよりどころとして大垣城再建をのぞむ声が年ごとに高まった。戦後十一年を経た昭和三十一年六月、「国宝大垣城再建会」が結成され、義雄が委員長をつとめた。各町内では、再建浄財が募られ、昭和三十三年二月に天守閣跡で地鎮祭、五月には市制四十周年記念式典にあわせて起工式がおこなわれた。城は、昭和三十四年四月に完成し、まちに活気を与えることとなった。

（大意）
巨鹿城（大垣城の別称）は青空に高くそびえ、今より五百年ほど前に創建されたという。石田三成がこの城を拠点とし、東軍（徳川家康）に対抗し、関ヶ原合戦の前哨戦がおこなわれた。その後、戸田公が移封され、二百年あまりにおよび、戸田公による治世を全うされた。明治維新により廃城となり、天主閣のみが残され、厳かに存在していた。天主閣は人々から仰ぎ見られ、国宝となった。昭和の戦火により城の砦は砕かれ、敗北し残された瓦や土台には寂しく鴉が啼いていた。荒涼とし、ただ広く草が生えているのが見えるだけであった。郷土大垣の人々はこの姿を惜しみ、再建を考え、新しく修復し、建造することを計画した。黒い瓦、白い壁は昔の姿をあらわし、天主閣に登り、眺めると、往古がしのばれ、感慨深いため息がでる。多くの家の甍が連なり、大変、町がにぎわい、栄えていることがわかる。山や河は龍虎がとぐろを巻くような形をなしている。城郭は（桜の）花で満開となり、春ののどかな景色で、美しい雲が広がり、人々を喜ばせている。

大垣城再建を成し、喜び賦す
昭和三十四年四月　向陽　土屋義雄

土屋義雄先生像
［大垣日本大学高等学校蔵］
昭和59年（1984）建立。

■義雄は、学校教育の充実にも尽力し、商業の発展のためには単独の商業学校をつくる必要があると訴え、昭和二十六年（一九五一）大垣商業高校の設立を実現させた。さらに、私学の振興にも力を尽くし、大垣高校の設立に尽力するとともに、初代理事長に就任し、経営基盤を確立した。昭和三十九年には、働きながら勉強したいという願いをもつ多くの女子従業員のために、市立大垣第一女子高等学校の開設を成し遂げた。

■市制四十五周年を記念して現在の市役所庁舎が落成した昭和三十九年（一九六四）四月一七日、義雄は、大垣の経済・文化・教育など多方面にわたる業績が認められて、二人目の名誉市民の称号を受けた。祝賀会は翌月二日、大垣市スポーツセンター（現・大垣城ホール）において各界代表者約六百人が出席して開かれた。そして、この年の十一月には、勲五等双光旭日章を受章した。

大垣市名誉市民章受章祝賀会［大垣市蔵］

土屋義雄（向陽）筆「慶雲」［大垣市蔵］
昭和40年（1965）正月。「向陽」は義雄の号。

土屋義雄関係年譜

年	年齢	
明治17年	1	現在の荒尾町に生まれる
明治29年	13	大垣共立銀行開業される
明治40年	24	神戸高等商業学校を卒業する
明治42年	26	大垣共立銀行に入行する
		大垣共立銀行が安田保善社の傘下に入ることが決議される
大正12年	40	大垣共立銀行取締役となる
大正14年	42	大垣共立銀行支配人となる
		大垣商業会議所議員となる
昭和5年	47	大垣共立銀行常務となる
昭和17年	59	大垣共立銀行専務となる
昭和19年	61	大垣共立銀行社長となる
昭和20年	62	大垣共立銀行が安田保善社の傘下を離脱し自主経営に乗り出す
昭和25年	67	大垣商工会議所会頭となる
		大垣共立銀行頭取となる
昭和26年	68	初代大垣ロータリークラブ会長となる
		大垣商業高校の設立に尽力する
昭和28年	70	大垣市観光協会の設立に尽力する
昭和30年	72	黄綬褒章を受ける
昭和31年	73	大垣市功労章を受ける
		「国宝大垣城再建会」委員長となる
昭和37年	79	大垣共立銀行会長となる
昭和38年	80	大垣高校の新設を実現し、理事長に就任する
昭和39年	81	大垣市名誉市民の称号と名誉市民章を受ける
		勲五等双光旭日章を受ける
		大垣市立大垣第一女子高等学校の設立を実現させる
昭和42年	84	大垣共立銀行相談役となる
昭和45年	87	永眠

土屋義雄（向陽）筆
自画像賛「自画像自題」
［個人蔵］

自画像自題

匆々八十有餘年　老去驚省経済遷
従事銀行半百歳　寸効難就易茫然
天家新賜叙勲典　眼看祥光瑞色新
況得名誉市民薦　自家自賀喜飆全（せんぜん）

昭和三十九年四月大垣市名誉市民薦
同年十一月新賜叙勲典
昭和四十年正月八十二翁　向陽　印　印　印

（大意）自画像自題
あわただしく八十有余年が過ぎた。年をとり、驚き経済の変遷を省みる。
銀行に勤め、百年半ば。寸効（自分の手柄の謙称）は成しがたく、遠くはてしない
天皇より新たに叙勲式典にて勲章を賜い、眼前にめでたく喜ばしい光景をあらたに見る。
況（いわん）や名誉市民の推薦を得て、自らの祝事とともに、ただ生き長らえたことを喜ぶ。
昭和三十九年四月大垣名誉市民に薦められ、同年十一月新たに叙勲式典にて勲章を賜う
昭和四十年正月八十二翁　向陽

（解説）
昭和四十年（一九六五）正月。前年の四月に大垣市名誉市民、十一月に勲五等双光旭日章を受章した喜びが詠まれている。

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

青少年教育に尽力し、国産バルブコアを開発した企業人

小川宗一（おがわ そういち）

明治34年～平成2年
（1901～1990）

大垣市名誉市民

現在の一宮市生まれ。鉄道省勤務を経て、西外側町に自動車用タイヤバルブコアを製造する「太平洋工業合名会社」を設立。国内の自動車生産台数が年間わずか四百五十台程の時代に、バルブコアの国産化に着手し、世界のトップメーカーに成長させた。また、大垣商工会議所会頭のほか幾多の公職を歴任し、郷土の発展に献身的な努力を続けた。特に生涯を通して打ち込んだ軟式テニスでは、国体選手・監督として出場したほか、日本軟式庭球連盟の要職に就き、選手の育成・施設の充実につとめるなど、普及発展に尽力した。さらに、大垣市青年の家の建設資金を寄付、財団法人小川科学技術財団を設立するなど、青少年の健全育成・科学技術の発展に大きく貢献した。

愛知一中時代の宗一
［太平洋工業株式会社蔵］
上は、校庭でソフトテニス仲間らと。前列右から4人目が宗一。

■宗一は、現在の一宮市で生まれたが、父のいとこで大垣に住む小川惣吉の養子となった。小学校四年生の時、担任の教師からテニスの手ほどきを受け、それ以来、テニスに明け暮れ、国体にも出場するほど活躍した。中学校を卒業後、難関の鉄道省教習所普通部に合格、修了後は、名古屋鉄道局に配属された。しかし、役人生活だけに満足できず、家からの希望もあって、大正十五年（一九二六）に大垣にもどった。他人がやっていない事業を始めたいと考えながら、思うような事業が見つからず、悩む日々を送っていたある日、バルブコアを知り、これこそ求めていた事業だと決心した。大垣では、まだ自動車の珍しい時で、人々はあきれたが、「やがて日本でも車は増えていく。それに、値段は安いが、車種に関係なくどんな車にも使え、消耗が激しく将来性がある」と先を見通した決断であった。

若き日の宗一［太平洋工業株式会社蔵］
前列左が宗一、後列左は、現・太平洋工業名誉会長の小川哲也。

創業当時の太平洋工業合名会社工場［太平洋工業株式会社蔵］

創業初期の工場内［太平洋工業株式会社蔵］
昭和12年（1937）頃撮影

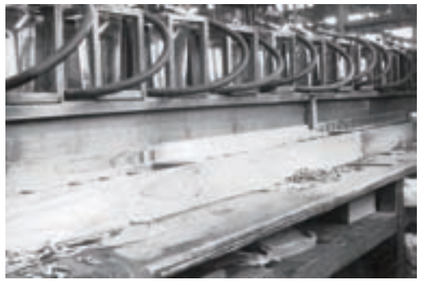
■昭和五年（一九三〇）八月八日、宗一は自動車用バルブコアの国産化を目指して会社を設立した。社名は、将来のことを考えて、今は「小川」だが、太平洋のように大きな会社にする。太平洋は英語でパシフィック（Pacific）で外国人にも分かるということで「太平洋工業合名会社」と決めた。御殿町にあった宗一の自宅を本社とし、養父（初代会長）小川惣吉が所有する西外側町の七軒長屋を改造して工場とした。社員は関係者四人を含めて十人。設備は旋盤、ボール盤、生ゴムからゴムを作る釜、ハンドプレスが主体という絵に描いたような町工場であった。実体の分からないバルブコアというものを造る会社が誕生したことに、奇異の目を向ける人々も少なくなかった。

創業当時のバルブコア［太平洋工業株式会社蔵］
昭和7年（1932）から10年頃のケース入りバルブコア。創業時はバルブインサイドと呼ばれていた。

バルブコア発送用の箱
［太平洋工業株式会社蔵］
昭和13年（1938）頃に使用していたダンボール箱

■車のタイヤに必ず装着されるバルブコアは、タイヤの空気がもれないようにするタイヤバルブの芯となる製品。「バルブコアは時計をつくるより難しい」とか「空気は見えないから、不良箇所がわからない」（イギリス人技師談）といわれながらも、宗一をはじめ社員の努力と執念により、初の国産化に成功した。

創業当時の社章
［太平洋工業株式会社蔵］
バルブコアがデザインされている。



自社開発のバルブコア空気漏れ検査機
［太平洋工業株式会社蔵］

■時計よりも難しいという精密製品を、全くの素人集団がつくっているのだから、簡単に事が運ばないのは当然であった。やっと売れた製品と、返品されてくる数が近いという惨憺（さんたん）たる成績で不良品の山ができ、経営は苦しくなるばかりであった。バルブコアがようやく使える製品となったのは、昭和九年（一九三四）頃に自社開発した空気漏れ検査機によって、品質の均一化が保てるようになってからであった。

■当時、タイヤバルブは輸入品がほとんどであり、名も知られていない国産品を売り込むことは、大変困難なことであった。宗一は、タイヤメーカーに採用されなくては将来はないと考え、何があろうと、毎週一回、必ず横浜ゴムと神戸のダンロップに顔を出して売り込み続けた。断り続けられながら半年以上が経ったある日、ダンロップのイギリス人技師が大垣の工場を訪れてくれることになり、設備と工程を視察した結果、昭和十一年（一九三六）、ついに五万本の注文を受けることとなった。続いて、横浜ゴムやブリヂストンとの取引も開始され、さらに技術的な問題も克服しながら、市場も拡大していき、業績も伸びていった。このころ、バルブコアの将来性に着目し、波に遅れまいと発足したメーカーが何社もあったが、ほとんどは企業として大成しなかった。バルブコアの製造が考えていたほど簡単ではなかったということにも原因はあるが、パイオニアである太平洋工業の製品には、当時流通していた製品にはなかった実用新案をとったネジ頭部のブリッジの開発があったため、後発メーカーはその壁を乗り越えることができなかったのである。

本社工場内風景［太平洋工業株式会社蔵］
バルブコアの製造風景。女子社員が多く、当時の大垣では「嫁が欲しければ太平洋へ行け」といわれたほどであった。

バルブコア実用新案特許の登録証
［太平洋工業株式会社蔵］
強くて正確な動きのできるネジ頭部ブリッジを開発し、昭和12年（1937）、「チェックバルブ」の名称で特許局に登録された。出願人および考案者に小川宗一の名が記されている。

美和町の本社正門［太平洋工業株式会社蔵］

美和町の本社工場［太平洋工業株式会社蔵］

■昭和十三年（一九三八）、太平洋工業株式会社に改組し、工場を美和町に新築移転した。戦時下にあって、アメリカ資本は閉め出されることとなり、すでにバルブコアの国内市場を独占していた同社は、殺到する注文を捌ききれない状態となっていたのである。昭和二十九年七月、日本工業規格（JIS）表示工場に認定され、バルブコアの国内シェアは、一層高まった。その後も会社は躍進を続け、バルブコアの生産量世界第一位の座についた。また、他の自動車部品や住宅関連機器部門等の製造にも発展していった。「世界のものさしで会社を見、他より一歩先んじる」緻密な分析と読みの確かさ、「七分の勝算があれば、断行すべき時がある」という実行力、弱音をはかず徹底的にやりぬく根性、誠実な人柄の賜物である。

西大垣工場の誕生［太平洋工業株式会社蔵］
昭和35年（1960）

西公園庭球場開き［大垣市蔵］
昭和39年（1964）8月1日
右端が宗一。

世界的水準をゆく太平洋工業大垣西工場
［太平洋工業株式会社蔵］
昭和35年（1960）に建設され、プレスから溶接、研磨、メッキ、塗装、組み立てまで、一貫生産がおこなえる工場として建設された。同年11月11日付東海日日新聞は「世界的水準をゆく」と報じている。

■宗一は昭和四十年（一九六五）に開催した岐阜国体の軟式庭球競技の大垣開催に尽力するとともに、開催を前に施設の充実を図るため奔走し、自ら、西公園庭球場のクラブハウス建設資金を寄贈、鉄骨二階建の立派な施設を完成させ、国体運営を成功に導いた。

■宗一は、青少年の健全育成にも意を注ぎ、青少年センターの建設資金を昭和三十八年（一九六三）十月、夫妻で寄贈、北公園内に鉄筋コンクリート造の「大垣市青年の家」が完成した。他の市町村に先駆けての整備であった。

大垣市青年の家完工開所式［大垣市蔵］
昭和39年（1964）12月16日

岐阜国体において軟式庭球岐阜県チームが総合優勝を果たす［個人蔵］
昭和40年（1965）、岐阜国体において軟式庭球の総監督をつとめた宗一は、胴上げで祝福された。

日本福祉大学附属図書館の寄贈［太平洋工業株式会社蔵］

■昭和三十九年（一九六四）、市青年の家とともに、青少年育成のために日本福祉大学附属図書館「慈昭館（しょうかん）」の建設費と図書を寄贈した。その後も毎年図書の寄付を続け、昭和四十二年には「小川文庫」が設けられた。また、昭和六十年、科学技術について学術・教育・試験研究をおこなう研究者や産業振興団体などを助成する財団の設立のため私財を投じた。

宗一の書「瑞祥」
［太平洋工業株式会社蔵

■好んで書いた文字で、若くして亡くなった愛息の戒名にも「瑞」がつけられている。「宗洋」は宗一の号。

大垣商工会議所会頭に就任［太平洋工業株式会社蔵］
昭和43年（1968）9月13日、大垣商工会議所ホールにて就任披露式が開催された。

小川宗一関係年譜

年		年齢
明治34年	1901	現在の一宮市の毛織業を営む家の二男として生まれる	1
		父の従兄弟で、大垣に住む小川惣吉の養子となる	
大正10年	1921	愛知県立第一中学校（現・旭丘高校）を卒業する	21
大正11年	1922	鉄道省東京鉄道局教習所普通部に入学する	22
大正13年	1924	鉄道省名古屋鉄道局に勤務する	24
昭和5年	1930	西外側町に「太平洋工業合名会社」を設立し、社員10人で自動車用バルブコアの製造を始める	30
昭和11年	1936	横浜・神戸のタイヤメーカーで製品が採用される	36
昭和13年	1938	「太平洋工業株式会社」に改組し、工場を美和町に移転する	38
昭和16年	1941	東京のバルブメーカー「桜井自動車工器」を吸収合併する	41
昭和22年	1947	西濃軟式庭球連盟会長となる	47
昭和24年	1949	自動車用プレス製品をトヨタ自動車工業（当時）に納入し、取引を開始する	49
昭和26年	1951	岐阜県軟式庭球連盟会長となる	51
昭和28年	1953	東海軟式庭球連盟会長となる	53
		太平洋工業会社取締役社長となる	
昭和35年	1960	久徳町に大垣西工場を建設し、昭和38年に同地へ本社を移転する	60
昭和37年	1962	工業標準化実施優良工場として通商産業大臣賞を受賞する	62
昭和38年	1963	「大垣市青年の家」の建設資金を寄附する	63
昭和39年	1964	大垣市功労章を受ける	64
		西公園庭球場のクラブハウス建設資金を寄附する	
		「大垣市青年の家」が完成する	
昭和40年	1965	岐阜国体にて軟式テニスの総監督をつとめ、総合優勝を果たす	65
		日本軟式庭球連盟副会長となる	
		日本福祉大学附属図書館「慈昭館」の建設資金を寄附する	
昭和41年	1966	文部大臣表彰（体育功労）を受ける	66
		大垣市軟式庭球連盟会長となる	
昭和42年	1967	太平洋工業株式会社取締役会長となる	67
昭和43年	1968	藍綬褒章を受ける	68
		大垣商工会議所会頭となる	
昭和45年	1970	株式を東京・名古屋証券取引所、市場第一部に上場する	70
昭和46年	1971	大垣市軟式テニススポーツ少年団団長となる	71
		勲四等瑞宝章を受ける	
昭和60年	1985	財団法人小川科学技術財団を設立する	85
昭和62年	1987	太平洋工業の男子軟式テニス部が日本実業団リーグ戦で優勝し、日本リーグ入りを果たす	87
昭和63年	1988	大垣市名誉市民の称号と名誉市民章を受ける	88
平成2年	1990	永眠	90
		正六位を贈られる	
平成3年	1991	遺族により大垣市少年スポーツ振興小川基金が設置される	

宗一の書「心」と記念皿［太平洋工業株式会社蔵］

■昭和五十五年（一九八〇）太平洋工業創業五十周年記念の記念品として、この文字入りの皿を社員や関係者に配った。右上の印には、「尺取虫」とある。何事にも不屈の精神で乗り越えてきた“尺取虫精神”は宗一の経営理念である。「尺取り虫が縮むのは、次に伸びるために縮むのだ。しかし、その縮み方は、後ろ向きでも消極的なせいでもない。前向きは新しい前進にむかってのみ縮むのである。・・・」どんな困難に直面しても一歩一歩地道に前進しながら決して後退はしない。宗一はそういう精神で経営にあたり、太平洋工業を大きく成長させていった。

牛の置物［太平洋工業株式会社蔵］
丑年生まれの宗一は、牛の置物を収集し、応接間のケースに並べて楽しんだ。小さな置物は孫の信也（現・太平洋工業社長）から贈られたオランダ出張のおみやげ。

名誉市民章の伝達［大垣市蔵］
産業振興のほか、テニス界でも活躍し、体育・教育・福祉の振興にも貢献した功績により、昭和63年（1988）大垣市名誉市民の称号が贈られた。

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

市体連生みの親となった決断と人情の経営者

須崎（すざき）潔（きよし）

明治35年～昭和48年
（1902～1973）

大垣市名誉市民

鳥取市生まれ。揖斐川電気工業（現・イビデン）に入社し営業部門を経て、取締役社長に就任。「脱化学、住宅産業へ」の転換を指揮し同社の繁栄を築いた。経営理念「企業は人なり」を実践し、底知れぬ包容力のある人情家であり、「須崎学校」と呼ばれる経済人塾を主宰したことでも知られる。また、大垣商工会議所副会頭、岐阜県教育委員会委員長のほか幾多の公職を歴任し、郷土の発展に献身的な努力を続けた。特に、スポーツをこよなく愛し、県内に先がけて大垣市体育連盟を発足させ、初代会長に就任。今日の大垣市のスポーツ振興の基礎を築くとともに、青少年の健全育成に貢献した。

新工場地鎮祭［イビデン株式会社提供］
昭和44年（1969）9月23日、住宅建材の新工場（衣浦工場）の地鎮祭であいさつをする取締役社長の潔。

■昭和十五年（一九四〇）、揖斐川電気工業の営業課長として迎えられた当時の同社は、電力からカーバイドへと拡張を続けており一大発展期であった。こうした中、潔は、生来持っていた群を抜く人柄と行動力で実績を挙げ、昭和二十二年には、常務取締役、同三十七年には社長に就任した。しかし、この時会社は、石油の燃料革命でカーバイド・肥料も生産低迷の苦境にあった。潔はここで「脱化学、住宅産業へ」と従来の電気化学工業からの大転換を指揮し、メラミン化粧板などの建材で同社の繁栄を築いた。立川勇次郎（P.28）が初代社長をつとめた同社は、その後も、時代のニーズを的確に捉え、今日の発展に至っている。また、潔は経営理念「企業は人なり」を実践し、社員からは「うちのおやじ」と呼ばれるほど従業員に対して思いやりがあり、人の和を大切にし、底知れぬ包容力があると評される人情家でもあった。

■潔はまた「スポーツおやじ」の異名があった。柔道四段・剣道三段、大学時代はラグビー・サッカーの選手として活躍した彼は、「スポーツをやる人間には根性がある」といつも人に語っていた。戦後の荒廃した社会情勢の中で、いち早くスポーツの有効性とその振興を唱え、次代の若者の健全育成に目を向け、多くの社会的地位にありながら体育連盟の結成に駆け回った。そして昭和二十六年（一九五一）には、岐阜県内に先がけて大垣市体育連盟を発足させ、初代会長として以後二十二年間、数多くの業績を残した。昭和三十一年には須崎体育奨励基金も発足させた。また、昭和四十年、総合優勝の感動にひたった岐阜国体誘致の陰の功労者として、潔は関係者の語り草となっている。旅費は全て自費で、中央に誘致を働きかけたのである。

体育連盟15周年記念植樹
［財団法人大垣市体育連盟蔵］
昭和41年（1966）12月、大垣市体育連盟創立15周年を記念し、大垣市スポーツセンター（現 大垣城ホール）で記念式典、北陸上競技場で記念植樹（イチョウの木）が行われた。中央でスコップを持つのが潔。

岐阜国体にて総合優勝に輝く［財団法人大垣市体育連盟蔵］
昭和40年（1965）10月、第20回国民体育大会秋季大会において、岐阜県が総合優勝に輝き、喜びにわく選手団。中央が潔。

第1回越年マラソン開催［財団法人大垣市体育連盟蔵］
昭和30年（1955）12月、第1回越年マラソンを開催した。右が潔、中央は山本市長。

潔の墓碑［慈渓寺］
昭和48年（1973）11月15日、市体育連盟によって建立された。2代目会長森直之の筆で「スポーツの父　須崎潔　ここに眠る」と刻まれている。

体育連盟20周年記念誌編集会議
［財団法人大垣市体育連盟蔵］
昭和46年（1971）、大垣市体育連盟20周年を記念し、招待女子実業団バレーボール大会を開催するとともに、記念誌を発行した。右が潔。

藍綬褒章受章祝賀会［イビデン株式会社提供］
昭和45年（1970）1月26日、同じく藍綬褒章を受けた池田文夫と、全国日本学士会アカデミア賞を受賞した田口利八（P.108）と潔の三人の祝賀会が市商工会議所で開催された。前列、左から池田文夫、潔、田口利八。後列、左から山本市長、小川宗一会頭（P.100）、土屋斉副会頭（P.114）。

潔の愛読書［個人蔵］
潔の書斎には、母校である慶応義塾大学の創始者福沢諭吉の全集、同大学の同級生であった千宗左による茶道全集のほか、スポーツ関係の書籍が並んだ。

須崎潔関係年譜

		年齢
明治35年	1902	鳥取市に生まれる	1
大正12年	1923	慶応義塾大学経済学部を卒業する	22
大正13年	1924	大同電力（関西電力の前身）に入社する	23
昭和6年	1931	鳥取県因幡銀行取締役支配人となる	30
昭和15年	1940	揖斐川電気工業に入社する（営業課長）	39
昭和22年	1947	揖斐川電気工業常務取締役となる	46
昭和25年	1950	大垣商工会議所副会頭となる	49
昭和26年	1951	大垣市体育連盟を結成、初代会長となる	50
昭和30年	1955	岐阜県体育協会副会長となる	54
昭和31年	1956	須崎体育奨励基金を発足させる	55
昭和33年	1958	大垣市功労章を受ける	57
昭和36年	1961	文部大臣表彰（体育功労）を受ける	60
昭和37年	1962	揖斐川電気工業取締役社長となる	61
昭和39年	1964	岐阜県教育委員会委員長となる	63
昭和40年	1965	中部経済連合会副会長となる	64
昭和41年	1966	大垣青年重役会（OJB）を発足させる	65
昭和44年	1969	藍綬褒章を受ける	68
昭和46年	1971	岐阜県教育懇話会会長となる	70
昭和47年	1972	勲三等旭日中綬章（産業発展功労）を受ける	71
昭和48年	1973	永眠	72
		従四位	
		大垣市名誉市民の称号と名誉市民章を受ける	
昭和53年	1978	大垣市体育連盟須崎章が制定される	

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

スポーツ・文化の振興にも貢献した日本のトラック王

田口利八（たぐち りはち）

明治40年～昭和57年
（1907～1982）

大垣市名誉市民

現在の長野県南木曽町生まれ。戦後の復興と発展にトラック運送事業の果たす役割の重要性を洞察し、現在の下呂市萩原町に中古トラック一台でトラック運送業「田口自動車」を創業。拠点を大垣に移すと、全国に路線網を開拓し、わが国最大の長距離路線トラック輸送企業へと成長させた。この間、業界団体の要職をつとめる一方、大垣商工会議所会頭のほか幾多の公職を歴任し、郷土の発展に献身的な努力を続けた。また、大垣市総合体育館の建設などに多額の寄附をおこなったほか、財団法人田口福寿会を設立し、市内の小中学校に図書を寄附するなど、大垣市のスポーツ・文化の振興にも大きく貢献した。

出征時の千人針［西濃運輸株式会社蔵］
昭和3年（1928）の松本連隊入隊時、無事に帰還できることを祈って贈られたもの。千人針とは布に多数の女性が赤糸でひと針ずつ縫って千個の縫玉をつくり、出征兵士の無事の帰還を祈って贈ったもの。

■昭和二年（一九二七）、二十歳の時一回目の徴兵をうけた利八は、戦車隊に配属され、満州で軍隊生活を三年間過ごした。その軍隊生活から生涯をかける仕事を得ることとなったのである。民間輸送の手段といえば、当時はまだほとんどが大八車や馬車であった。そうした時に戦車の威力や軍用トラックの輸送力を目の当たりにしたのである。「トラック輸送を事業にしたら必ず成功する。トラックには鉄道にない機動力がある。小回りのきくトラック事業しかない。」と決意したのである。除隊した利八は、すぐにトラック事業を進める準備に入り、軍隊時代の戦友の紹介で、中古トラックを一台購入した。同時に結婚話も持ち上がり、昭和五年二月三日に結婚式をあげ、その一週間後の二月十一日に萩原町（現・下呂市萩原町）で「田口自動車」をスタートさせた。

「田口自動車」創業の頃の利八［西濃運輸株式会社蔵］
同郷の夫人、長男とともに。

大垣城前に勢ぞろいした田口自動車［西濃運輸株式会社蔵］
大垣に進出した頃。左から2人目が利八。

■昭和八年（一九三三）四月、利八は、事業拡大のため大垣に拠点を移した。当時としては珍しい六台のトラックを持つ事業主となっていた。大垣を進出先に選んだ理由は、日本の真ん中で、運輸事業にとても良い位置にあること、地下水が豊富で工業の発展性が大きく、人的資源も豊富であったことなどである。大都市の名古屋や岐阜でなく、大垣を選んだのは、「事業は十年先をみてやるのだ」という持論で、現在よりも将来性に賭けたのである。そして、利八の予想通り、大垣には化学繊維、化学肥料工場などが次々と建設されていった。

水都産業株式会社定款・設立登記申請書類
［西濃運輸株式会社蔵］

利八の自動車運転免許証
［西濃運輸株式会社蔵］
昭和11年（1936）に更新のもの。

■終戦の翌年、昭和二十一年（一九四六）十一月一日、利八は、「水都産業株式会社」を設立した。戦後の復興にかける人々の気迫はすごいもので、トラック会社に仕事が殺到した。また、このころ資本家と労働者の対立も激化してきた。こうした中で水都産業は、労使協調と顧客第一主義を貫き、まったく間に東海地区で一位・二位を争う企業に成長していった。この水都産業が、昭和二十三年十月「西濃トラック運輸」、同三十年一月「西濃運輸」と社名変更し、現在に至っている。

■利八はいつも先を見通した経営をし、昭和二十二年（一九四七）、東京・大阪間の「長距離輸送定期便構想」を打ち出し、昭和二十五年十二月二日に達成するまでに至った。そして、業界のパイオニアとして全国に路線網を開拓し、わが国最大の長距離路線トラック輸送企業へと成長させた。

富士山を眺めながら走る西濃運輸のトラック
［西濃運輸株式会社蔵］
昭和25年（1950）12月2日には名古屋・東京間の路線免許を取得した。

路線免許状
［西濃運輸株式会社蔵］
昭和23年（1948）大垣・名古屋間。翌年には、大垣・大阪間の路線免許を取得した。

■「道路整備行政の現状と今後のあり方について」道路交通の困難化や混雑化の根本的な原因は、道路行政の立ち遅れにあるとし、道路補修事業の財源確保等の必要性を説いている。

自筆原稿［西濃運輸株式会社蔵］

書「労使協調」［西濃運輸株式会社蔵］

■利八は、事業を始めた頃の苦しみを思い返し、それをバネにしてきた。初心を忘れぬために、ボロボロになった印鑑入れや机なども、直しては生涯使い続けた。朱肉入れは、故郷木曽の材でできたものを愛用した。

愛用の朱肉入れと印鑑入れ［西濃運輸株式会社蔵］

夫人・孫と
［西濃運輸株式会社蔵］
夫人と孫の義隆（現・西濃運輸株式会社社長）とともに、自宅の庭でくつろぐ利八

私の一番楽しいことは、
一生涯を貫く仕事をもつこと。
世の中で一番尊い事は、
社会の為に奉仕し、決して自慢しないこと。
世の中で一番いけない事は、
うそをつくこと。

■昭和五十六年（一九八一）三月二十五日、利八は全日本トラック協会会長に推されて就任し、名実ともに、「トラック王」となった。

利八の名刺入れと名刺［西濃運輸株式会社蔵］

利八の手帳［西濃運輸株式会社蔵］
昭和57年（1982）の手帳。この年7月28日に永眠、名誉会長となった。

都市対抗野球で応援する利八
［西濃運輸株式会社蔵］

■昭和三十五年（一九六〇）、利八によって創部された西濃運輸野球部は、地域の期待に応えて、二年後に全国社会人都市対抗野球大会に初出場を果たした。四十七年には、黄獅子旗（第三位）を、平成六年（一九九四）には、初の白獅子旗（準優勝）を獲得した。創業者利八の精神を受け継ぎ、不屈の精神で戦う同社野球部の活躍は地域に活力を与え続けている。

■利八は地域社会および公共のために多大な貢献をした。第二の故郷大垣を愛し、「地域社会の発展とスポーツ振興に」と大垣城乾隅櫓（いぬいすみやぐら）の再建、大垣市総合体育館の建設などに多額の寄付をした。昭和四十二年（一九六七）に設立した財団法人田口福寿会は、小中学校への教育用図書（田口文庫）の寄贈、交通遺児の高校生への育英資金の援助、母子家庭の子弟援助、その他、体育振興、文化活動などへ幅広い助成が続けられている。昭和五十六年の田口福寿会への千三百万株（百二十億円相当）もの追加寄付は、全国を驚かせるものであった。

大垣市総合体育館竣工式［大垣市蔵］
昭和55年（1980）12月25日、利八は、この体育館の建設費として6億円を寄付した。

大垣城乾隅櫓起工式［大垣市蔵］
昭和41年（1966）11月3日、起工式にて鍬（くわ）入れをおこなう利八。
利八はこの隅櫓の建設費として、1,500万円を寄付した。

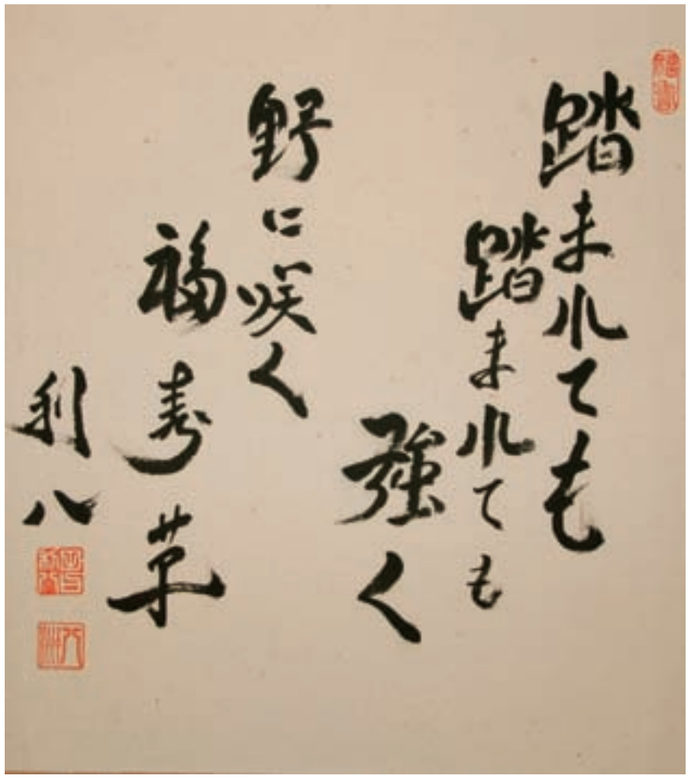
田口文庫贈呈式［大垣市蔵］
昭和57年（1982）2月25日、西部中学校にて。

利八の胸像除幕式［西濃運輸株式会社蔵］

■昭和五十七年（一九八二）、西濃運輸本社玄関ロビーに利八の胸像が設置された。台座には「創業者　田口利八会長之像」の文字と、座右の銘「踏まれても　踏まれても　強く　野に咲く　福寿草」が刻まれている。

田口利八関係年譜

		年齢
明治40年	1907	現在の長野県南木曽町の農家に生まれる	1
昭和2年	1927	徴兵により戦車隊に配属され、満州へ出征する	21
昭和5年	1930	現在の下呂市萩原町でトラック運送業「田口自動車」を創業する	24
昭和8年	1933	大垣に拠点を移す	27
昭和16年	1941	社名を「西濃トラック運輸株式会社」と改名する	35
昭和17年	1942	軍部の統合要請により、西濃1市5郡の14業者で「西濃運輸株式会社」を設立し、専務となる	36
昭和18年	1943	岐阜県内で7ブロックに分かれていたトラック輸送業界が、統合して「国土防衛自動車部隊」を結成し、部隊長となる	37
昭和21年	1946	統合会社を解散し、新会社「水都産業株式会社」を設立する	40
昭和23年	1948	社名を「西濃トラック運輸」に改名。長距離路線を開発する	42
		大垣―名古屋間の長距離路線免許を取得する	43
昭和24年	1949	大垣―大阪間の長距離路線免許を取得する	43
		岐阜県貨物自動車協会（現・岐阜県トラック協会）会長となる	
昭和25年	1950	名古屋―東京間の長距離路線免許を取得する	44
昭和30年	1955	社名を「西濃運輸株式会社」に改名する	49
		大垣市剣道協会会長、西濃剣道協会会長となる	
昭和31年	1956	大垣市体育連盟顧問となる	50
昭和34年	1959	江口夜詩（P.12）作詞作曲による社歌がつくられる	53
昭和35年	1960	日本生産性本部自動車運送事業近代化専門使節団長として渡米する	54
		西濃運輸野球部を創部する	
昭和37年	1962	全国社会人都市対抗野球大会に初出場を果たす	56
昭和39年	1964	財団法人岐阜県交通安全協会会長となる	58
昭和40年	1965	藍綬褒章を受ける	59
昭和41年	1966	岐阜県公安委員長となる	60
		大垣城乾隅櫓の再建に1千5百万円を寄附する	
昭和42年	1967	大垣市功労章を受ける	61
		財団法人田口福寿会を設立する	
昭和44年	1969	全国日本学士会アカデミア賞を受ける	63
昭和45年	1970	大垣市都市計画審議会会長となる	64
		内閣総理大臣表彰（交通安全普及）を受ける	
昭和46年	1971	大垣商工会議所会頭となる	65
昭和47年	1972	岐阜経済大学理事長となる	66
		全国社会人都市対抗野球大会で黄獅子旗（第3位）を獲得する	
昭和49年	1974	中部経済連合会副会長となる	68
昭和52年	1977	勲二等旭日重光章を受ける	71
昭和53年	1978	大垣市総合体育館建設のため6億円を寄附する	72
昭和56年	1981	西濃運輸株式会社会長となる	75
		社団法人全日本トラック協会会長となる	
昭和57年	1982	永眠	76
		正四位を贈られる	
		西濃運輸株式会社名誉会長となる	
		大垣市名誉市民の称号と名誉市民章を受ける	



書と愛用の文箱［西濃運輸株式会社蔵］

■利八は、故郷の木曽谷の道端に、春になると頭をもたげる福寿草が大好きであった。踏まれても踏まれても負けることなく再び芽をだす。そして、時に季節外れの春雪に見舞われても一杯咲き誇る。人生も同じだ――。利八は、人間も福寿草のようでなくてはならないと思い続けてきた。この「福寿草精神」は、社員にも浸透し、西濃運輸躍進の精神的支柱となっている。

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

経済界の活性化にリーダーシップを発揮した文化人

土屋（つちや） 斉（ひとし）

明治40年～平成15年
（1907～2003）

大垣市名誉市民

土屋義雄の二男として荒尾町に生まれる。大垣中学（現・大垣北高校）を経て東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業後、マスコミの第一線で活躍。大垣共立銀行に取締役として入行後は、進取の気性と反骨精神で次々に斬新なアイデアを打ち出し、同行を不動の地位に押し上げ、頭取、会長、名誉会長を歴任した。また、大垣商工会議所会頭のほか幾多の公職を歴任し、大垣市はもとより、岐阜県経済界の活性化に大きく貢献する一方で、ぎふ中部未来博覧会協会会長、（初代）大垣市文教協会会長、（初代）大垣市文化連盟会長などを歴任し、地域の文化振興の一翼を担い、岐阜県名誉県民ともなった。

■大学では、ドイツ哲学を中心に学んだ斉だが、「大学の勉強より面白かった」という大学新聞の執筆に熱中し、卒業後、社団法人同盟通信社（現在の共同通信社、時事通信社の前身）に入社し記者となった。入社後、すぐにアメリカへ研修旅行に出かけたのをきっかけに、ドイツやアジア各地に派遣され、緊迫した国際情勢を目の当たりにした。夫人は、文部省の雑誌の編集者をしており、斉とは仕事の関連で出会った。仕事の性質上、お互いを理解し合えたし、趣味も文学関係で話があったので、一年間の交際の後、結婚式を挙げた。

昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本軍が真珠湾を攻撃し太平洋戦争が起きた。軍による報道規制が強化され、ジャーナリストとしての理念は、戦争の渦中に埋没せざるを得なかった。戦況報告は、いつも「わが国の被害は軽微」と決まっていた。「事実を書いても削られる。日本が敗戦を認めるまで、国民に事実を知らせることができなかった」と悔やんだ。昭和二十一年、同盟通信社時代の同期とともにみやこ新聞社を設立、翌年には社長に就任した。その後、郷里に戻ることを考えた斉は、ラジオ放送局（岐阜放送）の設立に参画するとともに、父義雄（P.94）の強い要請により、昭和三十二年十月、大垣共立銀行に取締役として入行した。

結婚記念写真［個人蔵］
昭和13年（1938）5月9日　東京学士会館にて。
前列左から母志う、父義雄、4人目が新郎の斉。

土屋斉筆「河童之図」
［大垣共立銀行蔵］

印
無常迅速
光陰可惜
印

斉は、ユーモアを大切にし、河童愛好家が遊び心をもちながら環境保護を考える「河童連邦共和国」の大統領に就任、亡くなるまでの約十五年間つとめた。

土屋斉筆「鴨之図」
［大垣共立銀行蔵］

秋夜鳴声渡　江上芦風渡
土屋画　印　印

土屋斉筆「呑舟之魚」［個人蔵］

呑舟之魚（どんしゅうのうお）ハ
枝流（しりゅう）に遊（あそ）ばす　印

（大意）
（舟をひと飲みするような大魚は小さな川では遊ばないの意から）大人物はくだらぬ仕事には手を出さない。遠大な志をいだく人物は小事には目もくれないということのたとえ

（解説）
中国の故事・列子の「楊朱」にある原文は「游（およ）がず」となっている。

土屋斉筆「柿之図」［個人蔵］

韓非子

古者丈夫
不耕草木
之實足食也
婦人不織禽
獸之皮足衣
也

土屋 印

（大意）

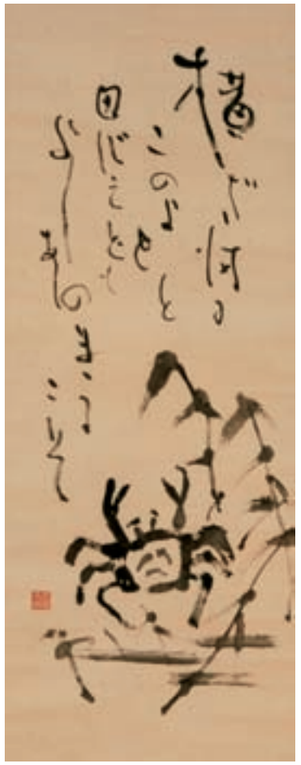
古代は、男子は耕作しなかったが、これは草木の実を食べるだけで、十分生きていけたからだ。また婦人は衣類をおらなかったが、これは鳥獣の皮を着るだけで、十分こと足りていたからである。勤労なくして、生活の物資はこと足りており、人民は少なくて資材はあまるほどあるので、人々は（資材をめぐって）争わない。この理由で、重い賞を与えず、重い罰を用いなくても、人々は自然に治まっていた。

（解説）

中国の古典「韓非子」の「第四十九五蠹篇」より

土屋斉書「陽山春光」［個人蔵］

横ざまに
このよをと
思えども
よしあしのまゝに
こそ 印



土屋斉筆「蟹 横ばい」
［個人蔵］

大垣市文化連盟設立総会
昭和56年（1981）11月14日。同連盟の初代会長として、壇上であいさつをする斉。

財団法人大垣交通遺児育英会20周年記念大会［大垣市蔵］
昭和60年（1985）11月。斉は同会を設立し、理事長をつとめた。

名誉市民章受章の伝達［大垣市蔵］
昭和63年（1988）3月1日。

ぎふ中部未来博覧会［個人蔵］
昭和63年（1988）6月17日、ぎふ中部未来博覧会会場で開催された「1988　ミスインターナショナル」での一幕。斉は、ぎふ中部未来博覧会協会会長をつとめ、事業を成功に導いた。

名誉県民章［個人蔵］
平成8年（1996）8月21日。5人目（大垣市初）の名誉県民となった。

土屋斉関係年譜

年	年齢	
明治40年		1907　土屋義雄（P.94）の二男として現在の荒尾町に生まれる
昭和7年	1	1932　東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業する
昭和8年	26	1933　社団法人同盟通信社に入社する
昭和21年	27	1946　株式会社みやこ新聞社を設立する（翌年、社長となる）
昭和25年	40	1950　大垣美術家協会を設立し会長となる
昭和29年	44	1954　岐阜放送株式会社常務取締役となる
昭和32年	48	1957　大垣共立銀行に入行、取締役となる
昭和35年	51	1960　大垣共立銀行常務取締役となる
昭和39年	54	1964　大垣共立銀行専務取締役となる
昭和42年	58	1967　大垣市文教協会を設立し会長となる
昭和44年	61	1969　大垣共立銀行取締役頭取となる
昭和45年	63	1970　財団法人大垣交通遺児育英会を設立し理事長となる
昭和48年	64	1973　大垣市総合計画審議会会長となる
昭和55年	67	1980　社団法人大垣銀行協会会長となる
昭和56年	74	1981　大垣市功労章を受ける
昭和63年	75	1988　梁川星巌顕（P.50）彰会会長となる
平成3年	80	1991　岐阜県公安委員会委員長となる
平成5年	87	1993　学校法人大垣日本大学高等学校理事長となる
平成7年	90	1995　大垣共立銀行取締役名誉会長となる
平成8年	92	1996　花フェスタ'95ぎふ実行委員会副総裁となる
平成10年	97	1998　岐阜県名誉県民の称号を受ける
平成15年		2003　河童連邦共和国大統領となる
		永眠
		正五位を贈られる

土屋斉書「瀧」［大垣共立銀行蔵］

斉の自宅書斎［個人蔵］
書や絵画の道具であふれている。

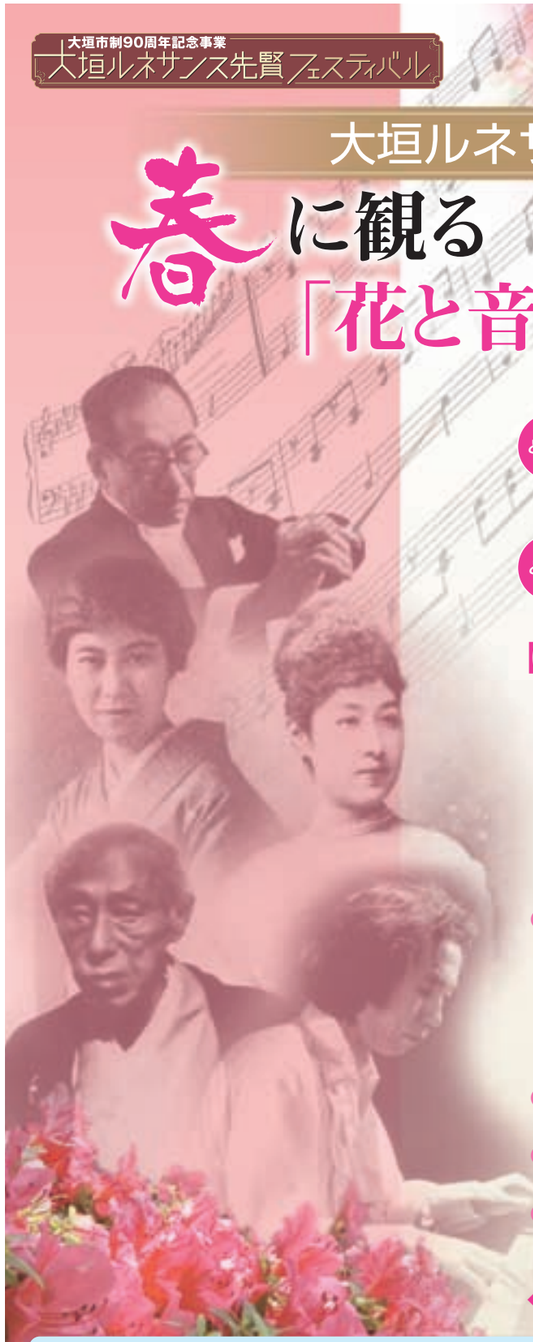
年	年齢	
昭和47年	66	1972　岐阜県消防友の会連合会会長となる
昭和48年	67	1973　新本店ビルを建設する
昭和55年	74	1980　勲三等瑞宝章を受ける
昭和56年	75	1981　財団法人霊山顕彰会岐阜県支部を設立し支部長となる
昭和57年	76	1982　大垣市文化連盟を設立し会長となる
昭和61年	80	1986　岐阜県更生保護会連盟会長となる
昭和62年	81	1987　大垣商工会議所会頭となる
昭和63年	82	1988　ぎふ中部未来博覧会協会会長となる
平成元年	83	1989　財団法人岐阜県老人クラブ連合会会長となる
平成2年	84	1990　大垣共立銀行取締役会長となる
平成3年	85	1991　勲三等旭日中綬章を受ける
		「小さな親切」運動岐阜県本部代表となる
		大垣市名誉市民の称号と名誉市民章を受ける
		実行委員長となる
		岐阜県民スポーツ振興推進協議会会長となる
		花フェスタ'95ぎふ実行委員会副総裁となる
		「小さな親切」運動岐阜県本部代表となる
		岐阜県博物館協議会会長となる
		奥の細道むすびの地「大垣」全国俳句大会実行委員長となる
		岐阜県民スポーツ振興推進協議会会長となる
		大垣共立銀行取締役名誉会長となる
		花フェスタ'95ぎふ実行委員会副総裁となる
		岐阜県名誉県民の称号を受ける
		河童連邦共和国大統領となる
		永眠
		正五位を贈られる

大垣市制90周年記念事業
大垣ルネサンス先賢フェスティバル

90年 いい風 いい夢
ひろがる未来

大垣ルネサンス先賢展

春に観る「花と音楽のまち」大垣



平成20年

とき 4|26土▶5|25日
9:00～17:00（4月26日［土］は11:00 テープカット・開場）

ところ 大垣市スイトピアセンター
アートギャラリー（学習館1階）他
（大垣市室本町5-51）

入場無料

【紹介する先賢】

- 飯沼 慾斎（いいぬま よくさい）（1783－1865）：近代植物学の開拓者
- 戸田 極子（とだ きわこ）（1857－1936）：日本音楽を西洋に紹介した琴の名手
- 小倉 末子（おぐら すえこ）（1891－1944）：大垣から世界へ羽ばたいた天才ピアニスト
- 江口 夜詩（えぐち よし）（1903－1978）：上石津町出身の偉大なる作曲家
- 戸田 義明（とだ よしあき）（1939－2003）：墨俣町が生んだ眩惑のピアニスト

● **記念講演会**
■4月26日［土］13:30～
「『草木図説』の彩色原画の世界」
講師：愛知大学非常勤講師 遠藤正治氏
■5月17日［土］13:30～
「昭和のレコードコンサート」
講師：レコード評論家 山田賢二氏
（協力 コーラス「とき」）

● **親子展示見学会**
4月27日［日］・5月11日［日］13:30～

● **先賢展巡り**
5月3日［土・祝］江口夜詩記念館 ほか

● **市民公募事業**
土・日・祝
■体験工房 ■市民・花ギャラリー ■市民・ギャラリーコンサート

大垣ルネサンス先賢フェスティバル
オープニングセレモニー
4月26日［土］
10:00～11:00
スイトピアセンター音楽堂

◆ **写真でみるわがまち大垣のあゆみ（同時開催）**

大垣市制90周年記念事業 大垣ルネサンス先賢展

季節ごとに「まちの個性」をテーマとした先賢の偉業を顕彰し、郷土 大垣の理解と愛着を深めるとともに、市民協働による新しいまちづくりや文化の創造につなげてまいります。

春に観る「花と音楽のまち」大垣　4月26日［土］～5月25日［日］	夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣　6月28日［土］～7月27日［日］
秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣　10月4日［土］～11月3日［月・祝］	冬に輝く「産業と防災のまち」大垣　2月7日［土］～3月8日［日］

オープニングセレモニー

春の先賢展では、花と音楽をテーマに5人の先賢を紹介しました。また、イベントでは、講演会のほか、体験工房などを開催しました。

来場者数 延べ25、000人

スイスイちゃん　スイトくん

先賢展展示

先賢展展示

先賢展展示

記念講演会「『草木図説』の彩色原画の世界」

押し花体験

市民かがやきギャラリーコンサート

春に観る『花と音楽のまち』大垣

事業概要

先賢展展示

先賢関係資料、パネルの展示　4、000人

「春に観る『花と音楽のまち』大垣」をテーマに郷土の先賢5人を紹介しました。

【とき】4／26(土)～5／25(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示目録】P.152

先賢展(春)パネル巡回展　1、000人

上石津地域および墨俣地域において先賢展のパネル巡回展を開催しました。

[上石津地域]
【とき】6／1(日)～6／29(日)
【ところ】日本昭和音楽村江口夜詩記念館　ホワイエ

[墨俣地域]
【とき】7／1(火)～7／31(木)
【ところ】大垣市さくら会館　1階ロビー

先賢展特別展示

市川里美「花の香」展　4、000人

大垣市出身の絵本作家市川里美の作品の中から、花をテーマに描かれた13作品を展示しました。

市民かがやき花ギャラリー　2、000人

公募のボランティア市民に先賢展会場を花で飾っていただきました。

【とき】第1回　5／5(月・祝)・6(火・祝)
第2回　5／10(土)・11(日)
第3回　5／17(土)・18(日)
第4回　5／24(土)・25(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー前
【出展者】第1回　馬渕恵津子さん
第2回　安武清子さん
第3回　長谷川文子さん
第4回　渡辺千代子さん

花の展示
音楽をテーマにした花の展示　5、000人

【とき】4／26(土)～5／25(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー前
【協　力】池坊裏千家安部華道教室

寄せ植え華道の展示　5、000人

【とき】5／3(土)～5／25(日)
【ところ】学習館1階　エントランスホール
【協　力】寄せ植え華道協会西濃支部

先賢展イベント

先賢展「春」オープニングセレモニー　750人

市制90周年記念事業の全事業を包括する「大垣ルネサンス先賢フェスティバル」のオープニングも兼ねたテープカットセレモニーをおこないました。

【とき】4／26(土)　13時30分～
【ところ】学習館1階　アートギャラリー入口
【テープカッター】
小川市長
津汲市議会議長
棚橋衆議院議員
高田岐阜県西濃振興局長
小川大垣商工会議所会頭
田中大垣市文化連盟会長

記念講演会

第1回「草木図説』の彩色原画の世界」　100人

飯沼慾斎が著した「草木図説」についての講演会を開催しました。

【講　師】愛知大学非常勤講師　遠藤正治氏
【とき】4／26(土)　13時30分～
【ところ】学習館1階　ハイビジョンシアター

第2回「昭和のレコードコンサート」　250人

江口夜詩の作品を中心に昭和の懐かしい歌謡曲を楽しく解説していただきました。
エンディングでは、来場者の皆さんと夜詩の代表作「憧れのハワイ航路」を大合唱しました。

【講　師】レコード評論家　山田賢二氏
【協　力】コーラスとき
【とき】5／17(土)　13時30分～
【ところ】学習館1階　コスモドーム

親子かがやき体験工房

花押し体験　３５０人

自分で育てた草花、野原に咲いている草花などで押し花の作り方と保管方法を学習していただきました。

【とき】第１回　４／26（土）　11時～15時
　　第２回　４／27（日）　11時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】押し花サークル

押し花のハガキ（しおり）づくり体験　１５０人

自分で押した押し花でハガキ、しおりづくりを楽しんでいただきました。

【とき】５／３（土）　11時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】押し花サークル

押し花で飾る

牛乳パックのレターケースづくり体験　１５０人

押し花で飾った牛乳パックでレターケースづくりを楽しんでいただきました。

【とき】５／５（月・祝）　11時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】押し花サークル

布で作る二輪ざしの花体験　１５０人

白い布を染色して、「母の日」に贈るカーネーションとスイトピーを作っていただきました。

【とき】５／６（火・祝）　11時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】はなのわの会

押し花のミニ額づくり体験　１５０人

長期間美しい自然の色が楽しめる押し花のアレンジメントとして押し花のミニ額づくりを楽しんでいただきました。

【とき】５／11（日）　11時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】押し花サークル

折り紙で飾る寄せ植えづくり体験　５０人

折り紙で飾る寄せ植えづくり体験をしていただきました。

【とき】５／17（土）　11時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】終の住まい研究会プラチナプラザ

親子展示見学会　５０人

子どもから大人まで楽しめる先賢展の展示資料の見学会を開催しました。

【とき】第１回　４／27（日）　13時30分～14時30分
　　第２回　５／11（日）　13時30分～14時30分
【ところ】学習館１階　アートギャラリー

先賢展巡り　５０人

かみいしづ緑の村公園・日本昭和音楽村江口夜詩記念館間のシャトルバスを運行し、同時開催された「第38回岐阜県みどりの祭り」来場者等に江口夜詩記念館を見学していただきました。

【とき】５／３（土）　10時30分～15時

先賢展ライブ

花と音楽のまち・おはなしキャラバン　６００人

「花と音楽」にちなんだ人形劇や紙芝居、絵本の読み聞かせなどを上演しました。

【とき】第１回　５／10（土）　14時～15時
　　第２回　５／11（日）　15時～15時30分
　　第３回　５／17（土）　14時～15時
　　第４回　５／18（日）　15時～15時30分
　　第５回　５／24（土）　14時～15時
　　第６回　５／25（日）　15時～15時30分
【ところ】学習館１階　ハイビジョンシアター
【協　力】童話の会「たんぽぽ」（第１・３・５回）
　　お話の会「大きな樹」（第２・４・６回）

市民かがやきギャラリーコンサート　５００人

公募のボランティア市民による音楽演奏で先賢展会場に彩りをそえていただきました。

【とき】第１回　５／17（土）　12時40分～13時10分
　　第２回　５／17（土）　15時30分～16時
　　第３回　５／25（日）　13時～13時30分
【ところ】学習館１階　アートギャラリー
【内　容】第１回　弦楽四重奏
　　第２回　サックス&電子ピアノ演奏
　　第３回　フルートアンサンブル
【出　演】第１回　大垣市室内管弦楽団メンバー（４人）
　　第２回　田中豪さん・大場航さん
　　第３回　フラウタースス

親子映像鑑賞会　４００人

「花と音楽」にちなんだ映像を上映しました。

【とき】４／26（土）～５／25（日）の毎土曜・日曜日
【ところ】学習館１階　ハイビジョンシアター
【内　容】日本の科学の開拓者「飯沼慾斎」
　　日本最初の科学的植物図鑑「草木図説」
　　想いを紡ぐ画家「守屋多々志」

戸田義明ピアノファンタジー　３００人

戸田義明のコンサートライブのビデオを上映しました。

【とき】５／17（土）・18（日）・24（土）・25（日）
【ところ】学習館１階　ハイビジョンシアター
【協　力】案山子の会

春　計２５、０００人

大垣市制90周年記念事業

大垣ルネサンス先賢フェスティバル

90年 いい風 いい夢 ひろがる未来

大垣ルネサンス先賢展

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

平成20年

とき 6|28土▶7|27日

9:00～17:00（6月28日［土］は9:30 テープカット・開場）

ところ 大垣市スイトピアセンター アートギャラリー（学習館1階）他

（大垣市室本町5-51）

入場無料

【紹介する先賢】

- 松本荘一郎（まつもとそういちろう）：わが国最初の工学博士で日本鉄道界のリーダー（1848－1903）
- 野村龍太郎（のむらりゅうたろう）：鉄道界の元老で南満州鉄道社長の工学博士（1859－1943）
- 立川勇次郎（たちかわゆうじろう）：電気鉄道業界の先駆者で養老鉄道の創始者（1862－1925）
- 那波　光雄（なわ みつお）：鉄道敷設の大家で橋梁学の工学博士（1869－1960）
- 谷九太夫（たにきゅうだゆう）（木因（ぼくいん））：船町湊の発展に尽くした船問屋（1646－1725）

◆ 写真で見るわがまち大垣のあゆみ（同時開催）

先賢展イベント「親子で遊ぼう鉄道 in 大垣」

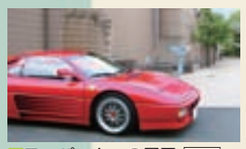
6/28～7/27の毎週土日に開催！

■ミニSL&電車に乗ろう！ 毎週土・日

■「銀河鉄道の夜」の上映 7/19・20・21・26・27

■鉄道アーティスト小倉沙耶のトーク&ライブ 7/20

■子ども車掌撮影会 毎週土・日



■スーパーカーの展示 6/28

■鉄道模型操作体験 毎週土・日

■JR東海名古屋吹奏楽団の演奏 7/20

季節ごとに「まちの個性」をテーマとした先賢の偉業を顕彰し、郷土 大垣の理解と愛着を深めるとともに、市民協働による新しいまちづくりや文化の創造につなげてまいります。

- 春に観る「花と音楽のまち」大垣　4月26日［土］～5月25日［日］
- 夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣　6月28日［土］～7月27日［日］
- 秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣　10月4日［土］～11月3日［月・祝］
- 冬に輝く「産業と防災のまち」大垣　2月7日［土］～3月8日［日］

オープニングセレモニー

夏の先賢展では、鉄道と交通をテーマに5人の先賢を紹介しました。また、「親子で遊ぼう鉄道 in 大垣」と題した楽しく学べるイベントを毎週末開催しました。

来場者数　延べ91,000人

スイスイちゃん　スイトくん

オープニングセレモニー

先賢展展示

先賢展展示

鉄道模型操作体験

ミニSL&電車　乗車体験「ミニSL」

子どもなりきり車掌体験

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

事業概要

先賢展展示

先賢関係資料、パネルの展示　10、000人

「夏に想う『鉄道と交通のまち』大垣」をテーマに郷土の先賢5人を紹介しました。

【とき】6／28（土）～7／27（日）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示目録】P.152

先賢展（夏）パネル巡回展　1、000人

上石津地域および墨俣地域において先賢展のパネル巡回展を開催しました。

［上石津地域］
【とき】9／2（火）～9／30（火）
【ところ】日本昭和音楽村江口夜詩記念館　ホワイエ
［墨俣地域］
【とき】8／1（金）～8／31（日）
【ところ】大垣市さくら会館　1階ロビー

先賢展特別展示

「大垣駅の沿革」展　10、000人

「大垣駅」の沿革を中心に、鉄道と交通の変遷をご紹介しました。

【とき】6／28（土）～7／27（日）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示目録】P.153

「交通の要衝・大垣」展　10、000人

「交通の要衝・大垣」をテーマに水運・街道について資料、パネルでご紹介しました。

【とき】6／28（土）～7／27（日）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示目録】P.154

「マイ・ミュージアム」展　10、000人

公募により市民の皆さんの「鉄道と交通」をテーマにした自慢のコレクションを出品いただきました。

【とき】6／28（土）～7／27（日）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【出品者数】10人

「小関正一　写真パネル」展　10、000人

故小関正一氏からご寄贈いただいた、「鉄道と交通」をテーマにした9点の写真パネルを展示しました。

【とき】6／28（土）～7／27（日）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー

市民かがやき花ギャラリー　10、000人

公募のボランティア市民に先賢展会場を花で飾っていただきました。

【とき】第1回　6／28（土）・29（日）
第2回　7／5（土）・6（日）
第3回　7／12（土）・13（日）
第4回　7／19（土）・20（日）
第5回　7／26（土）・27（日）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー前
【出展者】第1回　杉本和子さん
第2回　杉本和子さん
第3回　杉本和子さん、三輪茂子さん
第4回　杉本和子さん、久留間昭子社中
第5回　杉本和子さん、森茶華道教室

豪華バス「輝」号の展示　500人

テーマ「鉄道と交通」にちなみ日本に1台しかない豪華バスを展示しました。

【とき】7／20（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　北出口（屋外）
【協　力】名阪近鉄バス株式会社

スーパーカーの展示　2、000人
テーマ「鉄道と交通」にちなみスーパーカー「フェラーリ」を展示しました。
【と　き】6／28(土)
【ところ】学習館1階　エントランス(ピロティ)
【協　力】中日本自動車短期大学

ソーラーカーの展示　5、000人
テーマ「鉄道と交通」にちなみシルクロードを走行したソーラーカーを展示しました。
【と　き】6／28(土)～7／27(日)
【ところ】学習館1階　エントランスホール
【協　力】中日本自動車短期大学

七夕の笹飾り　5、000人
季節の行事で会場を飾る七夕の笹飾りをし、来場者に願い事を書いた短冊でいっぱいにしていただきました。
【と　き】7／4(金)～7／7(月)
【ところ】学習館1階　エントランスホール、学習館東　プロムナード
【笹の数】20本

■先賢展イベント

先賢展「夏」オープニングセレモニー　500人
きど保育園・みのり保育園の鼓笛隊によって「祝典序曲」が演奏される中、松本荘一郎が北海道で走らせた弁慶号モデルのミニSLに乗車した主催者、来賓が登場するという演出でセレモニーは開会しました。テープカットには、来賓としてお迎えした先賢のご子孫におこなっていただきました。その後、再び鼓笛隊に「大垣市民のうた」を演奏していただきました。
【と　き】6／28(土)　9時30分～10時
【ところ】学習館1階　エントランス(ピロティ)
【テープカッター】小川市長、高橋市議会議長、松本修様、立川麗子様、立川元彦様、園児5人
【協　力】きど保育園・みのり保育園、県立岐阜工業高校

親子かがやき体験工房
ミニSL&電車　乗車体験「弁慶号」　300人
期間中の毎週土・日曜日は、ミニSL(電車)が走ることが話題となり、親子連れなどで賑わいました。
【と　き】6／28(土)・29(日)　10時～15時
【ところ】学習館東　プロムナード
【協　力】県立岐阜工業高校

ミニSL&電車　乗車体験「大工電車」　600人
【と　き】7／5(土)・6(日)・26(土)・27(日)　10時～15時
【ところ】学習館東　プロムナード
【協　力】県立大垣工業高校

ミニSL&電車　乗車体験
「NACBPレールウェイ(電汽車)」　300人
【と　き】7／12(土)・13(日)　10時～15時
【ところ】学習館東　プロムナード
【協　力】中日本自動車短期大学

ミニSL&電車　乗車体験「ミニSL」　400人
本物の石炭をたいて蒸気をつくり走らせた「ミニSL」は、話題をよび、懐かしむ高齢者の皆さんも多くご来場いただきました。
【と　き】7／19(土)・20(日)　10時～15時
【ところ】学習館東　プロムナード
【協　力】山川誠一さん
大垣ジュニアリーダーズクラブ

親子SL見学会　300人
樽見鉄道を走ったSLC11155の特別乗車と見学会を開催しました。
【と　き】6／28(土)～7／27(日)の
毎土曜・日曜日　11時～、14時～
【ところ】子どもサイエンスプラザ1階　SL展示室
【協　力】SL保存会

鉄道模型操作体験　2、000人
子どもから大人まで人気の鉄道模型(2×5メートルの大ジオラマ)Nゲージの展示と操作体験会を開催しました。
【と　き】6／28(土)～7／27(日)の
毎土曜・日曜日　10時～15時
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【協　力】岐阜経済大学鉄道研究会

子どもなりきり車掌体験　800人
臨場感あふれる電車の大型写真タペストリーの前で、子ども用の車掌服を着ての記念撮影などで楽しんでいただきました。
【と　き】6／28(土)～7／27(日)の
毎土曜・日曜日　10時～15時
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【協　力】JR東海、養老鉄道、樽見鉄道

ペーパークラフト&マイコンカー自走体験　５００人
マイコンカーの外装をペーパークラフトで作成していただき、実際に走行させて楽しんでいただきました。
【と　き】６／28(土)・29(日)、７／６(日)・13(日)・27(日)　10時～15時
【ところ】学習館１階　アートギャラリー
【協　力】ＮＰＯ法人パソコンまるごとアシスト

パソコンで未来の乗り物を描こう！　６００人
パソコンを使って未来の乗り物を自由に描いていただきました。
【と　き】６／28(土)～７／27(日)の毎土曜・日曜日　10時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】絵めーるゆうえ倶楽部

パソコンでオリジナル乗り物Tシャツを作ろう！　２００人
パソコンを使って未来の乗り物を自由に描きTシャツにプリントしていただきました。
【と　き】６／28(土)～７／27(日)の毎土曜・日曜日　10時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】絵めーるゆうえ倶楽部

工作で乗り物をつくろう「発泡スチロール」　２００人
専用の工作道具を使って発泡スチロールの乗り物をつくっていただきました。
【と　き】６／28(土)、７／６(日)
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】発泡スチロール工作保存会

工作で乗り物をつくろう「折り紙」　３００人
折り紙で乗り物をつくっていただきました。
【と　き】６／29(日)、７／６(日)・13(日)・20(日)・27(日)　10時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】おり紙の会

工作で乗り物をつくろう「粘土」　２００人
粘土で乗り物をつくっていただきました。
【と　き】６／29(日)、７／12(土)　10時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】クレイクラフトOB会

御段木（おつだ）の森の小物づくり　１００人
小枝のブローチやかごづくりなどのつる細工を体験していただきました。
【と　き】７／26(土)　10時～15時
【ところ】学習館１階　ラウンジ
【協　力】ＮＰＯ法人樽見鉄道を守る会

「『鉄道と交通のまち』大垣」おえかきボード　３、０００人
先賢の似顔絵などを描いた大型のボードに乗り物の絵などを描いていただきました。
【と　き】６／28(土)～７／27(日)の毎土曜・日曜日　10時～15時
【ところ】学習館１階　アートギャラリー入口
【協　力】大垣女子短期大学

先賢展クイズ（スタンプ）ラリー　３、０００人
先賢展の展示内容から出題したクイズなどに答えていただくクイズ（スタンプラリー）を開催しました。
【と　き】６／28(土)～７／27(日)の毎土曜・日曜日　10時～15時
【ところ】学習館１階　アートギャラリーほか

先賢展ライブ

プラネタリウムソフト「銀河鉄道の夜」の上映　２、０００人
まさに天空の汽車に乗車したかのような夢の体験ができるプラネタリウム専用ソフト「銀河鉄道の夜」の上映をしました。
【と　き】７／19(土)　15時30分～
７／20(日)・21(月・祝)・26(土)・27(日)　10時～、13時30分～、14時30分～、15時30分～
【ところ】学習館１階　コスモドーム
【入場料】高校生以下無料、一般５００円

鉄道音楽隊トーク&ライブ　１５０人
明治時代の衣装に身を包んだ鉄道音楽隊による、鉄道唱歌などの演奏や楽しいトークショーを開催しました。
【と　き】６／29(日)　13時～13時30分、15時～15時30分
【ところ】学習館１階　アートギャラリー

先賢展かがやきコンサート　５００人

みそぎ保育園・わかたけ保育園の園児とＪＲ東海名古屋吹奏楽団とのジョイントコンサートを開催しました。

【とき】７／20（日）
第一部　11時～11時30分
第二部　13時15分～13時45分

【ところ】学習館１階　エントランス（ピロティ）

【出　演】みそぎ保育園・わかたけ保育園（第一部のみ）、ＪＲ東海名古屋吹奏楽団

鉄道アーティスト小倉沙耶トーク&ライブ　２５０人

鉄道アーティストとして人気の小倉沙耶さんの楽しいトークショーを開催しました。

【とき】７／20（日）　14時～14時30分

【ところ】学習館１階　アートギャラリー

【出　演】小倉沙耶

小倉沙耶の養老鉄道ミニミニツアー　１５０人

鉄道アーティストとして人気の小倉沙耶さんとともに養老鉄道（大垣～養老）に乗り、日本の電気鉄道の先駆者であり養老鉄道の創始者でもある立川勇次郎の顕彰碑を訪ねるミニツアーを開催しました。

【とき】７／20（日）
9時30分～10時（特別改札）
10時～10時33分（大垣→養老）
（顕彰碑見学）
11時６分～11時30分（養老→大垣）

【ところ】養老鉄道大垣駅～養老駅

【出　演】小倉沙耶

【参加料】無料（乗車券は参加者各自の負担）

市民かがやきギャラリーコンサート　４００人

公募のボランティア市民による音楽演奏で先賢展会場に彩りをそえていただきました。

【とき】第１回　６／28（土）13時～13時30分、14時～14時30分
第２回　７／６（日）11時～11時30分
第３回　７／６（日）13時～13時30分
第４回　７／26（土）11時～11時30分、13時30分～14時

【ところ】学習館１階　アートギャラリー

【内　容】第１回　ピアノ独奏
第２回　アコースティックギターで贈る癒しのサウンド
第３回　オカリナの調べ
第４回　弦楽四重奏

【出　演】第１回　樋口健司さん
第２回　由川史比古カルテット
第３回　エーデルワイス
第４回　大垣市室内管弦楽団メンバー（４人）

鉄道と交通のまち・お話キャラバン　２５０人

「鉄道と交通」にちなんだ人形劇や紙芝居、絵本の読み聞かせなどを上演しました。

【とき】第１回　６／28（土）14時～15時
第２回　７／５（土）14時～15時
第３回　７／12（土）14時～15時
第４回　７／19（土）14時～15時
第５回　７／26（土）14時～15時
第６回　７／27（日）14時～15時

【ところ】学習館１階　ハイビジョンシアター

【協　力】童話の会「たんぽぽ」（第１～５回）
てんてこ座（第６回）

親子映像鑑賞会　５００人

「鉄道と交通」にちなんだ映像を上映しました。

【とき】６／28（土）～７／27（日）の毎土曜
（10時～13時）・日曜日（10時～16時）

【ところ】学習館１階　ハイビジョンシアター

【内　容】「紅葉の養老鉄道」、「ＪＲ貨物古戦場をゆく」、「岐阜県の鉄道大全集」
「樽見鉄道冬の旅」、「ＳＬと出会う街大垣」、「博士の群像」

夏計　９１、０００人

オープニングセレモニー

秋の先賢展では、歴史と文化をテーマに12人の先賢を紹介しました。また、講演会や体験工房などのイベントを開催しました。

来場者数

延べ60、500人

スイスイちゃん　スイトくん

先賢展展示

先賢展展示

先賢展展示

講演会「江馬蘭斎と細香」

日本の文化体験（お香）

ぬり絵で学ぶ小原鉄心物語

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

事業概要

先賢展展示

先賢関係資料、パネルの展示　12、000人

「秋に振り返る『歴史と文化のまち』大垣」をテーマに郷土の先賢12人を紹介しました。

【とき】10／4（土）～11／3（月・祝）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示目録】P.154

先賢展（秋）パネル巡回展　1、000人

上石津地域および墨俣地域において先賢展のパネル巡回展を開催しました。

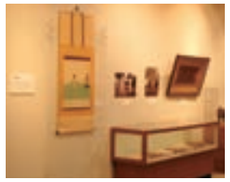
［上石津地域］
【とき】1／5（月）～2／1（日）
【ところ】日本昭和音楽村江口夜詩記念館　ホワイエ
［墨俣地域］
【とき】12／1（月）～20（土）
【ところ】大垣市さくら会館　1階ロビー

先賢展特別展示

「博士のまち大垣」展　12、000人

大垣から多くの博士を輩出するもととなった大垣藩校の歴史などを紹介しました。

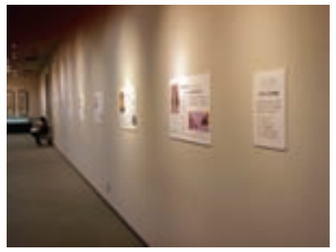
【とき】10／4（土）～11／3（月・祝）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー



「大垣の女性群像」展　12、000人

明治以降に活躍した先賢のうち特に女性にスポットをあて、7人の女性をパネルにより紹介しました。

【とき】10／4（土）～11／3（月・祝）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【紹介した女性】戸田極子、吉岡ひろ、上田やす、西川文子、上田君子、上野葉子、小倉末子

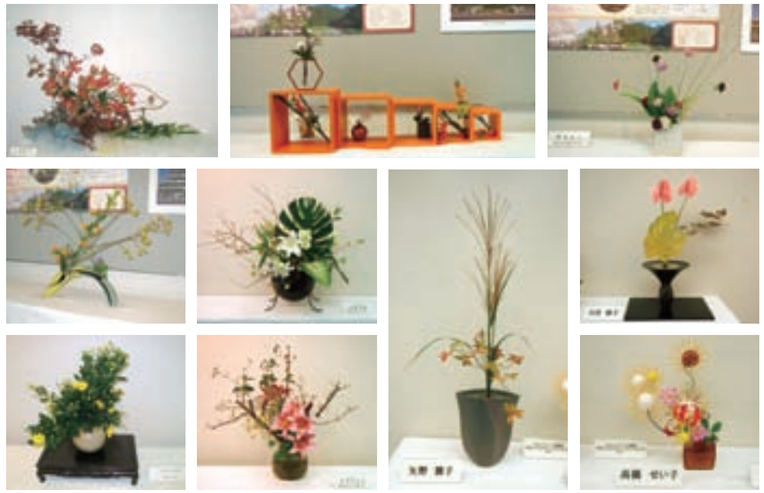


市民かがやき花ギャラリー　20、000人

公募のボランティア市民に先賢展会場を花で飾っていただきました。

【とき】第1回　10／4（土）・5（日）
第2回　10／11（土）～13（月・祝）
第3回　10／18（土）・19（日）
第4回　10／25（土）・26（日）
第5回　11／1（土）～3（月・祝）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー前

【出展者】第1回　杉本和子さん、稲川明子さん、川瀬美樹さん、久留間昭子社中
第2回　杉本和子さん、稲川明子さん、吉田ちよ子さん
第3回　杉本和子さん、古田正弘さん、柳瀬さださん
第4回　杉本和子さん、井上由子さん、原みさ代さん
第5回　杉本和子さん、月城文子さん



先賢展イベント

先賢展「秋」オープニングセレモニー　150人

紹介する郷土の先賢のご子孫をお迎えして、オープニングセレモニーを開催しました。

【とき】10／4（土）　9時30分～10時
【ところ】学習館1階　アートギャラリー入口
【テープカッター】小川市長、高橋市議会議長、江馬斉一郎様、安藤カヨ子様、和田悌二様、岩越健二様、竹田善隆様、関屋潔様

先賢展かがやき歴史文化講演会

紹介する先賢についての専門家による講演会を開催しました。各回ともに、講演後、展示会場において、実際の展示資料をご覧いただきながら、講師の解説を聴いていただきました。

第1回「大垣藩の藩政改革の推進者　小原鉄心」　150人

【とき】10／5（日）　10時～11時30分
【ところ】学習館2階　スイトピアホール
学習館1階　アートギャラリー
【講　師】大垣市市史編纂室専門員　横幕孜氏

第2回「博士のまち大垣」　150人

【と　き】10／23（木）　13時30分～15時
【ところ】学習館2階　スイトピアホール
　　学習館1階　アートギャラリー
【講　師】大垣市市史編纂室長　清水進氏

第3回「江馬蘭斎と細香」　150人

【と　き】11／3（月・祝）　10時～11時30分
【ところ】学習館2階　スイトピアホール
　　学習館1階　アートギャラリー
【講　師】岐阜女子大学教授　丸山幸太郎氏

先賢展親子かがやき体験工房　400人

むかしの遊び体験

クラフト・竹細工・こま回しなどの遊びを体験していただきました。

【と　き】10／4（土）・5（日）
　　10時～15時
【ところ】学習館1階　ラウンジ
【協　力】NPO法人大垣市レクリエーション協会

日本の文化体験（生け花・お茶・お香）　800人

生け花・お茶・お香を体験していただきました。

【と　き】10／4（土）　10時～12時
　　11／1（土）～3（月・祝）　10時～15時
【ところ】学習館1階　ラウンジ
【協　力】久留間昭子社中（生け花・お茶）
　　大垣聞香の会（お香）

ぬり絵で学ぶ小原鉄心物語　100人

マンガ「小原鉄心物語」を通じて、小原鉄心の功績を楽しく学んでいただきました。

【と　き】10／4（土）・5（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　ラウンジ
【協　力】NPO法人デジタル・アーカイブ・アライアンス

先賢展投句　100人

秋の先賢展をテーマにした俳句を募集しました。

【と　き】10／4（土）～11／3（月・祝）
【ところ】学習館1階　アートギャラリー入口

■先賢展ライブ

市民かがやきギャラリーコンサート　500人

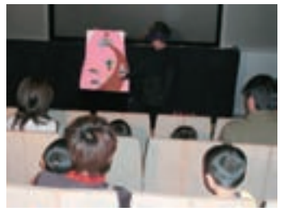
公募のボランティア市民による音楽演奏で先賢展会場に彩りをそえていただきました。

【と　き】第1回　10／4（土）　11時～11時20分
　　第2回　11／1（土）　11時～11時20分、13時～13時20分
　　第3回　11／1（土）　14時～14時20分
　　第4回　11／3（月・祝）11時～11時20分
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【内　容】第1回　弦楽デュオ（バイオリン）
　　第2回　二絃琴
　　第3回　クラリネット・デュオと声楽
　　第4回　バイオリンとチェロの弦楽トリオ
【出　演】第1回　Brücke～ブリュッケ～
　　第2回　ひびき会二絃琴
　　第3回　安藤泰子さん、清水淑子さん、安藤由美子さん、山口峻さん、福井理恵子さん
　　第4回　Brücke～ブリュッケ～

歴史と文化のまちお話キャラバン　500人

「歴史と文化」にちなんだ人形劇や紙芝居、絵本の読み聞かせなどを上演しました。

【と　き】第1回　10／4（土）　13時30分～14時
　　第2回　10／5（日）　13時30分～14時
　　第3回　10／11（土）　13時30分～14時
　　第4回　10／12（日）　13時30分～14時
　　第5回　10／13（月・祝）13時30分～14時
　　第6回　10／18（土）　13時30分～14時
　　第7回　10／19（日）　13時30分～14時
　　第8回　10／25（土）　13時30分～14時
　　第9回　10／26（日）　13時30分～14時
　　第10回　11／1（土）　13時30分～14時
　　第11回　11／2（日）　13時30分～14時
　　第12回　11／3（月・祝）13時30分～14時
【ところ】学習館1階　ハイビジョンシアター
【協　力】お話の会「大きな樹」（第1・2・5回）
　　「びっくりばこ」（第3・4回）
　　松本好弘さん（第6・8回）
　　黒下みゆきさん（第7回）
　　つばさ（第9回）
　　童話の会「たんぽぽ」（第10・11・12回）



親子映像鑑賞会　500人

「歴史と文化」にちなんだ映像を上映しました。

【と　き】10／4（土）～11／3（月・祝）の
　　毎土曜・日曜日　9時～12時30分
【ところ】学習館1階　ハイビジョンシアター
【内　容】「博士の群像」、「青野城のお殿様」、
　　「鳥の子祭りと粥の付神事」
　　「谷汲の四季」、「飯沼慾斎と草木図説」、
　　「梁川星巌を偲んで」

秋計　60、500人

オープニングセレモニー

冬の先賢展では、産業と防災をテーマに9人の先賢を紹介しました。また、イベントでは、講演会のほか、体験工房などを開催し、楽しく学んでいただきました。

来場者数　延べ87、500人

スイスイちゃん　スイトくん

先賢展展示

先賢展展示

先賢展展示

「大垣いちおし製品認定製品」PR展

先賢展かがやき講演会「バットづくり名人に聞く」

「紙ぶるる」で耐震構造を学ぼう

冬に輝く「産業と防災のまち」大垣

事業概要

先賢展展示

先賢関係資料、パネルの展示　13、000人

「冬に輝く『産業と防災のまち』大垣」をテーマに郷土の先賢9人を紹介しました。

【とき】2／7(土)～3／8(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示目録】P.156

先賢展(冬)パネル巡回展　1、000人

上石津地域および墨俣地域において先賢展のパネル巡回展を開催しました。

[上石津地域]
【とき】3／10(火)～3／24(火)
【ところ】日本昭和音楽村江口夜詩記念館　ホワイエ
[墨俣地域]
【とき】4／17(金)～5／15(金)(予定)
【ところ】大垣市さくら会館　1階ロビー(予定)

先賢展特別展示

大垣市の産業の歩み展　13、000人

明治時代から現在までの大垣市の産業の発展についてパネルで紹介しました。

【とき】2／7(土)～3／8(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー

「大垣の産業日本一」展　13、000人

製造業を中心に市内の事業者による産業日本一の製品等を紹介しました。

【とき】2／7(土)～3／8(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【展示製品等】
プリント配線基板(イビデン株式会社)、モーター・トランス用電磁鉄芯(城山産業株式会社)、路線貨物輸送(西濃運輸株式会社)、自動車用タイヤバルブ・バルブコア(太平洋工業株式会社)、自動車用ヒューズ(太平洋精工株式会社)、毛芯地(東海サーモ株式会社)、ガラスびん(日本耐酸壜工業株式会社)、セロハン(フタムラ化学株式会社　大垣工場)、車体プレス部品(株式会社丸順)、ます(大垣「ます」生産者実行委員会)

「大垣いちおし製品認定製品」PR展　13、000人

「大垣いちおし製品」として認定しPRしている製品などを紹介しました。

【とき】2／7(土)～3／8(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【PR製品等】
芭蕉水御膳(大垣商工会議所)、芭蕉水豆腐(大垣商工会議所)、健脳SweetValleyStyle製品(大垣商工会議所)、総合水管理サービス「ハリヨくん」(昭和技研株式会社)、きりえかるた　ふるさと大垣(御せんべい処　田なか)、大垣発！光触媒環境浄化のオリジナル製品(大垣市光触媒研究会)、リサイクルショップ「おもひでや」(昭和技研株式会社)、奥の細道むすびの地「大垣味自慢」(株式会社金蝶園総本家)、癒します(有限会社大橋量器)、セキュオス(クロスコミュニケーションズ株式会社)、芭蕉元禄いなりすし(大垣商工会議所食品部会)、木戸屋しょうゆ「心」シリーズ(木戸屋醸造株式会社)、水都大垣ものがたり・水都大垣小豆やっこ(御菓子司　胡蝶庵)、名水わさび製品(名水わさび)

プロ野球名選手のバット展　13、000人

水野利八にちなみ、利八が創業したスポーツ用品メーカーで製造されているプロ野球名選手の野球バットを展示しました。

【とき】2／7(土)～3／8(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【協　力】ミズノ　テクニクス株式会社
【展示バット】
イチロー選手(シアトル・マリナーズ)
山崎　武司選手(東北楽天ゴールデンイーグルス)
井端　弘和選手(中日ドラゴンズ)
荒木　雅博選手(中日ドラゴンズ)
和田　一浩選手(中日ドラゴンズ)

市民かがやき花ギャラリー　15、000人

公募のボランティア市民に先賢展会場を花で飾っていただきました。

【とき】第1回　2／7(土)・8(日)
第2回　2／14(土)・15(日)
第3回　2／21(土)・22(日)
第4回　2／28(土)・3／1(日)
第5回　3／7(土)・8(日)
【ところ】学習館1階　アートギャラリー前
【出展者】第1回　杉本和子さん
第2回　杉本和子さん、久留間昭子さん、山田友美子さん、近藤晏行さん、井上由子さん
第3回　杉本和子さん、山田弘美さん
第4回　杉本和子さん
第5回　杉本和子さん、大野久美甫さん

先賢展「冬」オープニングセレモニー　150人

紹介する郷土の先賢のご子孫をお迎えして、オープニングセレモニーを開催しました。

【とき】2／7（土）　9時30分～10時
【ところ】学習館1階　アートギャラリー入口
【テープカッター】小川市長、高橋市議会議長、金森元雄様、土屋嶢様、小川信也様、須﨑一己様、田口義嘉壽様

先賢展かがやき講演会

紹介する先賢についての講演のほか、先賢が創業した企業の職人の話や、テーマにちなんだ大垣の産業史の話など、先賢展に関して様々な視点で講演いただきました。

第1回「バットづくり名人に聞く」　200人

【とき】2／7（土）　13時～13時45分
【ところ】学習館6階　かがやき活動室6-1
【講　師】ミズノ テクニクス株式会社
プロバットマイスター　久保田五十一氏
【司　会】岐阜経済大学
硬式野球部監督　小森　茂氏

※削ったバットは、先賢展来場者アンケートに答えていただいた方の中から3月8日（日）に開催した大垣ルネサンス先賢フェスティバルエンディングセレモニーの会場で抽選し贈呈しました。

第2回「大垣の産業史」　200人

【とき】2／8（日）　10時～11時30分
【ところ】学習館2階　スイトピアホール
【講　師】大垣市市史編纂室長　清水進氏

第3回「大垣の先賢に学ぶ」　200人

【とき】2／19（木）　13時30分～15時
【ところ】学習館2階　スイトピアホール
【講　師】大垣市市史編纂室主幹　坂東肇氏

先賢展親子かがやき体験工房

ロボット操作体験　500人

災害救助型ロボットや人型ロボットの操作体験は子供たちの関心を引きました。

【とき】2／7（土）・8（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　アートギャラリー
【協　力】県立大垣工業高校

木ますづくり　300人

生産量日本一を誇る大垣の木ますづくりに挑戦していただきました。

【とき】2／7（土）・8（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　ラウンジ
【協　力】大垣「ます」生産者実行委員会

「紙ぶるる」で耐震構造を学ぼう　300人

紙工作で楽しく建物の耐震化の必要性を学んでいただきました。

【とき】2／7（土）・8（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　ラウンジ
【協　力】岐阜県防災士会西美濃ブロック

地震体験　300人

地震体験車で、過去に発生した大地震の振動を実際に体験していただきました。

【とき】2／7（土）・8（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　エントランス（ピロティ）
【協　力】岐阜県危機管理課

子どもなりきり消防士　300人

子供用の消防服を着て、ミニ消防車に乗って楽しんでいただきました。

【とき】2／7（土）・8（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　エントランスホール
【協　力】大垣消防組合

先賢展クイズ（スタンプ）ラリー　2、000人

先賢展の展示内容から出題したクイズなどに答えていただくクイズ（スタンプ）ラリーを開催しました。

【とき】2／7（土）・8（日）　10時～15時
【ところ】学習館1階　アートギャラリーほか

先賢展投句　50人

冬の先賢展をテーマにした俳句を募集しました。

【とき】2／7（土）・8（日）
【ところ】学習館1階　エントランスホール

ウルトラマンと学ぶ防災教室　500人

子供向けの防災クイズで学習していただきました。

【とき】2／7（土）　11時～、14時30分～

【ところ】学習館1階　エントランスホール

バット削り実演　300人

プロ野球選手のバットを製作している職人によるバット削り実演&トークを開催しました。削ったバットは、先賢展来場者アンケートに答えていただいた方の中から3月8日（日）に開催した大垣ルネサンス先賢フェスティバルエンディングセレモニーの会場で抽選し贈呈しました。

【とき】2／8（日）
10時～、11時～、13時～、14時～

【ところ】学習館1階　ハイビジョンシアター

【出　演】ミズノ　テクニクス株式会社
クラフトマン　名和民夫氏

市民かがやきギャラリーコンサート　500人

公募のボランティア市民による音楽演奏で先賢展会場に彩りをそえていただきました。

【とき】第1回　2／7（土）　11時30分～11時50分
第2回　2／7（土）　14時～14時20分
第3回　2／7（土）　15時～15時20分
第4回　2／8（日）　11時30分～11時50分
第5回　2／8（日）　14時～14時20分

【ところ】学習館1階　アートギャラリー

【内　容】第1回　1000年の哀愁の時を越えて
今甦る美しい音
第2回　ウクレレ&ベースDuo
第3回　弦楽四重奏の響き
第4回　ベトナム民族音楽の調べ
第5回　オカリナ・アンサンブル
ひびき会／絃琴

【出　演】第1回　由川史比古さん・矢野良和さん
第2回　大垣市室内管弦楽団
第3回　蒔田義信さん
第4回　エーデルワイス

産業と防災のまちお話キャラバン　300人

「産業と防災」にちなんだ人形劇や紙芝居、絵本の読み聞かせなどを上演しました。

【とき】第1回　2／7（土）　13時30分～14時
第2回　2／21（土）　13時30分～14時
第3回　2／22（日）　13時30分～14時
第4回　2／28（土）　13時30分～14時
第5回　3／1（日）　13時30分～14時
第6回　3／7（土）　13時30分～14時
第7回　3／8（日）　13時30分～14時

【ところ】学習館1階　ハイビジョンシアター

【協　力】黒下みゆきさん（第1回）
松本好弘さん（第2回）
童話の会「たんぽぽ」（第3・4回）
お話の会「大きな樹」（第5・6・7回）

親子映像鑑賞会　400人

「産業と防災」にちなんだ映像を上映しました。

【とき】2／7（土）～3／8（日）の
毎土曜・日曜日　9時～12時
※2／8（日）・14（土）・15（日）を除く

【ところ】学習館1階　ハイビジョンシアター

【内　容】「輪中と生活」
「母なる水を守ろう」
「博士の群像」

冬計　87、500人

総計　264、000人

関連事業

市役所ロビーコンサート

大垣ルネサンス先賢展など市制90周年記念事業のPRの場として、また、市民のかがやきライフ活動の発表の場として、公募市民によるミニコンサートを開催しました。

【とき】4／30（水）～3／25（水）
（4～7月は毎週水曜日、8～3月は原則毎月第4水曜日）
【ところ】市役所本庁舎1階　ロビー特設ステージ

5/28（水）
大垣オカリナの会「ほほえみ」［オカリナ］

4/30（水）
リコーダーフレンズ［リコーダー］

6/4（水）
エーデルワイス［オカリナ］

5/7（水）
ひびき会一絃琴［一絃琴］

6/11（水）
由川史比古・木全希巨人［ギター、ベース］

5/14（水）
桑原まゆこ［ピアノ］

6/18（水）
大正琴「ハイビスカス」［大正琴］

5/21（水）
細井美欧［箏］

事業概要

市役所季節飾り

市役所本庁舎ロビーにて、季節ごとのイベントに合わせた飾り物を設置し、大垣ルネサンス先賢展など市制90周年記念事業のPRをおこないました。

「鉄道と交通のまち」大垣　ミニSLの展示

【とき】6／10（火）～7／18（金）
【ところ】市役所本庁舎1階　特設ステージ
【協　力】山川誠一さん

市役所七夕飾り

【とき】6／17（火）～6／27（金）
【ところ】市役所本庁舎1階　特設ステージ
【協　力】丸の内保育園

2/18（水）
Felice（フェリーチェ）［声楽とピアノ］

11/26（水）
由川史比古・清水晴美［ギター、サックス］

7/23（水）
Coro　Solana（コーロ ソレーナ）［コーラス］

6/25（水）
大垣市室内管弦楽団［バイオリン］

3/3（火）
丸の内保育園［歌］

12/24（水）
ビアン シャンテ［ハンドベル］

8/27（水）
桑原まゆこ［ピアノ］

7/2（水）
山口昇二［ギター］

3/25（水）
金森星寿会［三味線］

12/24（水）
丸の内保育園［うた］

9/24（水）
東松栄会［津軽三味線］

7/9（水）
Laterne［フルート］

1/28（水）
Brücke（ブリュッケ）［バイオリン］

10/22（水）
デコメロ カルテット［鍵盤ハーモニカ］

7/16（水）
蒔田義信［二胡］

市役所クリスマス飾り

【とき】12／3（水）～12／25（木）
【ところ】市役所本庁舎1階　特設ステージ
【協　力】丸の内保育園、発泡スチロール工作保存会

市役所ひな飾り

【とき】2／9（月）～3／3（火）
【ところ】市役所本庁舎1階　特設ステージ
【協　力】丸の内保育園

展示（掲載）資料一覧

資料名	所蔵者等
春に観る『花と音楽のまち』大垣	
飯沼慈雨	
写真パネル「肖像写真」	早稲田大学図書館
写真パネル「福島県地理学教授」	大垣市立図書館
伊藤田川裕庵「博学教授」（1～3巻）	大垣市立図書館
飯沼慈雨「樹木草本図説」（1、8、16巻）	個人
飯沼慈雨「クロコ・藤棚」（スギ・兼）	東山動植物園
写真「明治時代の平林荘」（3点）	個人
飯沼慈雨「薬草図説」の広告	大垣市立荒崎小学校
「薬草図説」の広告貼り紙	大垣市立荒崎小学校
複製「福島県草本図説」（全27巻）	東山動植物園
写真パネル「福島県草本図説　カタクリ」	市立図書館
写真パネル「福島県草本図説　サギソウ」	個人
写真パネル「福島県草本図説　スズカケソウ」	個人
写真パネル「福島県草本図説　ケヤキメ」	個人
写真パネル「福島県草本図説　ゲンゲ（ムシゲ）」	個人
写真パネル「福島県草本図説　ヒマワリ」	個人
写真パネル「福島県草本図説　クロコユリ」	個人
田中芳男『新訂草木図説』（全20巻×2種）	個人・大垣市立図書館
牧野富太郎『増訂草木図説　草部』（全4巻）	大垣市立図書館
北村四郎『増訂草木図説　木部』（上・下巻）	大垣市立図書館
フランセモー・サバチェ『日本植物名彙』（全2巻）	大垣市立図書館
飯沼慈雨「蘭科の花図」	個人
飯沼慈雨「八ツ手ずの図」	個人
美濃路大垣市指定植物分布図	大垣市立図書館
パネル「邸宅および冒険蝶蛾図」	「飯沼慈雨」から転載
写真パネル「飯沼慈雨邸」	俵町地内
写真パネル「慈雨翁記念碑」	本今町地内
飯沼慈雨「解剖図」	東山動植物園
飯沼慈雨「頭部解剖図」	東山動植物園
飯沼慈雨「魚類図」	個人
飯沼慈雨「魚類譜」	東山動植物園
飯沼慈雨「石譜」	東山動植物園
書「己慶之原以敬伸也」	個人
書「九月四日待未至　嗜焉矣又隠机」	大垣城
写真パネル「頌碑群」	大垣公園内
戸田蘭子	
写真パネル「肖像写真」	個人
写真パネル「馬鈴薯栽培タイルの壁子」	個人
写真パネル「ウィーン時代の戸田公使一家」	「戸田氏宏」から転載
写真パネル「ウィーン時代の壁子」	個人
写真パネル「日本の民族音楽（日本民謡集）」（表紙・六段）（複製）	大垣市教育委員会
守屋多々志画「ウィーンに六段の調」	大垣市守屋多々志美術館
小倉末子	
写真パネル「肖像写真」	個人
写真パネル「神戸女学院時代の末子」	神戸女学院大学図書館
写真パネル「東京音楽学校教授時代の末子」	個人
写真パネル「東京音楽学校教授時代の履歴書」	個人
写真パネル「楽譜の稽古場」	
（大正5年4月24日　東京朝日新聞）」	東京藝術大学音楽学部
写真パネル「音楽の子小倉女史毎週」	
（大正5年4月23日　都新聞）」	東京藝術大学音楽学部
写真パネル「皇后宮音楽学校に行啓	
（大正5年11月17日　東京朝日新聞）」	東京藝術大学音楽学部
写真パネル「東京音楽学校演奏記念写真」	東京藝術大学音楽学部
写真パネル「一万円のピアノを弾くオ子」	個人
写真パネル「ベートーヴェン100年祭記念放送」	個人
写真パネル「声楽家ネルト・レーリエ夫人との演奏会」	個人
写真パネル「東京音楽学校で教えて」	個人
写真パネル「教えて下さい　ピアノ」	個人
写真パネル「夜内でピアノを弾くオ子」	個人
音楽演奏会曲目梗概　第十六人　東京音楽学校（大正8年）	東京藝術大学音楽学部
音楽演奏会曲目梗概　第十七人　東京音楽学校（大正9年）	東京藝術大学音楽学部
音楽演奏会曲目梗概　第十一　東京音楽学校（大正11年）	東京藝術大学音楽学部
大正十一年五月十三日午前〇時十四日午前〇時	
午後一時半会場　一時開演　音楽演奏曲目　東京音楽学校	東京藝術大学音楽学部
江口夜詩	
写真パネル「肖像写真」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「楽譜ピース「夜の愁」」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「望郷の唄」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「露も笑も」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「急げ幌馬車」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「旅の流れ星」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「幌馬車はゆく」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「曠野を行く」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「憧れのワイ峠路」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「氣質アギ」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「長崎のチンカ売り」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「炭焼を越えて」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「時雨ひとこき」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「蝉沈」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「乙女の日」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「希望の首飾」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「そんなおガをかつたなら」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「湖畔の灯」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「ヒ吉の子守唄」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「心のふるさと」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
楽譜ピース「赤いランプの終列車」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
歌詞カード「ふんなのいわ」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
歌詞カード「婦人愛国の歌」	個人
歌詞カード「興安おうし」	個人
歌詞カード「皇軍へ慰問の歌」	個人
歌詞カード「銃執って」	個人
歌詞カード「愛馬の別れ」	個人
歌詞カード「吹雪峠」	個人
歌詞カード「ミス・満州」	個人
歌詞カード「穀倉音の歌」	個人
レコード「赤いランプの終列車」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
レコード「忘られぬ女」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆色紙「忘られぬ花」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆楽譜「夢をなくした男」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆楽譜「思い出に誘はれて」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆楽譜「タンゴの夜」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
戦時下の譜	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
江口源吾筆　七言一句	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
夜詩ゆかりのオルガン	明覚寺
スギモート	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
朝顔型ホーン蓄音器	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆歌詞「楽譜「時中学校々歌」」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆歌詞「楽譜「時山小学校々歌」」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
直筆色紙（10点）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「楽園の歓喜」作曲の頃」（昭和3年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「卿人礼参列記念」（昭和3年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「婦人愛国の歌」吹き込み風景」（昭和13年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「満蒙特別慰霊班員として南方慰霊を取材」（昭和18年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「上石津町の生家」（2点）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「時村役場にテルバイト」（大正8年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「楽老の鬼の音」（昭和30年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「東京音楽学校時代の歌詰」（大正14年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「西条八十と夜詩」（昭和12年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「石垣雅著ワイアルトナー全集そ」（昭和12年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「広竹映画「高原の月」ロケ先の信州にて」（昭和12年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
高峰三枝子らと」（昭和12年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「近江後部・高橋獅太郎と」（昭和28年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「春日八郎と」（昭和29年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「「古賀政男と夜詩」（昭和35年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「小畑実と」	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
愛用のイトロノーム	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
愛用のミニリカメラ	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
愛用の印鑑・スタンプ・スタンプ台	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
愛用の置き時計	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
愛用の煙草入れ	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
小唄家元襲札	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「土浮町音頭・同乗年歌発表会」（昭和45年）	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
写真パネル「頌碑群」	旧時小学校跡地
夜詩の町民葬時の肖像写真	日本哲和和音楽社江口夜詩記念館
戸田蘭郎	
写真パネル「肖像写真」	大垣市歴民さくらの会館
写真パネル「「歴民小学校時代」	大垣市歴民さくらの会館
写真パネル「「東安中学校時代」	大垣市歴民さくらの会館
直筆楽譜「神田川」	個人
直筆楽譜「「きよしこの夜」	個人
直筆楽譜「「スーンリバー」	個人
直筆楽譜「「鳥の我が家」	個人
直筆楽譜「「ミエスチター」	個人
サイレントの楽譜「手花火の」	個人
CD作品「魂調すとアニマスム　戸田義明の世界」（6枚組）	個人
レコード作品「「ピアノ・ファンタジー　戸田義明の世界」	大垣市歴民さくらの会館
レコード作品「「ピアノ・ポトリー　こは花束」	大垣市歴民さくらの会館
カセット作品「日本美くの共振」	個人
写真パネル「オーケストラリア公演」（平成6年）	大垣市歴民さくらの会館
オーケストラリア公演時のトーク原稿	個人
リサイタルのポスター	個人
サイレントの色紙「町制100周年記念」	大垣市歴民さくらの会館
「さくらら会館竣工記念コンサート」のパンフレット	大垣市歴民さくらの会館
著作「家族温かさが幸せだと思う」	大垣市歴民さくらの会館
著作「ピアノ抒情曲集　美容雑」	大垣市歴民さくらの会館
著作「「ピアニスト徒然音」　Ｖｏｌ１～２	大垣市歴民さくらの会館
著作「「ラセイ　母」	大垣市歴民さくらの会館

夏に想う「鉄道と交通のまち」大垣

松本荘一郎	
写真パネル「肖像写真」	個人
荘一郎の履歴書	個人
荘一郎の履歴書（明治3年～36年）	個人
荘一郎の履歴書　士木学士として	個人
荘一郎の履歴書　賞罰等	個人
筆作麟祥先生門下生会案内（明治34年）	個人
筆作麟祥先生門下生会会員の名簿（大優見表・岡俊雄・石坂三郎・小松原三郎・芦貫次郎・石坂三郎）	個人
亜行日記	個人
留学先で仲間と」（1887年2月）	個人
写真「レンセラー工科大学」	個人
留学時代の学生寮跡（1887年頃）	個人
留学時代のメモ帳「Ｔｏｐｏｇｒａｐｈｙ（地形学）」	個人
留学時代のノート「Ｆｒｅｅ　Ｄｒａｗｉｎｇ（裏図）」	個人
留学時代の設計図面	個人
写真「弾正藤」	個人
写真パネル「「八幡橋（旧弾正橋）」	東京都江東区
写真パネル「「明治地使時代の荘邸」	北海道大学附属図書館
写真パネル「第二番艦四番砲塔前砲車之図（弁慶号）」	北海道大学附属図書館
写真「弁慶号」	北海道大学附属図書館
弁慶号のミニチュア模型	岐阜工業高校
欧米行日記（1900年）	個人・大垣市立図書館
荘一郎の名刺	個人
荘一郎の米国視察日誌（第一回信）	個人
辞令「事任大臣使事務官（明治20年1月16日）」	個人
辞令「陸軍大臣座下　御雇教師　仰付（明治30年1月28日）」	個人
辞令「金四百五拾圓　右事務格別勉勵ニ付慰労トシテ	
給與（明治30年3月30日）」	個人
辞令「京都大阪神戸ハ出張ヲ命ス（明治30年4月15日）」	個人
辞令「欧米各国ハ派遣中職務現金清算手当ヲクル官更	
ヲ命ス（明治30年5月8日）」	個人
辞令「一級俸下賜（明治30年8月18日）」	個人
辞令「従　等官二等（明治30年8月18日）」	個人
辞令「従　等官二等（明治30年8月18日）」	個人
辞令「任鉄道作業局長官運信省鉄道局長運信技監	
（明治30年8月18日）」	個人
辞令「欧米各国ハ派遣免（明治30年10月2日）」	個人
辞令「臨時政務調査委員被免（明治30年9月13日）」	個人
辞令「金五百圓　右事務格別勉勵ニ付慰労トシテ賞與	
（明治30年12月17日）」	個人
辞令「鉄道局勤務ヲ命ス（明治30年12月18日）」	個人
辞令「依願免無運信省鉄道局長（明治30年12月18日）」	個人
辞令「興業事業取調委任手当トシテ金弐百圓賜ハス	
（明治30年12月22日）」	個人
辞令「陸軍省施業備委員被免（明治31年7月18日）」	個人
辞令「運信省所管事務政府委員被　仰付	
（明治31年12月2日）」	個人
辞令「金八百円　右事務格別勉勵ニ付慰労トシテ	
賞與（明治31年12月17日）」	個人
辞令「陸軍省施業委員ヲ命ス（明治32年1月19日）」	個人
辞令「高仁鹿道廻議員ヲ命ス（明治32年1月24日）」	個人
辞令「鹿道國有調査委員被　仰付（明治32年2月25日）」	個人
辞令「運輸総督府　鉄道事務顧問ヲ嘱託ス	
（明治32年5月27日）」	個人
辞令「柿本昇下ハ出張ヲ命ス（明治32年11月13日）」	個人
鉄道全国普及のための建言書（直筆）	個人
伊藤博文書簡　荘一郎宛	個人
岩倉具定書簡　荘一郎宛	個人
渋沢栄一書簡　荘一郎宛	個人
荘一郎の葬儀記録（荘一郎の長男　松本宗治による）	個人
荘一郎の遺影	個人
荘一郎の葬儀時の弔辞（古市公威による）	個人
写真「記念駅前　胸像建設落成記念式典」	個人
記念絵ハガキ「札幌駅前　胸像建設落成記念」（2点）	個人
松本荘一郎の胸像レリーフ	小樽市総合博物館
野村龍太郎	
写真パネル「肖像写真」	「野村龍太郎傳」から転載
写真パネル「「龍太郎厳想の丈」	大垣市保健センター
写真「ベルリンにて」	「野村龍太郎傳」から転載
写真「講習所、尊国視察」	「野村龍太郎傳」から転載
写真「「農業学校創立10周年記念」	「野村龍太郎傳」から転載
龍太郎の書「厳不可長欲不可寝忘不可満楽不可極」	大垣市郷土館
野村龍太郎肖像	大垣市郷土館
立川勇次郎	
写真パネル「肖像写真」	個人
写真「「養老鉄道株式会社本社」	イビデン株式会社
養老鉄道株式会社　定款	個人
養老鉄道株式会社　第第2回株主総会報告書（明治45年）	個人
養老鉄道株式会社　第第5回株主総会報告書（大正2年）	個人
養老鉄道関係資料（絵ハガキ・広告類図など）	個人
写真パネル「「電気鉄道発祥の碑群」	京浜石灯籠川崎大師駅前
写真「「東京の自宅玄関前にて」	個人
写真「「東京の自宅における勇次郎と夫人」	個人
写真「「東京自転車製造株式会社」	個人
写真「「東京市街鉄道会社」	個人
写真「「不国日ネテルエクトリック社を視察」（大正11年）	個人
写真パネル「「勇次郎が密通した大前相」	安楽寺
写真パネル「「勇次郎の墓」	安楽寺
写真「「立川勇次郎君頌彰碑」落成記念式典」	個人
写真「「立川勇次郎君頌彰碑」落成記念集合写真」	養老鉄道養老駅前
写真パネル「「立川勇次郎君頌彰碑」	養老鉄道養老駅前
那須宗選	
写真パネル「肖像写真」	個人
光雄の履歴書（備忘録）	個人
写真「「袋町（本町）の生家」	個人
写真「「帝国大学の学生時代」	個人
帝国大学卒業証書（明治26年7月10日）	個人
写真「「完成した岡周鉄道排斥川橋梁」	個人
写真「「岡周鉄道排斥川橋梁の建設機材」	個人
写真「「建設途中の岡西鉄道排斥川橋梁」	個人
写真パネル「「岡西鉄道排斥川橋梁（現況）」	三重県桑名市
写真「「岡西鉄道木曽川橋梁」	三重県長島町
写真パネル「「岡西鉄道木曽川橋梁（現況）」	三重県長島町
写真「「岡周鉄道木津川橋梁架橋工事」	個人
辞令「京都帝国大学理工科大学土木工学第一講座	
分担に付職務俸金四百圓下賜」（明治32年7月12日）	個人
辞令「土木工学研究ノ為満二年間独国ハ留学ヲ命ス」	
（明治33年6月12日）	個人
辞令「職員命令ノ留学生年限内ニ哀今東伊藤雅英ヲ	
六箇国ノ順次ニ転学ヲ命ス」（明治33年9月23日）	個人
絵ハガキ「パリ（フランス）から」明治33（1900）年10月25日	
絵ハガキ「ドレスデン（ドイツ）から」	
明治34（1901）年12月6日	個人
絵ハガキ「プラハ（オーストリア（当時））から」	
明治34（1901）年12月9日	
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1901）年12月13日	個人
絵ハガキ「クリスマス」明治34（1901）年12月	個人
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1901）年12月30日	個人
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1902）年1月1日	個人
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1902）年1月1日	個人
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1902）年1月16日	個人
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1902）年1月22日	個人
絵ハガキ「ベルリン（ドイツ）から」明治35（1902）年1月29日	個人
絵ハガキ「リ（フランス）から」明治34（1901）年10月15日	個人
絵ハガキ「ポートサイド（エジプト）から」	
明治34（1901）年11月8日	個人
写真写真「下イツベルリンにて　アイスクートを楽しむ」	個人
写真「下イツベルリンにて　郁人勉学中に」	個人
辞令「在京都帝国大学理工科大学教授　叙高等官五等」	
（明治35年12月27日）	個人
写真「京都帝大教授時代」	個人
辞令「医師高等官四等」（明治38年2月1日）	個人
辞令「依願免本官」（明治39年8月16日）	個人
写真「帝国鉄道庁中津事務所長時代」	個人
写真「「鉄道式デリック・クレーンによる橋梁工事」	個人
報告書「第9回国際鉄道会議と伊国の旅程に感いて」（大正4年）	鉄道博物館
辞令「鉄道院総裁官房研究所長を命ス」（大正8年6月7日）	個人
講演用視察日誌（大正9年10月）	鉄道博物館
支部視察日誌（大正9年10月）	鉄道博物館
辞令「依願免本官並兼官」（大正15年5月5日）	個人
辞令「東京帝国大学工学部講師ヲ嘱ス」（大正15年5月5日）	個人
勲三等瑞宝章（大正9年10月25日）	個人
勲三等瑞宝章（勲記（大正9年10月25日）	個人
勲三等旭日中綬章（昭和35年4月1日）	個人
勲記（昭和35年4月1日）	個人
昭和大礼記念章　勲記	個人
紀元二千六百年祝典記念章	個人
谷九太郎（未図）	
写真パネル「肖像写真」	個人
写真パネル「美濃路大垣宿軒別絵図面」（部分）	大垣市立図書館
谷九太郎屋敷図	大垣市立図書館
「明りたえ」	大垣市立図書館
谷家のたえ	大垣市立図書館
谷家伝来の男刀	大垣市郷土館
船町御役船入石垣	大垣市立図書館
谷九渡送居広告　「岐阜県名所旧跡（大正11年刊）」	個人
大垣駅の沿革	
写真写真パネル「大垣駅　初代駅舎」	大垣駅
写真写真パネル「大垣駅　3代駅舎」	個人
写真写真パネル「大垣駅　4代駅舎」	大垣駅
写真写真パネル「林地ト道路間ニ住ヲ仮踏切」	大垣駅
写真写真パネル「林地ト道路間ニ住ヲ高架川渡橋（昭和29年）」	大垣駅
写真写真パネル「大垣駅　切符売場（昭和27年）」	大垣駅
写真写真パネル「大垣駅　待合室（昭和27年）」	大垣駅
写真写真パネル「大垣駅　東出口（昭和27年）」	大垣駅
写真写真パネル「大垣・養老間初電車運転（昭和30年）」	大垣駅
写真写真パネル「大垣駅を発つ特急つばめ（昭和35年）」	個人
写真パネル「電化工事を祝い装飾された大垣駅舎（昭和30年）」	大垣駅
写真パネル「駅前懐かし思ちち4代駅舎玄関を望む」	大垣駅

写真パネル「大垣駅　5代駅舎」	「歴史と文化のまち大垣」
絵はがき	から転載
4代目駅舎の壁面に取り付けられていた大時計	大垣城
美濃赤坂駅で使用された振時計	大垣城
写真パネル「東海道線桜井梁川放線（現況）」	新開町
写真パネル「樽見線揖斐川放線（現況）」	新開町
写真パネル「美濃老線キハ一八（昭和47年）」	大垣駅
写真パネル「大垣駅前に集まる乗合バス」	名阪近鉄バス株式会社
写真パネル「大垣・美濃赤坂間を走るテーゼルター（昭和33年）」	個人
写真パネル「荒尾付近を走る廃美濃赤坂行列車」	個人
写真パネル「美濃赤坂駅を発車するC11115号引の列車」	個人
写真パネル「美濃赤坂・乙女坂間西濃鉄道2105号引の貨物列車（昭和32年）」	個人
美濃赤坂行貨物列車」	個人
写真パネル「樽見線開通初列車（昭和31年）」	大垣駅
写真パネル「にぎわう樽見線ホーム」	大垣駅
写真パネル「大垣に到着した美濃神海線列車（昭和35年）」	個人
写真パネル「樽見線　SLさくら号車の運転（昭和47年）」	個人
バス乗車券	名阪近鉄バス株式会社
汽車時刻并汽車賃金表（明治21年　岐阜日新聞掲載）	中山道ミニ博物館
東海道鉄道旅行案内（明治22年）	中山道ミニ博物館
鉄道唱歌第一集（明治33年）	中山道ミニ博物館
鉄道線計畫覽（復刻）	中山道ミニ博物館
東海道線鉄道図鑑	中山道ミニ博物館
松井待御案内（明治43年　鉄道院発行）	個人
鉄道旅行案内（大正10年　鉄道省発行）	中山道ミニ博物館
入鹿記念マップ集（昭和3年頃）	中山道ミニ博物館
大垣駅鉄道案内（昭和3年）	中山道ミニ博物館
大垣駅改築落成式案内状	大垣市立図書館
大垣駅発着各線時刻表	大垣市立図書館
汽車時刻表	大垣市立図書館

交通の要衝・大垣宿

大垣宿本陣で使用された関札	大垣市郷土館
墨俣宿本陣で使用された関札（3点）	個人
写真パネル「草津宿本陣家臣門前に掲げられた関札」	草津市
写真パネル「全国宿場図」	「美濃国名所図絵」から転載
写真パネル「墨俣駅前通り記念鯰瀧」	墨俣町
写真パネル「朝鮮出兵関係墨俣神社絵馬」	竹鳥町宗典委員会
写真パネル「十六町豊年踊り」	十六町自治会
豊年踊り衣装と楽器・道具（一式）	十六町自治会
上野神輯工藤屋蔵	個人
別府神輯工藤　神輯子縛台	大垣市郷土館
別府神輯工藤　龍頭宝編縛台	大垣市郷土館
別府神輯工藤　鳥獣から縛台	大垣市郷土館
大象の図	中山道ミニ博物館
美濃路絵図	個人
美濃路大垣宿新別絵図	大垣市立図書館
写真パネル「大垣宿本陣貳石衛門殿絵図」	大垣市立図書館
朝鮮国帝曾百鮮華語	大垣市立図書館
朝鮮人来朝朝聘記	中山道ミニ博物館
琉球人大行列記	中山道ミニ博物館
琉球人行列図	中山道ミニ博物館
豊年踊りの図	十六町自治会
行列の役割分担表	十六町自治会
写真パネル「十万石祭で再現された豊年踊りの行列」	十六町自治会
大特官人形	十六町自治会
道中案内	個人

旅行用心集	個人
東海本曽両道中懐宝図鑑	個人
大垣宿竹鳥本陣模型	大垣市歴史まちづくり工房
明治天皇が視察した法螺貝子	観光グループ
写真パネル「蒸気船の視察」	大垣城
写真パネル「船橋乗客段発行絵はがき」から転載	「大垣船乗客段発行絵はがき」から転載
写真パネル「船町高橋の河岸」	「大垣船乗客段発行絵はがき」から転載
送り状	中山道ミニ博物館
送り状	中山道ミニ博物館
送り状	中山道ミニ博物館
蒸気船　愛岐丸の図	大垣市立図書館

秋に振り返る「歴史と文化のまち」大垣

谷木因

写真パネル「肖像写真」	個人
愛用の置硯箱	大垣市奥の細道ゆかりの地記念館
芭蕉書簡　木因宛	大垣市立図書館
「山ふきや」画賛　傍島湖竹画	大垣市教育委員会
「起稿の」画賛　傍島湖竹画	大垣市教育委員会
「蓮華郷北坊跡碑」	大垣市立図書館
「観音軒」額	大垣市立図書館
木因の落款（3点）	大垣市立図書館

江馬細香

江馬春齋筆「蘭竹雀図」（家賃十一　文永）	個人
江馬活堂筆「江馬鄙鳥蘭図」	個人
「『蘭譜』稿」（全5巻）	個人
杉田玄白書簡　蘭学宛	個人
前野良沢書簡　蘭学宛	個人
「『五葉遺草』の写本	個人
蘭斎のオランダ単語帳	個人
西本願寺御門跡帰依状　荷京都江戸越後一件覚書	個人
江馬家門人姓名録	個人

江馬蘭斎

写真パネル「肖像画」	個人
細香詩稿　山陽宗詞　梅花	個人
五歳の作『竹と雀の図』	個人
「蘭夢図」	大垣市立図書館
愛用品　印箱	個人
愛用品　印章（5点）	個人
愛用品　朱肉	個人
愛用品　文鎮（2点）	個人
愛用品　櫛	個人
愛用品　鏡	個人
愛用品　筆立	個人
愛用品　水差し（2点）	個人
愛用品　硯	個人
愛用品　矢立	個人
愛用品　筆	個人
愛用品　燭台	個人
水墨竹の図（2曲1双）	大垣市教育委員会

梁川星巌

写真パネル「肖像画」	善渓寺

写真パネル「肖像写真」	個人
愛用の置硯箱	大垣市奥の細道ゆかりの地記念館
芭蕉書簡　木因宛	大垣市立図書館
「山ふきや」画賛　傍島湖竹画	大垣市教育委員会
「起稿の」画賛　傍島湖竹画	大垣市教育委員会
「蓮華郷北坊跡碑」	大垣市立図書館
「観音軒」額	大垣市立図書館
木因の落款（3点）	大垣市立図書館

江馬蘭斎

江馬春齋筆「蘭竹雀図」（家賃十一　文永）	個人
江馬活堂筆「江馬鄙鳥蘭図」	個人
「『蘭譜』稿」（全5巻）	個人
杉田玄白書簡　蘭学宛	個人
前野良沢書簡　蘭学宛	個人
「『五葉遺草』の写本	個人
蘭斎のオランダ単語帳	個人
西本願寺御門跡帰依状　荷京都江戸越後一件覚書	個人
江馬家門人姓名録	個人

江馬蘭室

写真パネル「肖像画」	個人
細香詩稿　山陽宗詞　梅花	個人
五歳の作『竹と雀の図』	個人
「蘭夢図」	大垣市立図書館
愛用品　印箱	個人
愛用品　印章（5点）	個人
愛用品　朱肉	個人
愛用品　文鎮（2点）	個人
愛用品　櫛	個人
愛用品　鏡	個人
愛用品　筆立	個人
愛用品　水差し（2点）	個人
愛用品　硯	個人
愛用品　矢立	個人
愛用品　筆	個人
愛用品　燭台	個人
水墨竹の図（2曲1双）	大垣市教育委員会

梁川星巌

写真パネル「肖像画」	善渓寺

義明　知恵と意味の石	大垣市郷土館
「吉野桜書」	善渓寺　郷土館
星嶽の落款（3点）	大垣市立図書館
「山水之図」	個人

張紅蘭

写真パネル「肖像画」	善渓寺
老龍琴（上総琴）	大垣市郷土館
「『崔嵬小図』	個人
「『紅蘭小集』	大垣市立図書館
「古蘭社集会図」（伊豆原麻谷筆・児玉石峯写）	個人
紅蘭の落款（2点）	大垣市立図書館

小原鉄心

写真パネル「肖像写真」	大垣市立図書館
「『幸中とらいて一言を贈す』	個人
「『粋中大書』	個人
「『鉄心遺稿』	大垣市立図書館
愛用の笠	大垣城
愛用の杖	大垣城

南条文雄

写真パネル「肖像写真」	善運寺
高倉学寮入学許可書	善運寺
高倉学寮不礼	善運寺
南条笠原岡伽書簡	大谷大学博物館
マクスミューラー書簡文雄宛	岐阜県歴史資料館
書（父毛筆と文雄）	善運寺
書（母只弥宗せ書き）	善運寺
書（『梵文』）「道の悪を作す莫れ・・」	善運寺
書（『梵・英・漢文の三語』）「ベルトリッ歌学の歌」（明治35年）	善運寺
書（『大辰に帰省した際の書』）（明治43年）	善運寺
書（『大鄭麦石』の観音像合作）	善運寺
書「『母法衣身母』（大正5年）	善運寺
著書「『大明三蔵聖教目録』（2点）	大谷大学図書館・善運寺
写真「渡邊（運如上人）御遠忌」（明治31年）	岐阜県歴史資料館
写真「清沢満之葬儀会葬者」（明治35年）	大谷大学真宗総合研究所
写真「『梵漢仏教辞典』校注」（大正6年）	大谷大学真宗総合研究所
写真「大谷大学創設記念写真」（大正11年）	大谷大学真宗総合研究所
南条文雄・泉芳璟訳自筆草稿「邦訳　梵文入楞伽経」	大谷大学博物館
著書「邦訳　梵文入楞伽経」	大谷大学図書館
南条文雄校訂自筆草稿「梵文入楞伽経」	大谷大学博物館
南条文雄・笠原研寿自筆「移文入楞伽経」	大谷大学博物館
南条文雄・笠原研寿自筆「梵文入楞伽経」	大谷大学博物館
写本「移文梵文仮名倉鑑」	大谷大学博物館
愛用品　僧衣	岐阜県歴史資料館
愛用品　文箱	岐阜県歴史資料館
愛用品　懐中時計	岐阜県歴史資料館
愛用品　裂裟「宗祖大師七百回忌記念」	岐阜県歴史資料館
著書「『暫日機』（昭和2年）	善運寺
特殊功章（大正12年10月1日）	岐阜県歴史資料館
補欠大僧正任命状（昭和2年11月9日）	岐阜県歴史資料館

松井直吉

写真パネル「肖像写真」	「東京大学百年史」から転載
学位記「『哲学博士』」（明治21年6月7日）	個人
戸籍（明治40年6月10日）	岐阜県歴史資料館
ドクター論文マイクロフィルム	個人
建築図面「サン・ルイ・アン・リル教会（フランス　パリ）」	個人
絵画（女性像）	個人
学位記「ドクター・オブ・フィロソフィー」（コロンビア大学　明治13年）	個人

学位記「ドクター・オブ・フィロソフィー」（コロンビア大学　明治13年）	個人
留学時代のノート（2点）	個人
写真パネル「文部省第一期海外留学の同期」（明治38年）	個人
写真パネル「家族とともに」	「『東大出身』人」から転載
写真パネル「初期文展審査員」（明治40年）	個人
長男元太郎の大阪医師行社会学願い（明治21年）	岐阜県歴史資料館
岐阜県尋常中学校入学外交部員嘱任状（明治29年）	個人
宮中宴会招待状（33点）	個人
名刺（戎井忠画伝層藤付き）	岐阜県歴史資料館
勲記「旭日重光章」（明治44年）	個人
写真パネル「胸像」（大正3年・新海竹太郎作）	東京大学農学部
肩書（東京帝国大学総長　濱尾新）	個人
肩書（社団法人　義成社社長　濱弘一）	個人
肩書（岐阜県病院会幹事長　臨本鐵五郎）	個人
肩書（東京地学協会会長）	個人
肩書（清国留学生総代）	個人
肩書（大日本山林会幹事長）	個人
肩書（東京帝国大学農科大学学生総代）	個人
肩書（東京化学会副会長）	個人
肩書（林文会総代）	個人
肩書（学士会）	個人
肩書（農学会長）	個人
肩書（壽農会）	個人
肩書（農業教育研究会）	個人
肩書（農家大学生徒一同代表）	個人

佐藤三吉

写真パネル「肖像写真」	縁覚寺
写真「日記にて」	個人
佐藤先生寿像（昭和4年　斉藤素巖作）	縁覚寺
雑誌「日本之医界」（大正9年4月24日）	岐阜県歴史資料館
御紋章付銀花瓶	縁覚寺
銀盃	個人
銀製煙草入箱	個人
「紀元二千六百年祝典記念章」	個人
「紀元二千六百年祝典記念章」	個人
「朝鮮出征記念章」	個人
「昭和　大礼記念章」	個人
「昭和　大礼記念章」	個人
勲章「勲三等瑞宝章」	個人
勲章「勲三等瑞宝章」	個人
「大満洲国国建功労章」	個人
第26回日本臨床外科学会総会　記念講演（昭和39年）	縁覚寺
第26回日本臨床外科学会総会　記念表彰状（昭和39年）	縁覚寺
第26回日本臨床外科学会総会　記念メダル（昭和39年）	縁覚寺
写真パネル「臨床講義中の三吉」	「東京大学医学部外科学教二講座百年のあゆみ」から転載
写真パネル「親友青山規矩と三吉」	個人
写真パネル「ポリクリ（臨床実習）風景」	「東京大学医学部外科学教二講座百年のあゆみ」から転載
写真パネル「佐藤外科入手術室」	「東京大学医学部外科学教二講座百年のあゆみ」から転載
写真パネル「佐藤外科手術室内部」（明治39年）	「東京大学医学部外科学教二講座百年のあゆみ」から転載
書「『白絵之詞・・』」	個人
書「『朝外如人・・』」	個人
佐藤三吉筆五言絶句「聴相作」	縁覚寺
書籍「佐藤三吉先生伝」（昭和36年刊）	縁覚寺
写真「佐藤三吉先生顕彰碑除幕式」	個人

書籍「佐藤三吉博士顕彰碑建立記念『如庵』」（昭和44年刊）	縁覚寺
書籍「東京大学医学部外科科学教二講座百年のあゆみ」（平成5年刊）	縁覚寺
写真パネル「スリバとルッソの胸像」	東京大学
写真パネル「佐藤三吉像」（大正13年　小谷義也作）	東京大学医学部脳神経外科
写真パネル「青山規通像」（大正9年　新海竹次郎作）	東京大学医学部脳神経外科
写真パネル「愛用品（ペーパーナイフ・文鎮・顕微鏡・聴診器）」	東京大学医学図書館
薬巻置き台・筆・水差・硯・眼鏡・聴中時計・聴診器	東京大学医学図書館

和田万吉

写真パネル「肖像写真」	個人
直筆自宅表札（本郷区駒込西片町）	個人
写真「自宅玄関前庭での家族写真」	個人
写真「自宅蔵書にて」	個人
直筆日記手帳（二部初遊）（明治22年8月）	個人
名刺「東京都市上京区三本榎南町　監井直方」	個人
名刺「東京市本郷区駒込西片町　岐阜県士族」	個人
直筆日記「遊志亭日記」（明治23年1月21日～12月23日「全3冊」）	個人
直筆日記「朝鮮出張日記」（大正9年5月～6月）	個人
写真「『賀文』会　呉医学士送別会」	個人
写真パネル「東京帝国大学附属図書館」	個人
写真「東大図書館長室にて」	個人
名刺「正四位勲三等　文学博士」	個人
名刺「日本図書館協会長」	個人
名刺「東京帝国大学図書館長」（英語版）	個人
封筒（帝国大学）	個人
封筒（東京帝国大学附属図書館）	個人
写真「文部省図書館員教習所卒業式」	個人
直筆書『文』読書と図書館」	個人
書籍「図書館雑誌」（巻30号／大正6年4月）	個人
書籍「図書館雑誌」（巻36年第6号／昭和17年6月）	個人
直筆ノート「狂言解」	個人
（明治書院刊行の自著『校註　狂言選集』の稿本資料）	個人
直筆ノート「謡曲選解」（聖心学院用）昭和15年	個人
直筆ノート「b i b l i o g r a p h y（書誌学）」（英文）	個人
直筆ノート「年表1」	個人
直筆ノート「年表4」	個人
執事契約書（明治書院「校註　狂言選集」）	個人
著書「若草講理学」	個人
著書「新撰国文典　全」	個人
著書「日本歴史大綱　上」	個人
著書「日本歴史大綱　下」	個人
著書「日本歴史参照図表　先」	個人
著書「国史大綱強」	個人
著書「更洋笑存」	個人
著書「日本文典講義」	個人
著書「新更洋笑存」	個人
著書「謡曲物語　前編」	個人
著書「謡曲物語　後編」	個人
著書「日本近代画家在世年表」	個人
著書「書画鑑物語」	個人
著書「謡曲世界小話」	個人
著書「江戸時代笑話選」	個人
著書「図書館管理法大綱」	個人
著書「図書館小識」	個人
著書「謡曲物語」	個人
著書「野菜日記」	個人
著書「版画礼讃」	個人

著書「モンタスス日本誌」	個人
著書「アルス文化大講座」	個人
著書「鄰木和漢西洋録」	個人
著書「鄰木生徒会誌」	個人
著書「鄰木・黒木・青木（前編）」	個人
著書「竹取物語・今昔物語・謡曲物語」	個人
著書「校註　狂言選集」	個人
著書「謡曲選歌」	個人
著書「美術会会誌」	個人
著書「改訂新訂　古版地誌解題」	個人
著書「図書館史」	個人
著書「『悲』論」	個人
著書「日本書誌学概説」	個人
著書「古活字本研究資料」	個人
著書「日本文庫史研究」	個人
著書「図書館学大綱」	個人
著書「校訂本　【西鶴】好色一代男」	個人
著書「校訂本　【西鶴】好色一代女」	個人
著書「校訂本　【西鶴】好色五人女」	個人
著書「校訂本　【西鶴】西鶴置土産　世間胸算用」	個人
著書「校訂本　【西鶴】武家義理物語」	個人
著書「校訂本　【西鶴】日本永代蔵」	個人
著書「校訂本　【馬琴】椿説弓張月（全3冊）」	個人
著書「校訂本　【三馬】浮世床」	個人
著書「校訂本　【近松】曽根崎心中／心中天の網島」	個人
著書「校訂本　【近松】国姓爺合戦／女殺油地獄」	個人
著書「校訂本　【近松】冥途の飛脚／堀川波鼓」	個人
著書「校訂本　【近松】冥途の飛脚　上」	個人
著書「校訂本　【近松】冥途の飛脚　下」	個人
直筆戯画（包紙）	個人
直筆戯画（ハガキ）（6点）	個人
写真「欧米各国の図書館を視察」（明治42年）	個人
欧米視察の際に妻宛に短信した葉書（3点）	個人
書籍「新村出著書　万吉宛	個人
岡倉由三郎書簡　万吉宛	個人
小杉榲邨書簡　万吉宛	個人
山極勝三郎書簡　万吉宛	個人
和田三造書簡　万吉宛	個人
万吉書簡　三造宛	個人
万吉書簡　三造宛	個人

鎌木義昌

写真パネル「肖像写真」	個人
鎌木鉄五郎筆五言一句「翰墨伴清閑」	個人
写真パネル「第一高等学校卒業記念」（明治23年）	個人
使用した教科書「小学修身書」	個人
自筆「中学細菌人学試験問題集」	個人
自筆ノート「地形画遠要」	個人
自筆ノート「英語練習」（東京英語学校）	個人
自筆ノート「数学」	個人
自筆ノート「科学」	個人
辛巳歳証書　第一番小学（明治8年6月）	個人
辛巳歳証書　興文学校（明治14年1月）	個人
著作教科書「写真世界地理」	個人
著作教科書「女子算物教科書」（大正14年）	個人
著作教科書「女子算物教科書」（昭和5年）	個人
著作教科書「理科教科書」	個人
著作教科書「写真学校　算物教科書」	個人
著書「『重郎』から見た自然界　―東海道―」	個人
著書「『重郎』から見た自然界　―山陽道―」	個人
著書「ラジオ新書　日本の風土・支那の風土」	個人

著書「日本風景誌」　個人
著書「日本風景の研究　名勝の由来付名所考察」　個人
著書「日本地理風俗体系」　個人
直筆書「油彩画（伊吹山）」　個人
写真「帝国大学野科大学　地質学教室にて」　個人
写真「『天保七』五郎一家」（明治34年）　個人
写真「『ベルリンにて』（大正2年）　個人
帝国大学震災予防調査会第五部　「壽震災記念」から転載

関屋龍吉

写真「ネル「肖像写真」　個
写真「大垣中学1年生」（明治31年）　個人
写真「『東京帝立第一中学校卒業記念』」　個人
写真「『第一高等学校2年生』（明治39年）」　個人
写真「『東京帝国大学1年生　第一高等学校英文科同窓生』」　個人
写真「『東京帝国大学3年生』（明治42年）」　個人
写真「『文部省普通学務局長時代』（大正14年）」　個人
龍吉書簡（ハガキ）　渡部鼎一宛（12月30日）　個人
龍吉書簡（ハガキ）　渡部善兵衛宛（8月28日）　個人
龍吉書簡（ハガキ）　渡部善兵衛宛（10月8日）　個人
龍吉書簡（ハガキ）　渡部鼎一宛（4月13日）　個人
龍吉書簡（封筒）　渡部秀夫宛（11月）　個人
愛用の医皿　個人
公文書「日本青年協会　事業奨勧補助金下付申請」（昭和9年）　（財）日本青年協会
写真「ネル「『講話する関屋龍吉（日本青年協会　利根研修所）』」　「『関屋龍吉先生薨去』から転載
直筆書「『真心を歩け・土石石にならう』」　「『関屋龍吉先生薨去』から転載
写真「『渡欧の途中ラジオ』にて」（大正11年）　（財）日本青年協会
写真「『人形大使として　ワシントン大使館にて』」（昭和2年）　個人
写真「『ドイツにて』」　個人
写真「『ブラジル視察』」　個人
パスポート（ブラジル視察時のもの）　個人
財団法人　日本青年協会宛「『青年教育への期待』」　個人
財団法人　日本青年協会宛「『協会の家業相相神』」　個人
日本青年協会中央講習会記念写真帳（昭和5年）　（財）日本青年協会
日本青年協会中央講習会記念写真帳（昭和43年）　（財）日本青年協会
表札「日本青年協会分塾」　個人
写真「『国民精神文化講習会修了記念』（昭和14年）　（財）日本青年協会
著書「自叙伝『密中79年』」　個人
書籍「『岳県学寮70年の歩み』」　大垣市立図書館

伊藤伝右衛門

伊藤伝右衛門肖像画　片片野記念館
大右衛門書状　眼古地切屋宛（天明4年正月18日）　片野記念館
写真ネル「『鵜森伏越圏図』」　「『大垣市史　中巻』（昭和5年刊）
鵜森伏越圏普請図　林豊司画　大垣市編中館
三川分流工事要工に付き祭祀料願上書　（明治33年4月）　片野記念館
家族宛遺書（お見参宛）　片野記念館
鵜森伏越圏普請図　林豊司画　大垣市編中館
写真「『鵜森伏越圏図』」　「『大垣市史　中巻』（昭和5年刊）
大右衛門書状　眼古地切屋宛内宛（天明4年正月18日）　片野記念館
写真「『鵜森伏越圏図』」　「『大垣市史　中巻』（昭和5年刊）

協力者等一覧

大垣市制90周年記念事業　大垣ルネサンス先賢展の開催にあたり、ご協力いただきました関係各位に、心からお礼申し上げます。

（敬称略）

安藤　カヨ子、安藤　泰子、安藤　由美子、稲川　明子、井上　由子、井上　由子、岩越　健二、上杉　佐一、上田　千枝子、江口　純朗、江崎　孝三郎、江崎　美奈子、江馬　斉一郎、江馬　寿美子、遠藤　正治、大野　久美甫、大場　航、大橋　邦典、小川　信也、小川　哲也、奥田　忠雄、小倉　君江、小関　正一、小西　光明、影山　智洋、加藤　智、金石　教子、金森　基雄、川瀬　美樹、木全　希巨人、吉田　ちよ子、紀平　太郎、紀平　悌子、義見　静馬、久留間　昭子、久世　弥平、久保尾　俊郎、久保田　五十一、黒下　みゆき、桑原　まゆこ、小林　郁子、小森　茂、近藤　晃行、佐久間　敏雄、佐竹　英哉、清水　晴美、清水　武、清水　淑子、杉原　幸子、杉本　和子、須崎　一己、関根　美津子、関根　龍太郎、関屋　潔、大滝　由紀子、高橋　和夫、田口　義嘉壽、竹田　善隆、立川　元彦、立川　麗子、田中　豪、谷　貞宏、津上　智実、月城　文子、土屋　嶢、豊田　武司、中山　秀幸、那波　節子、那波　光俊、名和　民夫、野一式　勇、野村　和子、橋本　久美子、長谷川　文子、林　新太郎、原　みさ代、樋口　健司、広瀬　和子、福井　理恵子、藤尾　昭定、藤本　芳徳、古田　正弘、古舘　多寿子、片尾　徹、細井　美欧、蒔田　義信、松本　修、松本　好弘、馬渕　恵津子、丸山　幸太郎、三輪　茂子、三輪　春雄、三輪　隆一、安武　清子、柳瀬　さだ、矢野　良和、矢橋　修太郎、矢橋　善治郎、山岡　耕春、山川　誠一、山口　峻、山口　昇二、山田　賢市、山田　賢二、山田　友美子、山田　弘美、由川　史比古、和田　悌二、和田　洋一、渡辺　千代子、渡利　正彦、

大垣市立荒崎小学校、安楽寺、池坊裏千家安部華道教室、イビデン（株）、エーデルワイス、絵めーるゆうえ倶楽部、縁覚寺、大垣「ます」生産者実行委員会、大垣オカリナの会「ほほえみ」、（株）大垣共立銀行、岐阜県立大垣工業高校、大垣市室内管弦楽団、（財）大垣市体育連盟、大垣ジュニアリーダーズクラブ、大垣商工会議所、大垣消防組合、大垣女子短期大学、ＮＰＯ法人大垣市レクリエーション協会、大垣日本大学高等学校、大垣聞香の会、大谷大学真宗総合研究所、大谷大学図書館、大谷大学博物館、憶念寺、押し花サークル、小樽市総合博物館、お話の会「大きな樹」、おり紙の会、案山子の会、学習院、華渓寺、片野記念館、金森星寿会、きど保育園、岐阜経済大学、岐阜経済大学鉄道研究会、岐阜県危機管理課、岐阜県博物館、岐阜県防災士会西美濃ブロック、岐阜県歴史資料館、岐阜県立岐阜工業高校、岐阜市歴史博物館、久留間昭子社中、京都大学大学文書館、京都大学付属図書館、近畿日本鉄道（株）、クレイクラフトＯＢ会、京浜急行電鉄（株）、大垣市立興文小学校、神戸女学院大学図書館、コーラスとき、国立科学博物館、国立国会図書館、西圓寺、慈渓寺、十六町自治会、松濤寺、浄土真宗東本願寺派本山東本願寺、常楽寺、真照寺、誓運寺、西濃運輸（株）、西濃鉄道（株）、禅昌寺、大正琴「ハイビスカス」、太平洋工業（株）、竹島町自治会、立川勇次郎氏顕彰会、谷中天王寺、樽見鉄道（株）、ＮＰＯ法人樽見鉄道を守る会、終の住まい研究会プラチナプラザ、つばさ、デコメロ　カルテット、ＮＰＯ法人デジタル・アーカイブ・アライアンス、（財）鉄道総合技術研究所、鉄道博物館、てんてこ座、東海旅客鉄道（株）、東京藝術大学音楽学部、東京大学医学図書館、東京大学地震研究所、東京大学総合図書館、東京大学東京大学史史料室、東京大学農学系総務課、東京大学農学生命科学図書館、（株）東芝、童話の会「たんぽぽ」、中山道ミニ博物館、中日本自動車短期大学、（社）日本外科学会、（財）日本青年協会、（社）日本図書館協会、ＮＰＯ法人パソコンまる）とアシスト、発泡スチロール工作保存会、はなのわの会、ビアン　シャンテ、東松栄会、東山動植物園、ぴっくりばこ、ひびき会一絃琴、フラウタース、北海道大学付属図書館、まちづくり工房大垣　歴史観光グループ、丸の内保育園、ミズノ　テクニクス（株）、ミズノ（株）、みそぎ保育園、みのり保育園、明覚寺、名阪近鉄バス（株）、森茶華道教室、養老町、養老鉄道（株）、慾斎研究会、寄せ植え華道協会西濃支部、リコーダーフレンズ、（財）霊山顕彰会岐阜県支部、れんげ草の会、わかたけ保育園、早稲田大学図書館、

Ｂｒｕｃｋｅ（ブリュッケ）、Ｃｏｒｏ　Ｓｏｌａｎａ（コーロ　ソレーナ）、Ｆｅｌｉｃｅ（フェリーチェ）、ＪＲ東海大垣駅、ＪＲ東海名古屋吹奏楽団、ＪＲ東京総合病院、Ｌａｔｅｒｎｅ、ＳＬ保存会

主な参考文献

色のない地球儀、江馬細香展、大垣驛七十年の歩み、大垣共立銀行百年史、大垣市史、大垣商工会議所百年史、大垣青年會誌、大垣のあゆみ　市制七十年史、大垣の先賢展　飯沼慾斎、大垣の先賢展　小原鉄心、大垣の先賢展　金森吉次郎翁、大垣の先賢展　戸田公と大垣、大垣の先賢展　蘭斎と細香、おおがき芭蕉生誕三六〇年祭「特別展」芭蕉と美濃大垣の門人たち、京大土木百年人物史、郷土大垣の輝く先人、京都大学工学部土木工学教室六十年史、京都帝國大學史、「月刊」西美濃わが街、国土を創った土木技術者たち、壺中七十年、地震学事始　開拓者・関谷清景の生涯、翔平君への手紙、墨俣町百十一年のあゆみ、スポーツは陸から海から大空へ―水野利八物語、西濃地方の開発に灯をつけた人、太平洋工業株式会社七十五年史、体連五十年、溪毛芥　南條文雄父子展、父と娘の昭和悲史、東京大学百年史、東京電気株式会社50年史、図書館を育てた人々、戸田氏共公、土木學會誌、西美濃ゆかりの女性群像、野村龍太郎傳、文教のまち大垣、ミズノ創業百周年記念誌、美濃大垣の先賢、明治・大正の日本の地震学、明治前期の官営幌内炭鉱と幌内鉄道の建築に関する歴史的研究、梁川星巌と紅蘭　ブロンズ像建立記念、慾斎研究会だより、輪中と治水

大垣市制90周年記念
大垣ルネサンス先賢展記録誌
先賢展本

編集・発行　大垣市かがやきライフ推進部市民活動推進課
監　　修　大垣市市史編纂室
発 行 日　平成21年（２００９）３月